
とりあえず走れ

どぶねずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず走れ

【Nコード】

N6044P

【作者名】

どぶねずみ

【あらすじ】

みんな違ってみんないい。風見鶏学園で繰り広げられるどたばたコメディ。4月は入学の、そして、残酷な月。新入生たちは、ときには傷つけ合い、ときには協力し合い、理不尽な社会と対決していく(?)。大人はきたない〜！

・・・え？金子みすずって自殺したの！？

※この作品はフィクションであり、作中に出てくる固有名詞は実際にあるものとは一切関係がありません。また、それらを批判するこ

とを目的としたものでもありません。

4月編、終了しました。それに伴い、題名を変更しました。目指せ
！ 1日100ユニーク！

プロローグ

「人類ですって？ そんなものは抽象名詞です。昔から存在していたのは人間だけです。将来も存在するのは人間だけでしよう。」

ゲエテ

4人の学生は山森の中を歩いていった。不安はあるもののゴールは近く、軽い足取りで土道を進んでいく。

「ふう、このトンデモ強歩大会もようやく終わりだねえ」

小柄な学生は周りの3人を見上げて言った。

「ああ。俺は風見鶏学園に入学したことを心から後悔しているよ」

小太りの学生は今までを振り返り、ため息を吐いた。

「まさか、入学早々にこんなことをやらされるとは……」

大柄な学生は自身のたるんだ腹を撫でた。

「俺たち、まだ教室はおろか、学校そのものにも行ってないんだよな」

細身の学生がそう言うと、4人は顔を見合わせてその事実には愕然とした。

4人は森の中を歩いていく。

「……なあ、もし、もしもだぞ。時間を止められたら、どうする？」

小太りの学生は細身の学生に聞く。

「……おっぱいを揉む、かな？」

「！ ばっかじゃないの！ なんで君たちはそんなに下品なんだ！ 顔を赤くして怒ったのは小柄な学生だ。」

「そうだぞ。俺たち、もう高校生なんだから少しは考えて発言するっちゃ」

大柄な学生はそう言って細身の学生を諭す。だが、その後がいけな

かった。

「いいか？ 時間が止まっているってことは、おっぱいのスンバラシイ弾力は失われてるっちゃ！ だから、揉んだって気持ちよくないっちゃ！」

「ばか！ 君たちはすんごいばかだ！ ばかで下品だ！」

4人と1匹は森の中を歩いていく。

「……ついてきているか？」

「……怖くて振り向けないよう」

「ところでゲン、時間を止められたら、おまえだったらどうするっちゃ？」

「そうだなあ」

苦笑を浮かべ、小太りの学生、高坂源一郎は最初に自分から振った会話の内容について考えた。

時間が止められたらという会話は、ドラえもんの道具が使えたらと並ぶ、現実逃避したいときに思い浮かぶ最たるものだろう。

そして少し、ほんの少しだけ考えて、源一は叫んだ。

「とりあえず……、走れ！」

4人はそれを合図に走り出した。それを見て後を追いかける一匹。4人がなぜこんなことになったのか、それに答えられる者はこの場にはいない。4人は必死になって一匹から逃げた。

「ねえゲン。なんで？ なんでボクたちはこんなところでワニに追いかけられているんだよお！」

「いいから足動かせえ！」

季節は春。ここにはつくしも桜も、杉花粉すらも存在しない。ただただ原生林が続く中、4人の悲鳴が響いていた。

1日目 1

朝日が残雪に反射した。始発を待つ高坂源一郎は顔を照らす日光に顔をしかめ、立ち居地をずらした。

源一以外誰もいない駅のホーム。電車が到着するまではまだ時間があるが、源一はストーブの灯る待合室にいる気にはなれず、寒風の中、故郷が朝の光を取り戻していく様子をただ黙然と眺めていた。静かな朝が翳った。ホームに人が入ってきたのだ。

少女だった。ここまで走ってきたのか白い息を吐き出し、大きな瞳で源一を見ていた。

少女は、早朝の涼気を大きく吸い込むと、源一の隣に並んだ。源一は少女を見向きもしない。

少女は口を開いた。

「行っちゃうんだ」

「ああ」

少女は言葉をつなげようとするがなにも喋れず、開いた口を閉じた。しばし無言の時間が流れる。

少女は、再び源一に話しかけた。

「剣道、続けるよね」

源一は答えない。少女は源一に向き直り、無理に笑顔を作った。

「剣道、辞めちゃ駄目だよ。ずっと続けてきたのに、辞めたらもつたない」

「結果どうなった？　いろんなものを失くして、俺はこっそり故郷を出るわけだ」

少女は押し黙った。イライラする。源一が故郷を出るのは、剣道をやっていたせいでも、まして少女のせいでもない。自分自身のせいであり、それをわかっていながらも少女に八つ当たりしてしまう自分自身に源一はイライラしていた。

電車の到着を告げるアナウンスがホームに鳴り響いた。時間だ。

源一は足元に置いてあったバックを担いだ。
電車は駅に到着し、ゆっくりと扉を開いた。

源一は白線を越えて電車に乗り込んだ。息が白くなるほど寒いホームとは違い、暖房の効きすぎた電車内は、汗が吹き出るほど暑かった。

そこで、源一は初めて少女を見た。下を向き、大きな瞳に涙を溜めている。源一は苦笑した。源一の出発など少女にとっては取るに足らないことだろうに。

「えっと、朋絵」

少女は名前を呼ばれて顔を上げた。源一は顔にぎこちない笑みを浮かべて、少女に言った。

「もう少し時間が経って、冷静に考えられるように、ちゃんと自分に向き合えるようになったら、そうしたら戻ってくるから」

「うん……、うん！」

少女は何度も頷き、涙を零^{こぼ}した。少女はしばらく会えない幼馴染の姿を目に焼き付けようとするが、涙で滲^{にじ}んだその姿はぼやけてよく見えなかった。

「じゃあ、またな。朋絵」

「うん、またね、源一！」

哀愁、懺悔、それらを断ち切るように扉は閉まり、不安、期待、それらを目指して電車は新天地に走り出す。

少女は栗色のおさげをなびかせ、手を振りながら電車を追いかけて走っている。

源一は、だんだん小さくなっていく幼馴染が見えなくなるまでその場に立ち続けた。

振り返ればセピア色の美しい思い出。

それがほんの数時間前のことだ。

「……て、ギャップがありすぎるだろ！」

源一は誰に言うでもなく叫んだ。

源一が乗っているのは輸送用の大型軍用ヘリ。ローターの爆音が容赦なく源一の耳を打つ。

「なんだ？　なんでこんなことになっているんだ？」

本来なら今頃は入学式のはずだった。源一は、全寮制の私立高校、風見鶏学園に入学するために故郷を出たはずだったのだ。それが校門前で大型バスに乘せられ、流れるようにこのヘリに移乗させられ、今に至る。

窓の外はしばらく前から青一色、海だ。同乗者は同じ風見鶏学園の制服。どうやら全員同じ男子新入生のようなうだ。彼らも源一と同じく状況が理解できていないようで、その表情には不安、困惑を浮かべ、中には奇声を上げて混乱するものもいた。

源一は隣に座っている男を見た。その男は足を組み、騒いでいる周りを楽しげに見ていた。男は源一の視線に気付き、片頬を吊り上げた。

「やけに落ち着いているな」

「ん？　ああ。周りが騒いでいるとかえって冷静になるタチだね。それに、ここで騒いでもどうしようもないだろう？」

源一は男を観察した。強い眼光に180を超える長身。制服の下は直でTシャツ。右耳にはピアスをしている。その反骨的な姿勢は、いかにもな「不良」だな、と、源一は思った。

男も源一を見る。分厚いメガネ。160に達しない小柄な身長に広い肩幅。格闘家を肥満で片付けるタイプには、そのまま小太りのチビに映るだろう。が、脂肪の下には、鍛え上げられた筋肉で覆われていることが男にはわかった。

男は源一に手を差し出した。

みさきしやうこ

「三崎省吾だ」

「高坂、源一郎」

源一は男、三崎省吾の手を握った。ごつごつした、人を殴り慣れた拳だった。

「このタコ、剣道か？」

省吾は源一の手にある剣道ダコに気付き、聞いてくる。

「ああ。去年の夏までやっていてね。部活が終わって練習をやらなくなったらこの有様だよ」

そう言っ、源一は自身の腹を撫でた。源一にしてみれば、剣道を現役でやっていたときに比べて格段に筋肉が落ち、脂肪の付いている腹だったが、それを知らない省吾には十分に引き締まった、鍛え上げられた腹筋に見えた。

お互いがお互いを一目置いた、高坂源一郎と三崎省吾の出会いだった。

1日目 2

どれほどの時間が過ぎたろうか。源一たちはバスに乗り込む前に荷物や携帯を取り上げられているために正確な時間はわからない。日の傾き加減から、昼に近いとわかるのみだった。

突然運転席の扉が開く。そこから出てきたのは、サングラスをかけた黒服だった。

黒服は困惑する学生たちに紙袋を渡していく。源一は紙袋の中を見た。入っていたのは銀紙に包まれたおにぎり、水入りの500ミリペットボトル、それと地図だった。地図には島と、スタートとゴールを結ぶ螺旋状の進行ルートが描かれている。

中を確認したり、使用法を考えたりとあれやこれやを考えていると、ヘリが大きく揺れた。着陸したようだった。それと同時にヘリ内にアナウンスが響く。女性の声だった。

『リクルート（新入学生）諸君、遠路ご苦勞だった。ここは風見鶏学園所有の無人島、地獄極楽島だ』

「……もう少しネーミング考えたほうがいいんじゃないか？」
うるしはらかずこ

『私は漆原和子。風見鶏学園の校長、つまり、君たちのマスター（ご主人さま）だ。今から君たちには3日間をかけてこの島の頂上を目指してもらう。これは強歩大会であり、これを機会に新入生同士で友情を育んでもらいたい』

ヘリ内は非難轟々。しかし、アナウンスはそれらを見做して続く。『さらにこの強歩大会の順位でそのままクラス分けされることになる。これは、今年1年間のハンモックナンバーと捉えてもらいたい』『ハンモックナンバーって、どこの兵学校だよ……』

ハンモックナンバーとは、海軍兵学校における席次だ。軍事という即断即決が要求される分野において、命令権は極めて重要な意味を持つ。従来は、階級の高いものの命令が優先され、同じ階級である場合は海軍兵学校の卒業年度の早い順。そして、卒業年が同じ場

合は、席次順、つまり、ハンモックナンバーが優先されることになる。

校長は暗に言っていた。このレースで学校内における1年間の立場が決まる、と。

『島内には毒蛇や猛獣も存在する。正規ルートを外れてショートカットをすることもできるが、その場合は命の保障はしない。自己責任で行動してもらいたい。では、健闘を祈る』

ぶつりと、一方的に始まったアナウンスは一方的に終了した。ざわめきの中、後部ハッチがゆっくりと開かれていった。

眩むような陽光、熱砂の白、木々の緑。

そこは、砂浜だった。

黒服は新生たちにヘリから出るように合図する。その勢いに押されるように、新生たちはヘリから降りていく。源一と省吾も並んでヘリから降りていった。

圧倒的な光が学生たちに降り注いだ。薄暗いヘリ内とは違い、遮るもののない砂浜は太陽が容赦なく照りつける。

砂浜には数台のヘリと150人の新生学生で溢れていた。

「暑いな」

「ああ。ここ、日本か？」

そこは、まだ肌寒さが残る日本の4月ではあり得ない、常夏の気候だった。冬服の学生服を着ている源一は胸元のボタンを外す。

ヘリは学生が降りたのを確認すると、一斉に飛び立っていった。取り残された学生たちは、呆然と小さくなるヘリを見送っていた。

「さて、と。これからどうするかな」

「とりあえずは腹ごしらえしとこうぜ」

省吾はそう言っていると、砂浜に座りこんでおにぎりの銀紙を開いた。源一もそれに倣^{なら}う。

「地図を見ると、ここはこのスタート地点になるのかな」

「ああ。それで、ゴールはあの山の上、か」

地獄極楽島は楕円の島になっていて、その中心に台地のような裾の広い山がそびえていた。地図を見ると、その山を螺旋状に何週もして進むコースが提示してあった。

地図にはその他にいくつかの注意事項と、4箇所の丸が記されていた。

「この丸が記された場所がチェックポイントになるわけだ。えっと、今日の夜と、明日の昼夜。あと、明後日の昼と。時間内にチェックできなければ失格、か。ずっとここにいて失格になったほうが楽そうだなあ」

「いや、そうでもないぞ」

省吾は顎で隣にいる学生を指した。その学生は、源一たちとは違い豪華な弁当を食べていた。価格でいうのなら、源一たちのおにぎりはどうひいき目に見ても200円以下。対する隣の学生は、特売であつても2000円は下回らないだろうという差だ。

「……どういふことだ？」

「高坂、おまえ、いつ頃学校前に到着した？」

「遅刻はしてないぞ。ぎりぎりだったとは思うけど」

「ああ。俺も同じくらいの時間帯だ。同じへりだからそうだとは思ったが、な」

「？ おい三崎、なにが言いたいんだ？」

「ハンモックナンバーのシミュレーションだよ。学校に早く到着して早くにへりに乗せられた連中は、席次が上でまともな弁当が食えて、席次の低い俺たちは粗末なおにぎりしか食べられないってことだ」

「ご機嫌だな。この学校には平等って言葉は辞書にないってことか」「多少無理しても上位を狙ったほうが、この1年で優遇されることになるだろうな」

「地獄極楽島か。安易なネーミングだと思ったらひねりもない、そのままの意味だったのか」

「そうらしい」

省吾はおにぎりを食べ終わると立ち上がった。源一もおにぎりの最後のかけらを口に放り込んで立ち上がる。

すでに先頭はスタートしている。それに蟻の行列のように続く学生たち。

「ま、せっかくやるならトップを目指してみるかな」

「なんだ、やる気じゃねえか。不良ってのはこういったイベントには消極的なイメージがあるけどな」

省吾は片頬を吊り上げる。

「高坂こそ。もう1年近く身体動かしてないんだろ？ その鈍った身体で俺についてこられるか、スポーツマン？」

源一も口の端を吊り上げた。

「見たところ50キロもないな。山登りだとしても3日もいらぬ。今日中にゴールしてやろうぜ」

絡む視線、2人は息を合わせたように砂を蹴り、走り出した。

緩やかなのぼり坂、高坂源一郎と三崎省吾は全速に近いスピードで駆け上っていく。抜かれた学生たちは遅れぬように源一と省吾の後に続いて走り出す。強歩大会は、いつの間にか持久走大会のようになっている。

片側は斜面、その下は砂浜になっており、坂道を登る度に標高は高くなっていく。

「おい、待てよ！」

その声は、源一と省吾が横を通り過ぎた5人組から発せられた。

ガラの悪い連中だった。反射的に足を止めてしまった源一は、5人の姿を見て、思わず苦笑をもらしてしまった。染めた茶髪と地毛の黒でまだらな頭。指輪やネックレスなどの装飾品。一番の特徴は、5人が同じ格好をしていることだった。同じように髪を染め、同じように装飾過多な小物を身につける。服の崩し方すら同じ傾向が見

て取れた。

「俺のこと、呼んだか？」

いつの間にか源一の隣に並んでいた省吾は5人に答えた。

背の低い源一にならともかく、本来ならば、5人は外見からして格の違いのわかる省吾には声をかけなかっただろう。突然軍用ヘリに乗せられ突然山登りを強要されるこの状況に、5人は混乱していたのかもしれない。あるいは常夏の暑さのせい、春の陽気のせい。

5人は三崎省吾に喧嘩を売った。

「おまえら、誰に断って俺たちの前を走ってるんだよ！」

源一は横目で省吾を見た。省吾は困ったように肩を竦める。それを馬鹿にされていると取った5人は目に見えて顔を赤くした。

「なめてんじゃねえぞ！」

その言葉に源一は大きくため息を吐き、省吾は軽蔑するように目を細めた。

「おい三崎。こいつらおまえと同種の不良だろ？　なんとかしろよ」

「こんなに安っぽい奴らと一緒にされるのは正直不愉快だ」

5人は無言で左右に広がり、源一と省吾を囲んだ。

源一はその行動を少しだけ意外に思った。5人の取った行動は、源一と省吾を逃がさないようにする連携した動きだった。それが自然に行えるということは、あるいはこの5人は喧嘩慣れしているのかもしれない。源一はそう思ったが、その考えは間違いだということに即座に気付いた。

5人のうちの1人が、省吾の胸倉を掴もうと前に進んだ。

「ばーか」

源一が咄くのと同時に省吾の胸倉を掴もうとした1人は、文字通り吹き飛んだ。不用意に間合いに入った瞬間に即頭部にハイキックをもらったのだった。直後に省吾は、隣にいた男を殴り倒していた。

「なんだ、こいつら慣れているのは弱いものいじめだけか。本当に低俗な連中だな」

パンチングマシンで記録を狙うような大振りパンチをかわし、源一はすれ違いざまに拳を叩き込む。柔らかい肉の感触は、竹刀を握りなれた源一の手には新鮮だった。

そのときだった。

源一は総毛だった。剣道の試合中、絶好のタイミング、渾身で放った一撃がかわされたときに感じるあの悪寒。

――斬り返しが来る！

そう思った瞬間には源一の身体はすでに動いていた。全身のバネを使っておもいきり真横に飛ぶ。半瞬の差、源一の頭部のあったところには、省吾の人を殴り慣れた拳があった。

源一はそのまま10メートル近い斜面を転がり、砂浜に落ちた。

省吾は片頬を吊り上げ、斜面の下にいる源一を見下ろした。

源一は砂の上に倒れたまま斜面の上にいる省吾を見上げた。

「悪いな、先に行くぜ」

「気にするな、すぐに追いつく」

まるで、殴りかかれたことなどなかったかのような会話。

源一は、ゆっくりと身体を起こし、身体の異常をチェックした。軽い打ち身のみで、壊した箇所はなかった。

ゆっくりと首を回す。ふと気付いた。源一は、なぜかにやけていた。「ああ、そうだな。こうでなくっちゃな」

省吾とはほんの数時間前に知り合った中で、友人というわけでもない。その他人に突然殴りかかれたからといって、それは裏切りでもなんでもない。むしろ、隙があるならつけいるべきであり、省吾はそうしたに過ぎない。自分すら信じられないのに、他人を信じるというほうが間違っているのだ。

源一は一度顔を手のひらで撫で、気を引き締めると再び走り出した。

1日目 3

源一がスタート地点に戻ったときには、最初から強歩大会への参加を拒否している数人の例外を除いて新入学生全員がスタートした後だった。

図らずも最下位スタートになった源一は、^{ほか}氣負うでもなくランニングペースで山登りを再開した。

緩やかな上り坂を10分も走った頃、道が曲がった。崖道から林道に変わり、強歩大会はその様相を一変させた。

くもの巣状の網、池の中に立てられた杭、アスレチックコースだった。コースは次第に難易度を増していき、過激さが表に出始めたころ、ぽつりぽつりと脱落者が出始める。大会が始まってまだ1時間足らずだ。少数ではあるもののすでに脱落者がいることに、源一郎はこの強歩大会の過酷さを嫌が応にも思い知らされていた。

そして、源一にとっての最初の難関が立ちはだかった。

坂だ。いや、坂と呼ぶには急すぎる。傾斜角は80度を超える3メートルの壁がそびえ立っていた。

「……これ、越えろってのか？」

手を伸ばしてみる。当然壁の上部には届かない。軽く飛び上がってみるがやはり結果は変わらなかった。さてどうしようかと考えていると、森の中から誰かが出てきた。

小柄な美少年だった。色素が薄い淡い色の髪を後ろで結び、白い頬を泥で汚している。綺麗に整った顔立ちは、あるいは精巧なドールに例えられるかもしれない。だが、不敵さを称えるその表情が少年がドールではあり得ない活力を生み出していた。

サイズの大きい学生服の袖を引っ張り細い手首を露出させると、美少年は源一存在に気付いて意地の悪い笑みを浮かべて源一を見上げた。

「なんだ、まだ後ろにいたんだ。ずいぶんゆっくりしているようだね」

「ああ、スタートに遅れてね。どうやら俺たちが最後尾らしい」

「運のいいヤツだな。前を行った連中の多くは理不尽なトラップに引っかかってリタイアしているようだから」

「理不尽なトラップって？」

美少年が顎で指し示した先は壁の横だ。源一はその場所を覗いた。

そこは、地獄絵図だった。倒れている人、人、人。足首に縄がかかり逆さまに吊るされている人、警察の強襲班が使う対犯罪者捕獲用のネットで木の幹にくくりつけられている人。穴の底からは「だしてくれー！」と悲鳴が途切れることなく聞こえてくる。

「……うわあ」

「壁越えを避けて横道に逸れた連中は知らずにトラップの中に侵入することになっていているようだね。面倒なことだけど、指定された道を進むのが一番楽で安全みたいだ」

源一は美少年を見た。顔も身体も、小さかった。160に達しない源一が見下ろすほど美少年の背は低い。

「それで、どうやってこの壁を越えるんだ？」

美少年は、ふふんと鼻を鳴らして手に持っているものを源一に見せた。それは、植物のツタで作ったロープだった。先には枝をくくりつけている。

「人類は知恵によって発展してきたんだ。肉体派ってのは野蛮だね」美少年は頭上で縄を回すと、一気に壁に投げつけた。縄は壁の上部にひっかかり、美少年は壁に足をかけた。

「じゃあねじリッけつ。先に行かせてもらうよ。ああ、別にボクの真似をしてもいいよ。模倣というのは愚民にとっては優れた技術だからね。君みたいなグドンなお猿さんにはお似合いだよ。あっははは！」

「……」

美少年はよちよちと壁を登っていく。半分ほど登ったところで、源

一は、美少年の腰を掴んで引き摺り下ろした。

「んぎゃあ！」

尻から地面に落ちた美少年は、涙目で源一を睨みつけた。

「なにするんだ！」

「いや、つい……」

「ああ、縄が切れてる！」

がつくりとうな垂れる美少年。

源一は軽く屈伸すると美少年と壁から離れた。

深呼吸。大きく吸い込み、ゆっくりと吐く。それを数回繰り返し、

源一は叫んだ。

「よっし！」

足に力を入れ、地を蹴る。目前には3メートルの壁。蹴りあがり、三角飛びの要領で一気に壁の上部に手を伸ばす。

「せや！」

「うお！」

あと数センチ、壁の上部に届きかけた源一の手は、しかし、かかることはなく下に落ちていった。飛び上がるころを美少年に足首を掴まれたのだ。

源一はバランスを崩し、美少年の上に落ちた。源一は美少年の細く柔らかい身体の上に押し掛かるように倒れた。

「せやじゃねえだろせやじゃ」

「うゝ、おーもーいゝ。早くどけえゝ！」

源一は身体を起こした。源一の下で荒い息を吐いている美少年。涙はまつ毛を濡らし、大きな瞳で源一を見上げていた。

不覚にも、源一はときめいた。

美少年の整った顔立ちは女顔で、格好を整えればそのまま美少女で通るほどだった。むしろ、美少女が男装をしているといったほうが正しく思える。

「おまえ、ひょっとして女か……、ぐは！」

源一が言い終わるより早く、美少年の蹴りが源一の腹を突き上げた。

美少年は立ち上がり、倒れている源一に指を突きつけた。

「いいか！　ボクを女みたいだって2度と言うなよ！」

「……ああ、悪かったよ」

女顔にコンプレックスにあるのかもしれないな、と、源一はそのときそう思った。源一はこの美少年、朝比奈悠樹あさひなゆうきが実は女の子であることは当然知らない。

源一は立ち上がり、埃を払った。そして、美少年と肩を並べて壁を見る。

「オイ、メガネ」

「メガネってなんだメガネって」

「だってボクは君の名前を知らないもん」

「俺だっておまえの名前を知らない」

美少年は源一に向き直った。

「ボクは朝比奈悠樹だ」

「……高坂源一郎」

2人は視線を交え、自然と笑みをこぼした。

「源、イチ、ろー……。ゲンいち、げん、ゲン……」

悠樹はしばらくぶつぶつと独り言を呟くと、源一に向き直って言った。

「ねえゲン、ひとつ提案があるんだけど。ドウメーを結ばないか？」

「同盟？」

「うん。どうやらこの強歩大会、一筋縄ではいかないみたいだからね」

それは源一も感じていることだった。トラップの質を見ても、命がけ、とまでは言わないまでも相当危険なものが仕込まれているのだ。

「……俺にメリットがない」

「あるよ。ひとりならこの壁を越えられないけど、2人なら楽勝だ」
源一は頭を掻いた。源一は、ひとりでも壁を越える自信があったが、もしこの「同盟」を断れば、先にしたように朝比奈悠樹は源一の行動を妨害するだろう。また、確かに2人ならそれほど苦勞せずにこ

の壁は越えられるだろう。

悠樹を見る。悠樹はまるで断られることなどありえないというように源一を見上げていた。そのほんわかした笑顔で、源一の毒気はため息とともに抜かれていった。

「ま、いいか」

「そっか！ えへへ。それじゃあゲン、よろしくね！」

悠樹は、小さな手で剣道ダコのある源一の右手を取った。

朝比奈悠樹

フランスのブルボン朝期にジャルジェという伯爵家があった。ジャルジェ家は武門の家系で代々の当主は軍人として活躍していた。

あるとき、問題が発生した。ある当主の代で、なぜか男子が生まれなかったのだ。何代にもわたって軍隊で活躍してきたジャルジェ家が軍人を輩出できないのは大きな問題だった。

産まれども産まれども女子ばかり。最後の望みを込めて作った子供も、やはり女子だった。当主は、半ばヤケクソ気味に生まれたばかりの女子を抱き上げて叫んだ。

「この子は男だ！」

こうして男として育てられた子供、オスカル・フランソワは、マリー・アントワネットの知己を得て宮廷や軍隊で活躍し、フランス革命のときには衛兵隊を率いてバステュー襲撃に民衆側として参加したという逸話がある。

朝比奈悠樹は女である。これは、生物学的分類の上での事実だった。だが、朝比奈悠樹は男として育てられた。

朝比奈家は名家だ。家系図を遡ればその端は鎌倉時代に見ることができ、雲上人としてときには関白も輩出しているほどの家柄だった。

貴族政治から武士の時代、また、明治維新に大東亜戦争と時代が変わっても朝比奈家は隠然たる力を保持し続けてきた。面には出ず、代々続く人脈と莫大な資金源で政財界に強力な影響力を持つ、それが巨大組織群、朝比奈家だった。

そんな朝比奈家にも問題があった。今上の当主に男子が産まれなかったのだ。

正妻の子供と、妾めかけの子供、全て女子だった。跡継ぎを心配する側近

の苦言に党首は鼻をほじりながらうるさげに手を振るのみだった。
そんなときに悠樹は産まれた。

上には8人の姉がおり、当主の年齢的にも最後の子供になるだろう悠樹が女子だとわかったときの家中の落胆は凄まじかった。

当主はそんな家中の様子を横目に、9人目の女子を産んだ正妻にねぎら労いの言葉をかけた後、悠樹を抱き上げて叫んだ。

「この子は男だ！」

そのときの当主の様子を側近は「ヤケクソ気味に」、正妻は「笑いかみ殺して」叫んだと後に述懐する。

絶大な権力を持つ朝比奈の当主が白と言えば、黒も白に変わる。こうして悠樹は男として育てられることになる。悠樹はこういった経緯から、社交界では「ジャルジェの息子」と揶揄されることになった。

勢いで叫んで、産まれたばかりの子供を男として育てたことに多少なりとも後悔があったのかもしれない。当主は、悠樹を普通の女の子に戻すために女学校に入れた。しかし、その中でも悠樹は男として振舞うことを許可されていた。当主がなにも言わずとも悠樹の「ジャルジェの息子」としての知名度は高く、朝比奈の影響力を受ける教員や良家の子女が悠樹を男子として扱ったためだ。

悠樹が中学3年、14歳のときのことだった。悠樹は父親である朝比奈家当主に寄宿舎学校から呼び出された。

学校を早退し、呼び出し先である会員制高級ホテルのスイートルームに入った悠樹は父親と対面した。

「父さん、お久しぶりです。なんの御用でしょうか？」

当主はイスから立ち上がり、部屋に入ってきた悠樹を見た。

悠樹は女学校にあって特注の男子学生服にその身を包んでいる。だが、140に達しない身長は、男子はおろか中学生というにも無理があるように思われた。

当主はあえてしかめ面を作って言った。

「学校のほうはどうだ？」

「ええ、つつがなくやっていますよ。今の時期、他校では高校受験に忙しいようですが、うちはエスカレーターですからね。平和なものです」

微笑を浮かべる悠樹。その顔を数秒眺めた後、当主は言った。

「悠樹、もう、男を止めていいぞ」

悠樹の頬が凍りつく。

「あの……、申し訳ありませんが、仰おっしゃる意味がわかりません」

当主は、しかめ面を崩し、笑うしかないといった表情を作った。

「いや、子供というのは簡単に曲がるなあ」

次の瞬間には、当主は高級なカーペットの上に伏していた。嫡男、もとい嫡女に殴り倒されたのだった。

悠樹は後にこのときのことを高坂源一郎にこう話すことになる。

「んー、今でもなんであんなことしたのかわかんない。とにかく頭の中が真っ白になっちゃったんだ。あれがキレルってヤツかなあ？

怖いねえ、ストレス社会。あはは♪」

翌日から悠樹の生活は一変した。スカートを履かされ、女子として接せられる。誰も、悠樹を男子として扱わなくなった。

悠樹にとってそれは屈辱だった。厳密な意味での性同一性障害ではないものの、悠樹は、自分は男であると自負し、そのように振舞ってきた。それを全否定されたのだ。

悠樹にとっての一番の問題は、自分がどのように振舞えばいいかわからなかったことだった。男子としては振舞えず、かといって、女子としての振る舞い方も知らない。自分の意思とは関係ないところで環境は変化し、それに強制的に適応されていく毎日。悠樹は、そのグロテスクさに耐えられなくなっていた。

そして、悠樹はある決断をする。

家やら歴史やらのしがらみの蔭^{つた}に覆われた女学校を出て、なんのしがらみもない新天地で最初からやり直すことにしたのだ。自分のやりたいように振る舞う。ただそれだけのために、悠樹は慣れ親しんだ女学校を出ることにした。

こうして悠樹は風見鶏学園の受験を決めたのだった。

朝比奈悠樹（後書き）

ぶっちゃけるなら、オスカルはベル薔薇の主人公です。

「おっし、立つぞ」

「ゆっくりだよ。ゆっくり立ってよ!」

高坂源一郎は朝比奈悠樹に言われたとおり、ゆっくり立ち上がる。

「ひいい、揺れる揺れる!」

「落ち着け、揺れてるのはおまえの身体だ!」

悠樹は源一の肩に足を乗せたまま、しゃがみこんでいた。目の前には3メートルの壁。源一と悠樹は、肩車でこの壁を越えることにしたのだった。

「ほら、いつまでもしゃがんでないでおまえも立て! 壁の上に手が届くだろう?」

「う、うん」

馬になっている源一に言われ、悠樹はゆっくりと立ち上がった。壁の上部に手を伸ばす。

「どうだ?」

「ん、届いた。ちょっと待って、今越えるから。んゝ!」

悠樹は源一の肩につま先立ちになり、なんとか塀を越えようとするが、なかなかうまくいかない。腕の力が弱いために身体を引き上げられないのだ。

「……」

源一は、壁についていた手を離すと、半ば放り投げるように、肩に乗っている悠樹の足の裏を持ち上げた。

「わきゃああああ」

悠樹の身体は壁を乗り越え、上部に転がっていった。

「おーい、大丈夫か?」

……源一の呼びかけに、悠樹からの返事はない。これは、裏切られて先に行かれたかな、と思った源一は、一人で壁を越えることにした。

助走をつけ、一気に壁を駆け上がる。上部に手をかけ、身体を起こしたときだった。

「おわ！」

「ぎゃひん！」

目の前にアップで現れる悠樹の顔。源一は、悠樹の額に自身の顔をぶつけ、今日3度目の落下を経験した。

地面に背中を強打し仰向けで寝そべっていると、壁の上から額を押さえている悠樹が顔を出した。

「なんで急に昇ってくるんだよう！」

「おまえこそ、なんでいきなり顔を出すんだよ」

源一は呼吸を整えると、身体を起こした。その足元に縄が投げ出される。縄は壁の上部から伸びていた。

「どうやら先に行った連中がこの縄を引き上げちゃってたみたいだね。おかしいと思ったよ。この壁、すごく高かったから」

源一は縄を使い、壁を越える。上部には悠樹が待っていた。

「呼んでも返事がないから先に行ったかと思ったぞ」

「この縄がけっこうキツク結ばれてたんだ。それで返事が遅れたんだけど。でも安心していいよ。ボクと君はドウメーを結んだ仲間だからね。裏切ったりしないよ♪」

「同盟は破るために結ぶって言うぞ」

「つぶ。やつすいセリフ！ もうちょっとひねったら？ 陳腐すぎるよ」

「うるさい！ 先に行くぞ」

「はいはい。さ、一緒に行こっか！」

小走りで先に進む源一の隣に悠樹は並ぶ。こうして源一と悠樹は最初の難関である壁を協力して越えたのだった。

1日目 5

「それでね、そのおなががすっごく柔らかいんだよ」

「……へへ」

源一は悠樹に気のない返事を返し、暑い日差しを振り払うように周りを見渡した。片側は上に伸びた崖。もう片側は下に伸びた崖。下を見るとずいぶん高いところまで上ったのがわかる。海を見れば水平線が遠くまで見渡せた。

アスレチックコースは壁越えを最後に終わっていた。再び緩やかな上り坂になった山道を源一と悠樹は登っていく。

「ちょっと！ ボクがひとりで喋ってばっかで馬鹿みたいじゃないか。ちゃんと聞いているの？」

「ああ。おまえが前にいた寮で飼ってたデブ猫ミー太の話だろ」

「そうだけど……。もう！ こっちが気を使って必死に話題作ってるんだから少しは乗ってよ！」

「別に俺たちは仲良しグループってわけじゃないだろ？ わざわざ無駄話する必要もない」

「そうだけどお……。っヒ！」

悠樹は息を吞んだ。急に源一が冬服の学生服を脱いだのだ。ボタンを外し、ワイシャツの袖をまくる。太い腕、太い胸、太い首。露わになった見慣れない男の肌に、悠樹は思わず見入ってしまった。

「？ どうかしたか？」

我に帰った悠樹は、源一に見入った事実を否定するようにまくし立てた。

「いきなり脱がないでよ！ ロシユツキョーか、君は！」

「暑いんだから仕方ないだろ。おまえも脱げば？」

「そんな行儀悪いことできるはずないだろ！ ジョーシキで考えろよ！」

「常識って。つまらないことにこだわるね、おまえ。こんなところ

で律儀に常識守ってどうするんだよ。そもそも、俺が上着脱いで誰に迷惑かけるんだ？」

悠樹は大きな瞳をさらに大きく見開くと、怒鳴った。

「うゝ、うっさい、ボクが迷惑してるんだよ！ そんなブツソウなもの見せ付けてェ！」

「……物騒？」

悠樹は小走りに走り出した。

悠樹の常識、世間の常識。男子として振舞うことが普通だった悠樹。女子は女子らしくという世間。

源一はそれを「つまらないこと」と言い捨てる。それに悠樹はカルチャーショックを受けた。源一自身は悠樹を女だということは知らず、悠樹がなにに悩んでいるかも知らないだろう。

だが、だからこそ悠樹は自分自身が行儀にこだわっていることに気付かされた。

悠樹は後ろを振り返る。源一は、少し距離を置いて付いてきていた。悠樹は、少しだけ目を閉じて気合を入れると、源一に言った。

「ほら、早く！ 置いてっちゃうぞ！」

「はいはい」

源一は、仕方ないといった感じで悠樹に近づいてきた。悠樹は横目で源一の胸元を見ると、目を背けて自分の上着のボタンをひとつだけ外した。

源一と悠樹は林道を歩いていて、崖道を反れ、森の中に入る。その歩みは、水の流れる音と共に止まった。

「あ、川だ！」

源一と悠樹の前には、幅10メートルほどの川が広がっていた。道は、川に架かっている丸太橋を経由して向こう岸に続いている。

「ふう。ボク、ノドがカラカラだよ」

悠樹は川面にペットボトルを近づけ、水を汲んだ。水の冷たさを指に感じながら悠樹は川を見た。

陽光を反射して輝く川面。そこに『奴』がいた。

それを見た源一と悠樹の反応は、絶句だった。

大きい。垂れ下がった目も、横に広がった鼻も、そして、たるんだ顎も。

その異形なる顔が、丸太橋にへばりつくように川面に浮かんでいたのだ。

我に帰ると悠樹はペットボトルを放り出し、逃げるように源一の側に駆け寄った。ペットボトルはあつという間に川下へ流されていく。

「ゲン、あれ、見えるよね」

「……ああ。顔、だな」

『顔』はじつと源一たちを見ていた。源一と悠樹はその異様さに飲まれてしまっている。

『顔』は口を開けた。

「おい、チビども」

悠樹は最初、『顔』が喋っていることが理解できなかった。それほど、『顔』は作り物めいていたのだ。

「ねえゲン。ひょっとして、あの『顔』、喋った？」

「……気のせいだろう」

「こらこら、現実逃避するなっちゃ」

再び『顔』が口を開く。

「ねえゲン、あれ、やっぱりなんか喋ってるよ」

「……名前を呼ばれても返事するなよ。ひょうたんに吸い込まれるぞ」

「……西遊記？」

「おい、無視するなっちゃ！」

源一は、軽く髪を撫でると丸太橋の上を跳ね、『顔』の側に寄った。ヨタヨタと、悠樹も源一の後に続く。

それは、人だった。人が川面から顔だけを出し、丸太橋にしがみついているのだ。

「とりあえず聞いておくが、なにやっているんだ？」

「見てわからないっちゃか？」

「ああ、悪いがさっぱりわからん」

『顔』は顎を上げ、源一を見上げると、大声で叫んだ。

「流されないように必死で丸太橋にしがみついているっちゅわー！」

その大声に驚いた悠樹は、口をへの字に曲げると、小さい足で『顔』を踏みつけた。

「な、なにするっちゃ！」

「あっははは！ 見て、ゲン。こいつの顔、ぐによぐによって歪むよ♪」

「いや、歪んでいるのはおまえの性格だろ」

「だってこいつ、ボクたちのこと、チビって言ったんだよ……、うわああ！」

丸太橋の上で両腕をぶん回して仰け反る悠樹。源一は片手で悠樹を支えた。

「なにやってるんだ、おまえは？」

「か、カカカ、噛んだあ！ こいつ、ボクの靴噛んだ！」

「へ、ちっこい足っちゃ！」

息荒く『顔』を睨みつける悠樹に、してやったりの『顔』。悠樹は頬をおもいきり膨らませて源一に言った。

「もういいよ、ゲン。こんなヤツのことなんて放っておいて先に行こ」

「待て！ おまえら本気で迷える子猫ちゃんを見捨てる気だっちゃか？」

「どこに迷える子ネコちゃんがいるんだよ」

「ここにいるっちゃー！ いいから早く助けるっちゃー！」

悠樹は源一に振り返り、再び『顔』を見下ろすと、源一とほぼ同時に呟いた。

「……なんで？」

「あ、今ハモったっちゃね」

「いやいや、悪いけど、俺たちがおまえを助ける義理はないし、それ以上になにを助けるんだよ。丸太橋にへばりついてないでさっさと自力で這い上がってくればいいだろ？」

「それができたらさっさとやってるっちゅわー！　少しでも気を抜いたら流されるっちゃ！」

源一は困ったように悠樹を見た。悠樹はサディスティックな笑みを浮かべると、ほぼ垂直に『顔』を見下ろした。

「ふふーん♪　人にモノを頼むには言うことがあるよねー。お願いしますは？」

「つく！　足元を見てええ！」

「イヤならいいんだよ。ねえ、ゲン♪」

『顔』は、しばらく考えこんでから、いやいやといった感じで、口を開いた。

「……お願いしますっちゃ」

悠樹は、満足そうに頷くと、宣告した。

「んー、ヤダ。ゲン、早く行こ。そろそろ時間がヤバイよ」

「いやあ、さすがにそれはかわいそうだろう」

源一は腰を屈めると川面に手をつけた。ひやりとする冷水、その中に沈んでいる『顔』の制服を掴んだ。

「っふ！」

軽く息を吐き出すと、源一は『顔』を持ち上げた。ゆっくりと水面から『顔』の体が姿を現す。

源一は丸太橋の上に『顔』の身体を投げ出した。

それは、巨漢だった。180を超える長身にたるんだ腹。体積でいうなら悠樹の3倍近くはあるだろう。

『顔』が丸太橋の上に立ちあがると、丸太橋は盛大に軋んだ音を立てた。

荒い息を吐き出し、源一は『顔』を見上げる。

「てめえ、何キロあるんだ？」

「んー、今は150キロちょっとぐらいだっちゃね」

「痩せろデブ！ そんなだから自分の身体を橋の上まで持ち上げられないんだよ！」

「ふん！ 今の暴言は俺を助けたことで見逃してやるっちゃよ」

『顔』は源一を残して丸太橋を渡っていく。源一と悠樹もその後に続いて橋を渡った。源一と悠樹が橋を渡り終えたのを確認すると、

『顔』は名乗った。

「俺は篠岡賢治。おまえら名前は？」

「俺は高坂源一郎。こいつは、朝比奈悠樹」

「そうか、こいつは悠樹っていうのか」

『顔』こと篠岡賢治は、悠樹の前に立った。

「？ なんだよ？」

「そいやああ！」

「ぎにゃあああ！」

賢治は、いきなり悠樹に抱きついた。川の水を吸いぐっしよりと湿った制服は、悠樹の制服を濡らす。

「むははは、さっきはよくもやってくれたっちゃね！」

「くさい！ なんかすっぱい臭いがする！ くさいくさいいい！」

悠樹は比喻ではなく賢治の肉に埋もれていった。ウミウシの捕食ってこんな感じかなあ、と、源一は他人事にそれを眺めていた。

しばらく暴れていた悠樹は、次第に大人しくなり、やがてぐったりと動かなくなる。賢治は、そうなってやっと悠樹を解放した。悠樹は立っていられずに、コテンと地面に寝転んだ。

「おい、朝比奈。大丈夫か？」

「ううう。きもちわるいようう」

衰弱した悠樹を見下ろす源一。賢治は雫を垂らしながらさっさと先に歩いていく。そして、振り返って源一と悠樹に言った。

「どうしたん？ 早く行くっちゃよ」

「……あいつ、いつか手足縛って焚き火の上でグルグル回してやる

！
」

「……止めておけ。丸焼きにしても脂身ばかりできつとおいしくないぞ」

悠樹は源一の手を借りて立ち上がった。

源一と悠樹、2人の思いは一緒だった。

「助けなければよかった」

1日目 5（後書き）

お楽しみいただけているでしょうか、どぶねずみです。

ここから先はちびちびと掲載していこうと思います。一応4月は完結しているのですが、どこかの週刊誌よろしく途中で打ち切りということはないのでご安心ください。

今まで「小説家になろう」は携帯で見っていたので、ページを換えるのが面倒だという経験から1話の分量を少なくしているのですがどうでしょうか？読みやすい、読みにくい、おもしろかったつまらなかった、くたばれどぶねずみ等にかしら感想を頂けたら幸いです。

1日目 6

日が翳りだした。多少の焦燥感を覚えつつも高坂源一郎は、歩幅の狭い朝比奈悠樹と動きの鈍い篠岡賢治に合わせて歩いていた。

「ふう、ちっとも涼しくならないねえ」

左からチビの声。

「暑い……、休憩所はまだっちゃかあ？」

右からデブの声。

間に挟まれているチビデブの源一は、頭を掻いて2人に言った。

「おまえらうるさい。もうちょっとペース上げないと時間切れで失格になるぞ」

「時間切れって日没までだろ？ まだダイジョーブだよ♪」

「時間切れって日没までだっちゃろ？ まだ大丈夫っちゃよ♪」

左右から聞こえるソプラノとテノール。その声は、それぞれが源一にのみ話しかけている。源一は、頭が痛くなってきた。

「おい朝比奈。いいかげん篠岡を無視するのは止めろ！」

「ねえ、ゲン。ボクのこととはユウでいいよ♪」

「ゲン、俺のこともケンでいいっちゃよ♪」

「家畜が格式ある日本語を喋るなよ！ こっちまで恥ずかしくなるじゃないか！」

「家畜ってなんだっちゃ！」

「ハン、家畜人デブーが！ だいたいキミのことをケンって言ったらゲンとかぶるだろ！」

「むきー！ お子ちゃまのくせにいい！」

悠樹はトテトテと逃げ、賢治はドタドタと追いかける。グルグルと源一の周りで追いかっこをする2人。

「仲がいいんだか悪いんだか……」

「はあ？ ゲン、どうしてコイツとボクの仲がよく見えるんだよお！」

「そうっちゃ！俺がこんなお子ちゃまと仲がいいわけないっちゃ。ま、俺とゲンは仲がいいけどな！」

「起きて寝言言うなんて深刻な病気なんじゃないの？ボクとゲンの間に横から入ってきたくせにずーずーしいんだよ君は！」

「あれえ、俺とゲンの仲がいいことに嫉妬してるっちゃか？」

「せや！」

悠樹は巨漢、篠岡賢治を殴りつけるが賢治はびくともしない。源一は大きなため息を吐いた。

「おまえら馴れ馴れしいな。俺たちはまだ知り合って半日も経ってないだろ？」

「あれ？ゲンとユウってオナ中じゃないっちゃか？」

「いや、知り合ったのはついさっき。アスレチックコースの途中でだ」

「ぬあーんだ！じゃあゲンとチビすけは別に仲良くないっちゃね」

「おまえとも別に仲良くないけどな」

「それにしてもはやけになつかれてるっちゃね」

「昔から子供と動物にはなつかれるんだよ。俺も背が低いから親近感を持たれるらしいな」

源一は悠樹を見た。悠樹は殴り疲れて膝に手をつけて荒い息を吐いている。対して殴られ続けた賢治はノーダメージだった。

悠樹は一度大きく深呼吸をすると、源一に聞いた。

「ねえ、ゲン。オナ中ってなに？」

「同じ中学出身ってことだよ」

「オナニー中毒じゃないっちゃよ」

「オ……何？」

「こいつ、外見だけじゃなく中身もお子ちゃまだったっちゃね」

「なんだとー、この猪八戒め！」

「おい賢治。下ネタは禁止な。子供の教育に悪い」

源一に名前で呼ばれた賢治は顔をにやけさせ、それを聞いていた悠樹は思い切り顔をしかめた。

そして、ゴールという天竺を目指す3人の珍道中はこの日最後の難関と、最後の仲間遭遇した。

高坂源一郎たち3人の足が止まった。道が途切れていたのだ。

「……どういうこと？」

先には崖があり、下にはセーフネットが張られている。ネットには、くもの巣に囚われた羽虫のように学生が数人絡まっていた。

源一は辺りを見渡した。見つかったのは木にくくりつけられた太い綱。綱は崖の対岸まで張られていた。距離は30メートル近くある。

「これって、今度は綱渡りをしろってことっちゃんか？」

「えー？ 無理だよそんなのお！」

源一は、なにやら騒いでいる悠樹と賢治を無視して、綱を触った。綱は丈夫でしつかりと結ばれていた。どうやら本当に綱渡りをすることになりそうだな、と思ったときだった。

「よお、お仲間だな」

そう言って横から現れたのは、細い男だった。金に近い茶髪に広い額。にやけ面で源一たちに声をかけていた。

技術が未熟な芸術家の卵が、軽薄をこねくり合わせて人を形作ったらこんな感じかな？ と、悠樹は皮肉たっぷりに細い男を評した。針金みたいな身体じゃダンディズムに欠けるな、と、賢治は自身の腹を撫でながら優越感に浸った視線を細い男に向けた。

なにやら意味深な視線を細い男に向ける2人に変わり、源一は軽く咳払いすると細い男に答えた。

「どうしたんだ、こんなところで」

「えっと、どうやって向こう岸に渡るかで足止め喰らっちゃって。

あ、俺は木下高志。よろしくな」

「……俺は高坂源一郎。んで、こっちのでっかいのが篠岡賢治。ちっこいのが朝比奈悠樹。どうやら俺たちが最後尾みたいだ」

「……朝比奈？」

細い男、木下高志は悠樹の顔に視線を送った。対する悠樹は高志を無視して源一に向き直った。

「ゲン、自己紹介なんていいから早く行こうよ！」

「俺はいいけどおまえ、綱渡りできるのか？」

「ふん！ 非力なお子ちゃまには難しいっちゃんね！」

「な！ でぶでぶだって自分の身体を支えられないだろ！ どうせすぐにおっこっちゃうんだよ君は」

「……まあ、そう言ったわけで俺は先に進めなかったわけだ。俺の体力じゃあ向こう岸まで持たないからな」

そう言う和高志は自分の広い額を撫でた。

「まあ落ち着けっちゃ。俺たちの前に行った連中もここを越えたはずだから、なにか手段があるはずっちゃ」

「うん、そうだね。みんながみんなここを綱渡りで越えられるほど体力バカじゃないはずだからね」

悠樹はそう呟いた後、賢治と意見があったことに不快になり、口を思い切りすぼめた。

賢治は不貞腐れたように横を向いている悠樹を一瞥すると、自身のたるんだ顎を撫で、対岸まで張られている綱を見た。

「……向こう岸、綱が張られている場所にマットが巻かれているっちゃ」

源一はメガネの位置を調整して、賢治の指し示す対岸を見た。

「……ああ、本当だ。あれ、どういう意味だ？」

「ふむ。これは、ターザンっちゃんね！」

「は？ なにを言ってるんだ君は！ 身体だけじゃなくて頭も太ってるんじゃないの？」

「まあ聞くんっちゃ。ほら、向こう岸は少しここより低いっちゃ」

悠樹は目を凝らして対岸を見た。確かに、賢治の言うとおりの、少しここより下がっているようだった。それに対応するように綱もわずかに斜めに下がって張られているのがわかった。

「だからターザンロープみたいになら下がつてアーアア」と向こうまでわたるっちゃ！」

「確かそういう遊具があったよな」

「だがそのぶらさがるロープがないぞ」

「ないんなら代わりになるものを探すちゅわあ！」

賢治の勢いに押されて辺りを見渡す悠樹と高志。源一は、綱を見ると、ベルトを外した。

「発想としては悪くないか」

ベルトを綱に絡めてぶら下がってみる。問題なさそうだった。

「？ ゲン、どうしたっちゃか？」

源一は、賢治に笑みを見せ、一気に崖に駆け出した。

源一の足は地を離れ、宙に浮かんだ。そのままの勢いでロープ代わりにしたベルトにぶら下がり、綱を伝って崖を越えていく。

わずか数秒で源一は対岸に到達していた。マットを蹴って勢いを殺し、対岸に立つと、未だに立ち往生している悠樹たち3人に拳を突き上げた。

「やったー、ゲン！」

「よっしゃー、やったっちゃあー！」

ハイタッチする悠樹と賢治。悠樹は、賢治の汗でぐっしり濡れた手の平の感触で我に帰り、不機嫌顔を作った。

「へへ、それじゃあ次は俺が行くかな」

高志は、そう言うとき源一に倣^{なら}ってベルトを綱にかけ、崖を越えた。「……あいつ、自分ではなにもしないのに。さっさと先行っちゃったね」

「ああ。あれは石橋を叩いて、その上で人が渡るのを確認してから渡るタイプっちゃね」

「まったく。旅は道連れって言うけど、どんどん連れが増えていくなあ。言っておくけど、ボクとゲンが一緒にいるのに君たちは勝手についてきているだけ……ってなにしてるんだよお！」

悠樹は賢治を見て力一杯叫んだ。篠岡賢治は、ベルトを外して、ス

ラックスを脱いでいたのだ。少し黄ばんだ白ブリーフ一枚の下半身で悠樹の前に立つ賢治。

「ほら、俺さまちゃんって、人より少しだけ体重があるっちゃろ？だからベルトだけで切れたら困るっちゃ」

「どこに突っ込んだらいいのかわかんない！いいからさっさと行けえ！」

賢治はスラックスで補強したベルトを綱にかけた。そして、下を見る。

「……けっこう高いっちゃね」

「せや！」

悠樹は、後ろから全体重を乗せて賢治の白ブリーフを蹴りつけた。重い体重のせいか摩擦の関係か、賢治は両足を地から離し、ゆっくりと対岸に向かっていった。半ばずり落ちた白ブリーフは、対岸に着くと同時に地面に接触した。

「ふう、ぎりぎりセーフっちゃ」

賢治は自身の過剰な体重を支えた両手に、ねぎら 労うように息を吹きかけた。

「なんでパンツ一丁なんだ？」

「ベルトだけだと切れそうで怖かったっちゃよ」

「ズボンじゃなくて上着でよくね？」

「それよりそこ退いたほうがいいぞ」

「え？　なんでっちゃゴボ！」

言い終わるより早く、賢治の後頭部に崖を越えてきた悠樹の膝が叩き込まれた。勢い余って地面に倒れこむ悠樹。

「うゝ、なんでそんなところで座ってるんだよう！」

ハラリと、賢治のスラックスと悠樹のベルトが、絡めてあった綱から落ちた。悠樹はずり落ちるスラックスを手で押さえてベルトを拾った。賢治は後頭部を押さえて唸うなっている。

「なんとか無事に全員渡れたね。さ、それじゃあ先に行こう」

悠樹はベルトを締めながら源一に言った。源一は、賢治のベルト

とストラックスを拾い、土を払っていた。

賢治なんか親切にしくてもいいのに、そう思いながら源一を見ていた悠樹は、源一の足元に気付いた。滑車が山と積んであったのだ。

「なにこれ」

「滑車だろ。たぶん本当はベルトじゃなくてこれで崖を越える手はずになっていたみたいだな」

「なんで向こう岸にないんだよお！」

「……たぶん先着順ってことなんだと思う。遅れてきた俺たちの分までは用意してないってことなんだろうな」

悠樹は思い切り口をすぼめた。そこに、パンツ一丁の巨漢が復活した。

「チビガキ！　なんてことするっちゅわ〜！」

「通り道で座り込んでるのが悪いんだろ！　ジャマなんだよ君は、とくにおなか周りがさ！」

半ケツ状態で悠樹を追い回す賢治。悠樹は賢治を罵りながら源一の影に隠れた。

「まったく、おまえらは俺に対する尊敬の念が足りないっちゃね」

「とりあえず、ズボンを履いてからええよ」

源一は賢治にストラックスを渡した。文句を言いながらも賢治は白ブリーフをストラックスの中にしまった。

高志は、悠樹に近づいた。

「大丈夫か？　けっこう盛大に転んでいたけど」

「あんなの大したことないよ！　ゲン、そんなヤツにシンセツにすることないよ！　デブがうつっちゃうぞ〜」

「いや、ゲンはもう十分デブだっちゃ」

「はあ？　おまえには言われたくないぞ、それ」

3人は先に歩き出した。高志は、一度顎を撫でると、小走りに悠樹の隣に並んで道中を共にした。

1日目 8

空は青から赤へ、そして、再び青に変わり始めた頃、源一郎たち4人は人工の明かりを見つけた。最初のチェックポイントである休息所だ。

「ようやくゴールっちゃか」

「いや、ゴールではないぞ。一日目が終了ってだけ」

「うげー。鬼疲れるな」

入り口で数字の書かれた小さなカードを渡される。どうやら、到着順だった。最後にチェックを受けた源一は68番だった。4人はでチェックを受けると休息所に入った。源一たちは、100人は入れる大広間の木製のテーブルに倒れこむように着く。

「さすがに疲れたっちゃねえ。明日筋肉痛が心配だっちゃ」

「もうちつと鍛えろ。半日歩いただけで筋肉痛って貧弱すぎるだろ」

「いや、半日っていつでも山登りだからな。鬼きついぞ、これ」

「……鬼？」

男三人が談笑している様子を朝比奈悠樹はテーブルに突っ伏して黙って聞いていた。

悠樹は、疲れていた。歩いている最中はまだ気が張っていたために気丈でいられたが、休息所に着いたことで気が抜けてしまったのだ。

「おい、大丈夫か？」

高志の気遣いに悠樹は手を振るだけで答える。

「ふん。体力のないお子ちゃまには少しきつかったみたいっちゃね」

「あのさ、いちいち噛み付くのやめてくれない？ 正直ウザイ」

顔も上げずにそう言う悠樹。賢治は一瞬だけ傷ついた顔を見せ、源一に向き直った。

「ふ、ふん！ お疲れのお子ちゃまは放っておくっちゃ。ゲン、俺さまの飲み物を持ってくるっちゃ！」

「自分で行け。カロリー使え」

そう言いつつも源一は立ち上がり、ドリンクバーに歩いていった。しばらくすると急に悠樹が起き上がる。壊れたおもちゃのように首を横に振る悠樹。

「どうしたっちゃか？」

「ゲン？ ゲンは？」

「ああ。ドリンクバーに飲み物を取りに行ってるよ」

悠樹は落ち着きを取り戻し、ドリンクバーを見た。ドリンクバーの入り口で、源一は男と話していた。

ドリンクバーは敷居で3つに別れていた。一番右は各種ドリンクとお茶にコーヒー。真ん中は右より種類が減ったドリンク各種。そして、左は水道の蛇口のみ。上にかかった看板には右から順に「120」「21」50」「51」。

「ああ、例のハンモックナンバーか」

看板の意味を理解した源一は、左の蛇口に行こうとした。そのとき、男が右のドリンクバーから出てきて源一に目を留めた。

男は片頬を吊り上げると、源一に話しかけた。

「久しぶり、さっきは悪かったな」

源一は苦笑を浮かべ、男に答えた。

「気にするな。こうして追いついたしな」

源一は男、三崎省吾に背を向け、蛇口からコップに水を注いだ。

省吾は敷居に軽く寄りかかるとコーヒーカップに口をつける。

「おまえ、何番だ？ コーヒー飲めるってことはけっこう上位だろ？」

「ん？ ああ、3位だ。もうちょっとでところでトップに追いつけなくてな。明日は1位になってるよ」

「やる気だな、不良のくせに」

「これでも勝ち負けにはこだわる性格なんだよ」

源一と省吾は視線を絡ませ、くぐもった笑いを漏らした。

「ゲン？」

控えめな呼び声、振り返ると悠樹と高志が立っていた。

「知り合いか？」

「ああ、今一緒に行動してるやつら。小さいのは朝比奈悠樹で細いのが木下高志。えっと、こいつは三崎省吾。ヘリで同じだったヤツだ」

悠樹は源一の影に隠れる。省吾はなぜか口元の笑みを消し、高志は省吾の顔を凝視した。

「三崎省吾！ ひょっとして、あの三崎省吾か？」

省吾は高志を無視して源一を睨みつけた。強い眼光、源一は圧されそうになるそれを正面から受け止めた。

「高坂、おまえ友達ごっこやってるのか？」

「人聞きが悪いな。単に道中が一緒っただけだ」

「さっさと追いかけて来いよ。そんな奴ら放っておいて」

「悪いけど、俺はおまえほどやる気はないよ」

高志はただ立ち尽くし、悠樹は無意識に源一の袖を掴んだ。

省吾は、言った。

「友情を期待しているならやめておけ。間違いなく裏切られるぞ。

警告してやる」

源一は、言い返す。

「おまえみたいに、か？」

源一はただ当てずっぽうに言っただけだったが、省吾には思い当たるところがあったらしい。省吾はそれを聞くと、片頬を吊り上げて源一たちに背を向ける。そして、後ろ背に手を振りその場を去っていった。

源一は軽く息を吐き、隣にいる悠樹を見た。悠樹は、今まで省吾に圧されていたのが悔しいらしく、省吾の後姿に舌を出していた。

「なあ木下。おまえ、あいつのこと知ってるのか？」

「ああ。あいつ、三崎省吾だろ？ 去年話題になった少年不良グループのリーダーだよ」

「不良グループ？」

「知らないか？ 去年の夏、なにか騒動起こしたってんでニュースやってたろ？」

「あ、ボク知ってる。けっこう大きく取り上げられたよね。ゲンは知らない？ ……ゲン？」

源一はあごに手を当てて去年の夏を思い出した。去年の夏といえば、深夜ラジオだけが友達だった時期だ。当時を思い出し軽く鬱^{うつ}に入る。

「ゲン、どうしたの？」

「うるさい！ おまえら、自分の飲み物は自分で持っていけよ！」

そう言うと源一は自分と賢治の分の水を持って肩を怒らせてテーブルに戻っていった。悠樹は頭の上にでっかい「？」を浮かべ、源一の後に小走りについていった。

1日目 9 1日目終了

夕飯はカレーだった。到着順位の低い源一たちは単品に水。中位の連中はそれにサラダが付き、上位組にはラッシーが付いた。

「まあ、このくらいの差異ならいいか」

「よくないっちゃ！ むわゝ、ラッシー飲みたかったっちゃゝ」

「いいだろ、おかわりは自由だったんだから」

「でも、なんかチクチク差別してくるよね」

「風見鶏学園の教育方針ってやつか？ これは本格的に入る高校間違ったな」

源一は軽いため息を吐き、窓の外から空を見上げた。闇は世界を覆い、空に星の光点を散らばしていた。

夕食後、高坂源一郎と朝比奈悠樹、篠岡賢治と木下高志の4人は休息所内にある宿泊場所に移動中だった。ちよつとした修学旅行だな、と思いながら源一は扉に手を掛けた。

「ちよつとゲン。そっちっておそとにでちゃうよ」

「？ だって案内板だとかっちってなってるぞ？」

源一は壁にかけられた案内板を指差した。案内板には「51？」とある。？の先は、外だった。

「野宿しろってことっちゃか？」

「は、はは。さすがにそれはないだろ」

源一は、恐る恐る扉を押した。

外に広がっていたのは、乱立しているテントだった。

「……まあ、野宿よりはましか」

「……ちよつとキャンプみたいで楽しいかもな」

「……夕飯もカレーだったしね」

4人は息を揃えてため息を吐き、あてがわれたテントの中を覗いた。

「あ、中はけっこう広いね♪」

「うお、めっちゃ狭いっちゃ！」

意見の対立は小柄な悠樹と巨漢の賢治。悠樹は、賢治の腹を一発殴ると、薄暗いテントの中に入った。

手探りでランプを付けテント内に明かりを灯す。そこで、悠樹は隅に積まれている荷物を見つけた。

「あ、ボクのカバンだ。よかった、一日中動き回って汗掻いたのに着替えがないのどうしようって思ったんだよ」

悠樹は自分の鞆を担ぎ、中を確認しようとした。だが、それはできなかった。いきなり上から鞆を取り上げられたのだ。

「ふん、ちびっ子のくせにいい鞆使ってるっちゃね」

「なにすんだよお！ 返せよ2重アゴ！」

「いや、あのアゴは2重じゃきかないだろ」

「3重、4重、……鬼アゴだな」

源一と賢治の会話を他所に、悠樹は賢治に飛び掛った。賢治は荷物を頭上に掲げる。悠樹はジャンプして荷物を取ろうとするが届かない。

賢治は頭上にある鞆を見た。

「おまえ、ひょっとしてブルジョワだっちゃんか？」

「そんなの君には関係ないだろ！ 返せ、かえせえ！」

悠樹は賢治の身体をよじ登り、鞆を奪回する。そのままの勢いで源一の影に隠れた。

高志は、賢治が「いい鞆」と言っていた悠樹の鞆を見た。

「ああ、確かにいい鞆だな」

「どうでもいいだろ、そんなこと！」

源一は側でがなり立てている悠樹の手元を見た。

「そうなのか？」

「このブランドのバックなら100万はするんじゃないか？」

悠樹は源一を見た。源一は、興味なさそうに自分の荷物を漁っていた。視線すら向けずに悠樹に言う。

「おまえ、金持ちだったんだな」

「……親はね。ボクは関係ないけど」

源一は鞆から荷物を取り出すと立ち上がった。

「じゃあ俺はコインシャワーに入ってくるから。金目のもんはないけど勝手に人の鞆の中を見るなよ」

悠樹は拍子抜けした。悠樹の以前いた世界では親の社会的地位というものは、極めて重要な意味を持っていた。が、源一はつまらない話題とばかりにテントを出て行ったのだ。

悠樹は、数瞬の逡巡の後、源一を追ってテントを出た。

源一は、なぜか休息所には入らず、横道に逸れて森の中に入ってしまった。

源一はテントを出て休息所に入ろうとした。そこで、あるものが目に入った。おそらく片付け忘れられたのだろうデッキブラシだ。身体に残る軽い疲労感が練習に明け暮れていた昔を思い出させたのかもしれない。源一は、デッキブラシを手に取ると、頬に笑みを浮かべて森の中に入っていった。

しばらく進むと広場に出た。空には月と星の輝き。源一は、荷物を置いてデッキブラシを中段に構えた。

軽く振る。デッキブラシは空気を叩き、鈍い音を上げた。源一は顔をしかめると、素足になり軽く目を閉じた。

軽く息を吸い、吐く。足の裏にはひんやりとした土の感触。足の親指に力を入れ、瞳を開ける。夜の涼気を胸いっぱい吸い込むと、源一は、思い切り吐き出した。

一閃！

デッキブラシは空気を切り裂き、鋭い音を上げた。

咆哮！

森は物理的に圧されたように大きく揺れ、緑葉が一斉に散った。

それに合わせるように源一は地を蹴った。突き、払い、斬る。まるで剣舞。月下、源一はデッキブラシで旋律を奏で、舞い続けた。

デッキブラシを一振りし、大きく息を吐く。張り詰めた緊張は霧散し、空気は弛緩して涼気を取り戻した。

源一は、視線に気付いた。

「あれ、朝比奈。なにやってんだ？」

名前を呼ばれた悠樹は呼吸を思い出し、水面から顔を出したように大きく息を吐き出した。

「ゲン、なにやってたの？」

源一はデッキブラシを悠樹に放り、脱ぎ捨てた靴を履いた。

「俺は昔、剣道をやってたんだ。それで、久しぶりに素振りがしたくなっただよ」

「ふーん、ケンドーかあ。すごいねえ。ボク、思わず見惚れちゃったよ」

悠樹はデッキブラシを両腕で抱えると破顔した。源一は悠樹の横を通り抜け、休憩所に戻っていく。悠樹は源一の隣に並んで歩いた。

「ゲンは高校でも剣道部に入るの？」

「いや。剣道は中学までで終わり。高校ではやらないよ」

悠樹は源一を観察した。背は高くないが、肩幅は広く、どっしりとしている。篠岡賢治などのたるんだ贅肉と比べれば鍛えられた身体をしているのは一目瞭然だった。

悠樹はほんわかした笑顔を源一に向けて言った。

「お風呂ってコインシャワーだったよね。ちょっと待ってて、今荷物持ってくるから。一緒に行こうよ」

「女の便所じゃねえんだからわざわざ連れ立って行くことねえだろ」「いいから！ 先に行ったらだめだよ。待っててよ」

悠樹は、髪を掻きながら足を止めた源一を確認すると、テントに向かって走った。そのままの勢いでテントに飛び込む。そこで、悠樹の鞆を漁っている賢治とそれを制止している高志を見つけた。悠

樹は速度を落とさず全体重を乗せて巨デブにドロップキックを食らわせた。

「ごばあ！」

鞆を持ったままぶっ倒れる賢治。

「なにをやっているんだ君は！」

賢治は起き上がるとわざとらしく尻についた埃を払った。

「ふん。部下がどんなものを持っているか確認するのはリーダーの仕事っちゃ」

「リーダーって誰のことだよお！　って、人の鞆を漁るなあ！」

賢治は鞆に手をつ突っ込む。その太い指が滑らかな感触に触れた。

賢治は、それを引き出した。

「せい、やあ！」

悠樹のちっちゃな拳が賢治の鼻と口の間に突き刺さる。賢治は、引き上げられた直後の深海魚のような顔をして白目をむき、盛大な地響きを立てて沈んだ。

「さすがに人中は鬼やばいだろ」

悠樹は慌てて賢治の手から水色のものを奪った。悠樹の手に握られているもの、それは、水色のスポーツブラだった。

自分が女であることがばれた、そう思った悠樹は高志を睨みつけた。高志はぎこちない笑みで悠樹を見下ろした。

しばし無言で睨み合う。

その空気に先に我慢できなくなったのは、高志だった。

「……おまえ、ジャルジェの息子だろ？」

「……へえ、ボクのことを知っているんだ。てことはボクが戸籍では女だっことを知っていたんだ」

「今の今まで確信はなかったんだけどな。俺の趣味は俺と同年代の有名人を調べることなんだ。三崎省吾といいおまえといい、この学校には有名人が揃ってるな」

「それで、どうするの？　ゲンにボクが女だってばらす？」

「まさか。朝比奈を敵に回すつもりはないよ」

「こんなヘンテコ島じゃあコーサカもアサヒナも関係ないけどね」
悠樹は、話は終わりとばかりに不機嫌顔を崩さないまま高志から視線をはずした。外から声が聞こえる。

「おい、いい加減置いていくぞ！」

源一の声だ。悠樹はその声を聞くと不機嫌顔を崩した。高志には、それが不愉快だった。

「なあ、朝比奈。あの2人を出し抜いて俺と組もうぜ？」

悠樹は高志に視線を向けずに聞いた。

「どういう意味？」

「まさか昨日今日知り合った奴らを信用してるわけじゃないんだろ？」

「まあね。でもそれは君についても言えることだよ」

「俺は、おまえが女であることは知ってるから。あいつらよりも氣を使えるよ」

悠樹は目を細めて高志を見つめた。悠樹には、高志が軽薄な薄ら笑いをしてるように見えた。

悠樹は、答えた。

「悪いけど、断るよ。だってボクにはゲンがいるもん」

高志はその返事に口角を下げる。

「なんでゲンなんだよ。あいつだって今日知り合っただけの奴だろ？俺とあいつと、なにが違うんだよ」

悠樹は、一瞬だけ考えた後、にんまりとした笑顔を作って言った。

「ゲンはねえ、ボクと一緒に歩いてくれたんだよ」

「それは、俺だって……」

「あのミサキショーゴってのが言った通り本当だったら一人で先に行けるのにね。壁のときも馬になってボクを先に行かせてくれたんだよ。ターザンロープのときも危険かもしれないのに最初に行ってボクたちを待ってくれていただろ？ ゲンは、ボクたちに合わせて歩いてくれてるんだ」

もしその場に源一が居たのなら、悠樹の頭を叩いて「懐くな、う

「ちゃか」とのたまっただろうことを悠樹は目を輝かせて高志に聞かせた。高志には、悠樹の言うことが半分も理解できなかった。

「朝比奈！ まーだかー！」

「あ、今いくー！」

悠樹は外の声に答えると、荷物を持ってテントを出て行った。ひとり立ち尽くす高志。ちらと横を見ると賢治がうつ伏せの半尻で気絶していた。

高坂源一郎 1

熱気、猿叫。試合場に緊張が走る。高坂源一郎は一足分前に進んだ。対戦者は威圧を受け、半歩ほど後退る。あとずさ

不意に、源一は竹刀を中段から下段に下げた。露骨な隙、対戦者は面を打つために竹刀を上げ、足に力を入れた。

「どお！」

次の瞬間には旗があがり、自分の敗北を知らされる。対戦者は、自分が抜き胴を決められたことに遅れて気付かされた。

「高坂源一郎？　なんであいつがこんなところにいるんだ！」

強豪校の主催した共同稽古。それに参加した源一の中学は、参加した他の学校を席卷していた。

同世代の剣道経験者にとって、高坂源一郎の名前は小さからぬものがあった。源一は、3年前の初等部の全国剣道大会の団体戦優勝及び最優秀選手なのだ。

「あいつ、私立の名門校にスカウトされたんじゃないのか？」

「いや、それよりなんで中学に入って公式戦に出てないんだ？」

ざわつく道場。源一は、それらを無視して試合場を後にして面を外した。

「おつかれさまです。源一さん」

「ありがとう、静香」

源一は、マネージャーであり彼女でもある河井静香からタオルを受け取り額の汗を拭った。

「助かったよ、源一」

「修、少し怠けすぎだぞ」

源一は親友であり、同じ剣友会で全国優勝を果たしたメンバーでもある館野修に小言を言った。今の試合も、先に4敗した後の源一の5人抜きだったのだ。

「おまえらにも言うておく。夏の公式戦まで1ヶ月を切っているんだからな。もっと気合入れないと全国を勝ち抜けないぞ!」

源一が言った全国という言葉に部員はざわつく。源一は、その態度に苛立ちを感じた。

昔はこうではなかったのだ。小学生のとき全国優勝のために励んだ日々は、今とはまるで違っていた。

「やあ、高坂くん。頑張っているようだね」

声をかけてきたのは、今回の共同稽古の主催校の顧問だった。源一は頭を下げる。

「今日は招待、ありがとうございました」

「いやいや、我々もいい刺激になったよ。今回はしてやられた形になったけど。しかし、高坂源一郎は健在ってところかな? それにしては今まで公式戦に不参加なのは解せないんだけど。どこか故障でもしていたのかな?」

「ああ、それは……」

源一は、視線で道場の隅を指した。そこには、いかにも場違いな、文庫を呼んでいる中年女性がいた。源一の中学校の剣道部顧問だ。

「うちは年功序列ですから。出場選手は3年から選ばれるんですよ。今までは先輩に譲っていたんですけど、やっと自分の番になったってわけです」

「へえ。うちにでも来てくれたらそんなことにはならなかったのに」以前にこの学校のスカウトを断ったことのある源一は苦笑する。

「ええ、でも、自分は同じ仲間と剣道をしたかったのです」

そう言って源一は修たち剣道部員を見る。その多くは、地元道場の剣友会から続く友人たちだった。

「そうか。ま、夏の大会は楽しみにしているよ。うちも今回ほど無様な醜態はさらさないようにしておくから」

「はい、そのときはよろしく願います」

源一は、去っていく他校の教師に頭を下げた。

「それでは解散しますが家に帰るまでが部活動ですからね」

顧問は冗談の欠片もなくそう言い放ち、自宅への帰路に着いた。地元に戻り着いた源一たちは駅前で解散した。源一は部員に解散を告げると荷物をまとめた。その源一の前に修と静香が並んで立った。

「源一さん。これからみんなでマルイに寄りますけど、一緒にいきますよね」

「サティに行け、サティに」

遠征や試合の帰りに駅前のデパートに寄るのは、源一たちのささやかな楽しみだった。だが、源一は荷物を担ぐと、他の部員たちに背を向けた。

「俺はこれから剣友会の道場に行くから。サティのフードコートでミックスお好み焼きを買ってきてくれよ」

「だから、マルイに行くんだって」

源一は手だけ横に振って和気あいあいとしている部員たちから離れていった。

源一の横に寄り添うように並ぶ影があった。紫藤朋絵だ。同じ剣友会で全国優勝した仲間であり、源一の幼馴染だ。付き合いは、母親が同じ産婦人科に通っていたこともあり、生まれる前からということになる。

「朋絵、あいつらと一緒にマルイに行ってこいよ。たまには生き抜きも必要だぞ」

「その言葉、そのまま返すわよ。それより源一ももうちょっと周りに気を使ってあげなさいよ。部の主将なんだから」

「これでも気を使ってるつもりだけどなあ」

源一は苦笑する。彼女の静香といるときよりも、親友の修といるときよりも、朋絵といるときの方が源一は自然体でいられた。

「ねえ源一。ちょこつとだけ真面目な話、静香さんにはもう少し気を使ってあげてよ」

源一は視線を朋絵に向けた。「真面目な話」と断るだけあって朋絵はじつと源一の目を見つめていた。

朋絵は続ける。

「最後に静香さんとデートしたのっていつ？」

「春かな。一緒にバーベキューしたろ？」

「それって部のレクリエーションじゃない。呆れた。そんなんじゃないの？」

源一は、困ったように頭を掻く。

その時の源一の頭には、来月の公式戦のことしかなかった。それが中学の3年間で剣道に研鑽してきたことの集大成であり、そのことを静香はわかってくれていると、源一は信じていた。

「……なあ朋絵。おまえは自分が信じられるか？」

「？ なに、急に？」

質問の真意が掴めず、朋絵は源一を見た。源一は、自身の胸の内にある本音を、整理しながら話した。こんなことが話せるのは、朋絵だけだった。

「俺は、さ。正直自分のことはあまり信じてないんだ。今だって部の連中と一緒に遊びたいってのが本音だしな。俺の性根は意識していないと、すぐさぼりたがるんだよ」

源一は、電線越しに夜になりかかっている藍の空を見上げた。生暖かい湿った風が源一と朋絵の横を通り過ぎていった。

「だけど、それじゃ駄目なんだよ。俺は背も低いし目も悪い。学校の部活は6時までしか練習できないし、いつでも剣友会の道場を借りられるわけでもない。だが、全国には、身体的にも才能にも、環境にも恵まれた連中がそれこそ死に物狂いで練習してくるんだぜ。そんな連中と張り合おうってのに、遊んでられないだろ？」

朋絵は、視線を源一から外し、少し悲しげに微笑んだ。

「うん……。わかるけど、ね。」

「まあ、夏までだよ。全国大会が終わったら遊ぼうぜ。みんなだな」
源一は、そう言って笑った。朋絵には、その源一の笑顔が、どこか無理しているように見えた。

時は過ぎる。県大会を翌日に控えた最後の練習を終え、源一たちは道場の神棚の前に集合した。

顧問は必要事項を伝え、解散を指示してひとり道場を後にした。顧問は、剣道はおろか、体育以外の運動を経験したこともない人間だった。独自の教育理念を持っており、その実践のために教師をしている女性だ。源一たち生徒にしてみれば、その押し付けがましいところに辟易とすることもあったが、基本的に唯々諾々としていれば、自分の（正しい）教えが伝わったと悦に入る、扱いやすい教師だった。

「よし、今日の練習はこれで終わりだ。明日に備えてよく休んでおけよ。礼！」

源一の号令で部員は神棚に一礼し、解散になる。源一は掃除を済ませると戸締りを確認し、道場を後にした。

夏の日差しは源一の影を長く伸ばしている。6時を過ぎても沈まない太陽は世界を黄金色に染めていた。

源一は荷物を抱え、道場の鍵を閉めた。そのとき、入り口のところに荷物が置かれているのに源一は気付いた。静香と修のものだった。源一は、辺りを見渡すと、まだ学校内にいるはずの2人を探すことにした。

「源一！」

校舎内をうろついていると、朋絵に声をかけられた。源一は茶毛をおさげに結った、瞳の大きな幼馴染を見た。日のあたるところで朋絵の制服姿を見るのはずいぶんと久しぶりの気がした。

「校門前で待っていたのになかなか来ないんだもん。どうしたの？」

「ああ。修と静香を探してるんだ。今日は剣友会によらずにそのまま帰るつもりだから、静香を家まで送っていいこうと思って。前におまえに言われたろ？　少しは気を使えって」

それを聞き、朋絵は苦い顔をしたが、源一は気付かなかった。

「……もう、きっと帰っちゃったよ。私たちも帰ろ。いくら明日が全国大会の前哨戦だからって、油断していたら足元すくわれるわよ」

朋絵は源一の手を取った。源一は、ごく自然にその手を払った。

「わかってるよ。だから今日は自主錬は抜きにしてまっすぐ家に帰るつもりなんだよ。それで、せっかく時間ができたんだから静香と話でもしようって思ったんだけど……、いないな」

「だから！ もう帰っちゃったって」

「いや、それはない。道場の入り口に荷物が置いてあったから」

そうは言ったが、校内を歩き回っている間にすれ違ってもう帰ってるかもしれない。源一はそう考え直して足を道場に向けた。

荷物は、まだ道場の入り口に置いてあった。源一は辺りを見渡すが、やはり修と静香の姿はなかった。

「やっぱりまだいるな。2人ともなにしてんだ？」

「源一！ いい加減もう帰ろうよ」

「朋絵、おまえなにか変だぞ。帰りたければひとりで帰ればいいだろう？」

朋絵は、源一から目を逸らした。

「よくわからないヤツだなあ」

源一は朋絵の横を過ぎ去り、再び校舎内を探索しようとした。

それに気付いたのは、本当に偶然だった。源一から逸らした朋絵の視線の先。そこは、人通りの少ない道場の横だった。そういえばあそこはまだ見ていないな、と、軽い気持ちで源一はそこに向かって歩き出した。

「源一！ ちょっと待って！」

それを必死で止める朋絵。源一は、ここに至ってもまるで状況が理解できていなかった。

「なんだよ、あそこになにかあるのか？」

ちよっとした好奇心、源一は朋絵を振り切り、道場横に向かった。

そして、源一は、開胸された心臓に直接氷塊を押し付けられたような衝撃を受けた。

2日目朝 1

胸元のひんやりした感触で高坂源一郎は目を覚ました。見慣れない天井、固い床。ここがテント内であり、地獄極楽島だと思い出すのにきっかり3秒を要した。

左を見る。

「こわいよ、トムヤンクンこわいよ」

しくしくと涙を流すデブ。

右を見る。

「ロールケーキはケーキじゃないし稲荷寿司は寿司じゃないんだよ」鼻の穴を広げて怒る痩せ。

胸元を見る。

そこには美少女がいた。

源一の身体を抱き枕のようにして安らかな寝息を立てる美少女。いや、美少女というには語弊がある。よしんばこれが女の子だったとしても、美少女は源一の胸元を冷やす原因を作ったりはしないだろう。源一の胸が濡れている理由は、この美少女(?)の口元にあった。よだれが、源一の胸に垂れ流されていたのだ。

美少女(仮)は、ゆっくりと長いまつ毛を揺らし、大きな瞳を開けた。美少女(偽)、朝比奈悠樹は目の焦点を合わせると、抱きついたまま源一を見上げ、笑顔を作った。

「あ、ゲン。おはよ」

源一は挨拶を返す代わりに、人差し指を曲げ、悠樹の額を弾いた。「ぎゃん！」

悠樹は1回転半ほど転がると、デブにぶつかりとまった。

「朝からなんてことするんだよう！」

「うるさい！ おまえこそ人のシャツをよだれまみれにしゃがって！」

テント内でぎゃんぎゃん言い合いをするチビ2人。その声でデブ

と痩せが目を覚ました。

「んゝ、朝っちゃんか？」

「あゝ、寝た気がしないな」

外から陽光が差し込み、薄暗いテント内を照らす。夜霧は完全に払拭され、熱気が漂いだしていた。昨日に引き続き、常夏を予感させる陽気だった。

風見鶏学園強歩大会の2日目が始まった。

「おい、朝比奈！ 早くしろよ」

「ちょっと待ってよ！ それとボクのことはユウでいいって言うてるだろ！」

「置いてくっちゃよゝ」

「うっさいデブリンマン！ 君は一人で先に行け！」

朝比奈悠樹は手鏡で色素の薄い髪を整えた。制服の襟元を正し、ポケットにハンカチとティッシュが入っているのを確認して、テントを出ようとした。そのとき、あることに気付いた。

制服の袖口の臭いを嗅いでみる。

「……大丈夫、だよね」

制服は、昨日一日中動き回って大量の汗を吸っているはずだった。悠樹が気になったのは、その臭いだった。何箇所かを嗅いでみる。

……自分ではわからなかった。

「おい、まだかよ！」

「待ってってば！ 今行くから！」

源一からの催促に、悠樹はテントから出た。

目が眩む強烈な陽光が悠樹を襲った。今が4月であることを忘れさせる常夏の空気が、そこには広がっていた。

テントの外には、昨日から行動を共にしている仲間が立っていた。大柄タルミの篠岡賢治。鶏がら細身の木下高志。そして、小柄小結こむすびの高坂源一郎だ。

悠樹は、小走りに源一の前まで進んだ。

「お待たせ」

「遅いって。他の連中はもうとっくに出発してるぞ」

「もう、ゲンはせっかちだなあ。先は長いんだからそんなにあわてなくたってダイジョーブだよ」

「ふん。チビは行動も遅いっちゃね。たるんでるんじゃないっちゃか？」

「ユウもおまえの腹には言われたくないだろ。……ていうか賢治、おまえ鬼臭いぞ」

「？　そういえば昨日風呂に入った覚えがないっちゃね。いや、俺、いつ寝たんだっちゃか？」

「俺たちがコインシャワーから戻ったときにはもう寝てたぞ。テント入ってすぐに寝たんじゃないか？」

「昨日のことを思い出すとなくんか鼻の下が痛むっちゃよ。なくんか大切なことを忘れてるような……。水色の、スポーツブラ？」

「！　ほ、ほら、もう行くよ。大分遅れてるんだからね……。あた「おまえが言うな」

悠樹の頭を叩いて先に行く源一。頭の上に「？」を乱造して源一の後続く賢治。悠樹は高志を見た。高志は意味深な笑み浮かべて悠樹を見ていた。

2日目朝 2

まだ午前中だというのに日差しは強く、太陽は勤勉に4人を照り付けている。源一たち4人は昨日に引き続き、緩やかな上り坂を歩いていた。

「暑い。このまま行くと痩せてしまうっちゃ」

「いいことじゃねえか。そんだけ肉ぶら下げてると正直重いだろ」

「ふん。ゲンだって人のこと言えないっちゃろ」

「まあ、なあ」

源一は苦笑して額の汗を拭った。剣道をしていた頃に比べて格段に筋肉の落ちた身体は、昨日一日動きまわっただけにも関わらず、疲労を残していた。

源一は鈍った身体をほぐしながら3人を見た。まだ朝だと言うのに、3人のペースは遅い。そもそのキャパシティが低い朝比奈悠樹の小さな身体も、見るからに文化部の木下高志の細い身体も、スポーツマンと健康に敵対を宣言している篠岡賢治の巨大な身体も、昨日からの疲れが残っているようだった。

4人は、トップを指す三崎省吾などがみたら卒倒しそうなほどゆっくりしたペースで山を登っていった。

「それで、ケンジはなんでさっきからガニマタなの？ 昨日はそんなじゃなかったよね？」

「……股ズレが始まったっちゃ」

「？ 股ズレ？」

「股と股がこすれて皮膚が擦り剥けるっちゃよ。悪化するとガチで出血するっちゃ」

「ああ、デブデブ病かあ」

「いや、スポーツマンもなるぞ。大腿部が発達するとやっぱりこすれるんだよ。俺も前になったことがある」

「ゲンもでぶっちゃだもんね」

そう言って源一の腹を撫でる悠樹。源一は、腹筋に力を入れた。

「わあ、かた！ かたゝい♪」

「筋肉の欠片もない賢治と一緒にされるのはさすがに不愉快だ」

「ゲン、同じデブ仲間だったのに。裏切ったっちゃね！」

「おまえも腹筋に力入れてみろよ」

高志に言われて力む賢治。3人の視線が賢治に集まった。

「ふん！」

ケツから起こる爆発音。悪臭と共に発せられたそれは、大放屁だった。

瞬間、3人の心はひとつになった。悠樹のつま先がすねに刺さり、高志の拳が腹にめり込み、源一の手刀が賢治の首筋に叩き込まれる。盛大な轟音を上げて大地に沈む賢治。

「ぐう、容赦がないっちゃね」

「屁をひるような奴に人権はない」

「うわ、くさ！ くさゝい！」

「うげえ、鬼臭いな」

埃を払って（ガニマタで）立ち上がる巨漢。何事もなかったように歩き始める4人。

「屁が臭いのは当たり前っちゃ。ところで高志。鬼ってなんだっっちゃ？」

「ああ、俺もそれ、気になってた」

「おまえら田舎モノだなあ。今、渋谷の105の前で流行ってるんだよ。意味的には『超』よりすげえって意味」

「ねえゲン。微妙に4つ少ないのは気のせいかなあ？」

「俺もそう思うが、ひょっとしたら渋谷に105という名前のバカラ賭博場があるのかもしれない」

「俺は東京生まれの東京育ちだが、渋谷でそんなのが流行ってるなんて聞いたことないっちゃ！」

「……『ちゃ』って、方言じゃなかったんだな」

「謝れ。君はルミコ先生に土下座して謝れ！ 今すぐだ！」

賢治の腹を殴る悠樹。賢治のショックアブソーバー（脂肪）は悠樹の打撃を完全に吸収していた。

「ゲンはどこ出身なんだ？」

「俺？ 俺は埼玉だよ」

「ああ、ダ埼玉っちゃね、ぐほ！」

源一は賢治の下腹部を鷲づかみにして引っ張る。

「埼玉の悪口禁止」

「ら、らじゃーっちゃ」

源一は賢治の腹（お肉）を離れた。賢治は腹を撫でつつ悠樹に向き直った。

「それで、チビすけはどこ出身だっちゃか？」

「え、ボク？」

悠樹は3度ほどまばたきをすると、長考に入った。

「考えることか？ 実家はどこにあるんだよ」

「……どこだろう。国内で本邸って名前の付くだけで24個あるけど。34個だったかな？ ボク的には一昨年の夏休みに過ごした函館のおうちが好きだな」

「……ブルジョアめ」

「……なんか嘘を言っていないのがわかる分むかつくっちゃね」

「……ああ、鬼むかつくな」

「そんなの知らないよお！」

そんなことをウーダラグータラ話しながら歩いていると、道を遮るように前方に建物が現れた。

2日目朝 2 (後書き)

ルミコ先生はランマの作者です。ルミコ先生ごめんなさい。

2日目朝 3

入り口前で足を止める4人。白い壁、赤い屋根。どこかテーマパークを模したようなその建物は、疲れている4人の神経を逆なでする。奥行きはわからないが、幅だけでもかなりの大きさだった。

「……迷路だっちゃんね」

「うん。迷路だね」

「まあ、昨日は完璧体力重視だったからな。今日は知力重視ってことかな」

そう言うのと、源一は入り口の横にかかっている地図を見た。

「……けっこう複雑だな。えっと、最初に右で次も右……。駄目だ。誰か紙持っていないか？」

「持っていないよ。こんなのがあるなんて思わなかったもん」

「ああ、鬼油断したな」

源一はあごを押さえた。自慢にもならないが、源一は記憶力には自信がなかった。手探りで行くしかないか、と覚悟を決めた時だった。

「よし、記憶したっちゃん。雑魚ども、行くっちゃんよ」

いきなり叫ぶ賢治^{デブ}。手は印を結ぶように編まれていた。

「なんだ、記憶したって、道を覚えられたのか？」

「ちよっと違うっちゃんね。きさまら凡人には真似をできない方法で暗記したっちゃんよ」

「うそばっかり！　じゃあ言ってみてよ」

「よし、まず、最初は右に行くっちゃん……」

賢治に言われたとおり地図上を指でなぞっていく悠樹。指はよどみなく進み、ついには出口へと到着した。

「おお、鬼すげえ！」

「へえ、やるじゃん。ボク、君を見直したよ。ただのデブじゃなかったんだねえ」

「伊達に糖分過剰摂取してなかったな」

「まあな。さあ俺を尊敬しろ！　そして愛すっちゅわー！」

「調子に乗るな。それで、どうやったんだ？　単純に暗記したんじゃないんだろ？」

猪八戒は超調子に乗る。

「ふふん。ゲンは両手で何個まで数えられるっちゃか？」

「？　10だろ」

「アマチュアらしい意見っちゃね。俺は1024まで数えられるっちゃ」

「??　なんのアマチュアだ？」

鼻の穴を広げて演説する賢治。

「つまり、2進法っちゃ。2進法だと2の十乗で1024。ここで地図の道と照らし合わせて、右に行く時は1、左は2というようにして数えていくと……、ゲン。どこいくっちゃ？」

「ああ、もういいや。よくわからないから。ほら、先行くぞ」

源一の後姿を見送る賢治。ふと気付くと、いつものようにひとりだけポツネンと立って居る自分に気付いた。悠樹も高志も、すでにいなかった。

猛烈な寂寥感に襲われかけたとき、再び源一の声が聞こえた。

「おい、賢治！　おまえがいないと先に進めないんだから早く来いよ！」

その声で賢治は我に帰った。源一に呼ばれ賢治は、たるんだあごを揺さぶり、にやりと口元を歪めた。

「しょうがないっちゃねえ。俺がいないとおまえらは本当になにもできないんだからな。よし、すぐいくっちゃー！」

賢治は贅肉を揺らしながらドスドスと源一の元に走っていった。

篠岡賢治

統計上有名なデータがある。

ある県で小学校低学年を対象に身体測定と学力検査を実施した。

その結果、足の長い子供は成績がいいというデータが出た。

このデータは、足の長さと言力との関係を表したものである。もちろん。幼少期における発育と知育の差異を表したものである。具体的に言うなら、同学年であっても4月生まれは3月生まれより長く生きている分、成長、教育ともに進んでいるということだ。

篠岡賢治は4月生まれだった。

歴史的に教育ママは、産業革命期、いわゆる中流階級ミドルクラスの誕生と同時期に出現した。余裕のできた生活資金を子供の教育に投資することによってより上の階級ハイクラスに成りあがろうとするのがその端緒だった。篠岡賢治の母親は典型的な教育ママで、幼少期より賢治に徹底した塾通いを強制した。賢治には同学年に3月生まれの妹がいたが、篠岡ママは、経済的にも2人を塾通いさせることができなかったので、賢治にのみ投資を続けた。

賢治の小学生時代は順風だった。4月生まれということもあり発育の早かった賢治は運動でも、塾通いによって身につけた知識によって学業でも優秀な成績を残していた。

優れた実績と篠岡ママによって植え付けられたエリート意識（あなたはパパと違ってでできる子なんだからいい学校を卒業していい会社就職するのよ）。それらは賢治を傲慢な子供にした。

「どうしてこんな簡単なことがわからないんだ？ おまえら本当に馬鹿だな！」

賢治はそれを声に出して級友を罵ののしった。結果、賢治は孤立していくが、塾通いに生活の主を置いている賢治には学校の友人などどうで

もいいことだった。賢治とは反対に自由奔放に生活している妹が校内で人望を集めているのは皮肉な話だった。

そして、賢治の悲劇は小学校6年の冬に起こる。私立中学校の受験に失敗したのだ。

小学校受験は経済事情により断念した篠岡ママは、中学校受験のために賢治に「金をかけてきた」のだ。全てはこのときのため！その受験に賢治は失敗した。代わりに、兄妹間の平等さを示す母親の意図のために記念受験させられた妹が合格してしまったのだった。

賢治の中学校3年間は、学校でも家庭でも地獄だった。

小学校からの孤立は中学校でも継続し、家庭内での賢治の立場も一変した。母親の期待に応えられなかった賢治は全ての習い事は止めさせられ、全てにおいて「我慢」を強要されるようになった。その位置は、小学校時代妹のいた位置であり、以前自分が通っていた位置には、当然のように妹がいた。

賢治はストレスから過食症になった。小学生の時には栄養管理から運動量まで管理してくれた母親は、太りだした賢治に侮蔑の視線を向けるだけで、義務以上の関わりを持たないようになっていた。

年齢差による知育、発育の差異は歳を重ねることで小さくなっていく。賢治は中学校では、太りだしたこともあり、運動での活躍の場はなくなり、今までは塾通いによって維持していた学業も徐々に成績を落としていった。

賢治は、逃げ出したかった。

家と学校のある地元においてもこの閉塞感は開放されない。だが、もはや親は遠い私立に通わせるだけの金銭を賢治には使わないだろう。家から通う学区内の公立高校では、間違いなく今の生活は継続する

ことになる。中学の３年間に加えて高校の３年間、今の孤立した生活を送るのには賢治は耐えられそうになかった。

そんなとき、風見鶏学園のことを知った。

公立高校並みに学費の安い全寮制の私立校。家からも地元からも離れられるこの学校に賢治はすぐに飛びついた。篠岡ママも厄介払いとばかりに賢治の全寮制高校への進学には賛成してくれた。こうして篠岡賢治は風見鶏学園への進学を決めたのだった。

篠岡賢治（後書き）

篠岡賢治の名前とビジュアルイメージは、わが心の師匠、伊集院光氏からです。

2日目朝 4

白い壁、白い床、天井には過剰な量の白熱球とスプリングラー。源一たちはエアコンの利いた白い迷路内を進んだ。暑さから開放され、4人は足取り軽く歩いていく。

「しかし無駄にお金使ってるよねえ。こんな絶海の孤島にこんなおっきな迷路作って」

「ブルジョワが言うなっちゃ」

「なんだと、おなかポヨヨン星人！」

言い合う悠樹と賢治。仲がいいなあと、思いながら源一は歩を進めていると最初の分かれ道に出た。

「賢治。これはどっちに行くんだ？」

「ちよっと待つっちゃ。えーっと、左っちゃね」

「こっちかあ。ケンジも少しは役に立つね♪」

悠樹は小走りに先に進んでいく。源一は、その悠樹の胸を、後ろから掴んだ。

「んにゃ〜〜！」

悠樹は源一に身体を持ち上げられて足をばたつかせる。

「な、なにするんだ！ は〜な〜せー！」

「落ち着け。とりあえず下を見ろ」

耳に源一の吐息を感じ、悠樹は首根っこをくわえられた子猫のように大人しくなり、下を見た。そこには、床がなかった。

「なな、なにこれ〜！」

「落とし穴だな。賢治、本当にこっちで合ってるのか？」

源一は腕に抱えていた悠樹を床に下ろすと、賢治に聞いた。

「それは、間違いないっちゃ。頭じゃなくて手で記録しているから間違いはないはずっちゃ」

「いちいち罫があるか調べながらだと、鬼時間がかかるぞ」

「性格が悪くなるな」

源一は一足で穴を飛び越えると、ひとり先に進んだ。悠樹が10を3回ほど数えると、源一はひよっこりと戻ってきた。

「おい。この先行き止まりだぞ」

「そんなはずはないっちゃ!」

「まるでデブ夫! 君はやっぱりただのデブだな!」

「……そういえば、入り口にあった地図、この迷路の地図とは書いてなかったっちゃね」

「どういう意地悪問題だよ!」

空気が重くなる。源一は、肺の奥の空気を吐き出すと、歩き出した。

「ゲン、どこ行くの?」

「とりあえずこっちに進むのが正解なんだろう? 歩きながら考えようぜ」

「待つつちゃゲン。分かれ道は全部で13箇所あるっちゃよ。運だけで進むのはほぼ不可能っちゃ」

「? ほぼって?」

「簡単なプロバビリティ（確率）の問題っちゃ。2分の1の13乗で、8192分の1だっちゃ。最初の分かれ道は正解が判っているから4096分の1っちゃか」

「?? そうなのか? それじゃあどうするんだよ」

「だから、答えのわかっているここでなんとか法則を見つけないと……」

賢治はたるんだあごを押さえて考え始めた。その顔を悠樹は下から覗き込む。

「ケンジってやたらサカシゲだね。自分でアタマ良いとかって思ってたの?」

「でぶどーん!」

「ぎゃー!」

悠樹は賢治のボディアタックに正面から衝突し、もんどり打って倒れた。

「お、おい大丈夫か？ 鬼吹っ飛んでたぞ」

「今のは朝比奈が悪いだろ」

「うゝ、ユダンしたゝ！」

仰向けのままじたばたと手足をばたつかせる悠樹。そこであるものに気付いた。

それは、紙だった。白熱球の明かりに隠れるようにして紙が天井に張ってあったのだ。

「ねえ、ゲン。あれ、なに？」

悠樹の言葉で全員が天井を見上げた。その紙には、こう書かれていた。

※

1秒間に2匹に増殖するスライムがいます。そのスライム1匹をビンの中に入れると、60分で一杯になります。

では、最初に2匹のスライムを入れるとビンは何分で一杯になるでしょう？

答えが奇数なら右に、偶数なら左に進みなさい。

※

「分かれ道のどこかにこういう問題があるっちゃか。なるほど、2日目は知力勝負っちゃね」

「ああ、そうみたいだな。だけどこの問題、鬼ばかりしてないか？」

「これは問題というよりナゾナゾだよ」

各々が各々の感想を言う。そんな中で、源一だけが無言だった。

「？ ゲン、どうしたの？」

「……これって答えは奇数なんだよな」

「？ そうっちゃよ。答えは59分59秒で奇数っちゃ。簡単だったでしょ？」

「なんでだよ？ 最初に2匹入れたら増える量も倍だろ？ 倍なら増える速さも倍で30分になるだろ？ なら偶数じゃねえかよ！」

力説する源一。3人はそんな源一を冷ややかな目で見ていた。

「ゲーン。君って頭がアレだったんだね」

「アレがアレだっちゃね」

「アレのアレが鬼アレだな」

「その意味のない会話、やめろ。本気でおまえらわかってんのか？
だって1秒で倍になるんだぞ？ ほら、賢治が言ってたろ？ 2
進法だよ。10秒でえっと、だいたい1000倍になるんだぞ。1
3秒で8000匹だ！ すぐにそこら中スライムで一杯になるぞ！
軍はなにしてるんだよ！」

「軍って……。もう問題がわからないとかじゃなくなってるし」

「ちなみに10秒だと512匹だな」

「いいか、ゲン。スライムは最初の1秒で2匹になるっちゃ。だから、最初に2匹入れるということは最初の1秒を省略しただけってことっちゃ」

納得しがたいというように眉間に皺を寄せる源一。

悠樹は目を細めて源一を見上げ、高志は肩をすくめ、賢治は頬肉ツラミを揺さぶらせながら首を横に振った。

「もういいや。ほら、ゲン。置いてっちゃうぞ」

3人は肩を並べて先に歩き出した。源一は、未だに足を止めて考えている。悠樹は、小走りに源一の側まで駆け寄ると、背中を押した。

「ボクは君がなにに悩んでいるのかわかんないよ。いいから先行こ
ゆっくりと歩き出す源一。悠樹は、難しい顔をしている源一の隣
に並んで歩いた。

2日目朝 5

その後も分かれ道の度に問題は出題された。難易度は次第に上がっていき、多少てこずりながらも4人は先を進んでいく。そして、それは12番目の分かれ道で起こった。

「あと2問だっちゃね」

「分かれ道が13個ってのは入り口の地図だろ？　まだあるかもしれないぞ」

「えー？　それじゃあ、スライムで一杯になったビンはどうなるんだよ。やっぱ割れるのか？　割れたら大変なことになるじゃねえか」
「ゲーン」。もうそれはいいから」

源一をなだめる悠樹を尻目に見ながら、賢治は天井を見上げた。天井には、問題の書かれた紙が張られている。

※

サイコロが3種類あり値段はそれぞれ1個61円、92円、123円です。

かず子ちゃんがこれらのサイコロを何個か買ったらちょうどぴったりの4000円でした。

さて、かず子ちゃんは全部で何個のサイコロを買いましたか？

答えが奇数なら右に、偶数なら左に進みなさい。

※

「かず子という名前に殺意を感じるのは俺だけか？」

「あ、わかるわかる。なぜかボクもムシヨーにむかついた」

「かず子って、たしか校長の名前じゃね？」

「面倒くさい問題っちゃねえ。紙と鉛筆が欲しいっちゃ。……って、

おまえらも少しは考えろっちゅわ〜！」

すでに思考を放棄し、談笑している3人に賢治は吠えた。

「ああ、問題はおまえに任せるよ。早く解けよ」

「贅肉ぜいにくマンはそれしかヤクに立たないんだから。早くしてよね」

「俺たちが考えてもおまえのほうが先に解けるだろ？ それだと俺たち鬼無駄じゃん。だからさっさとおまえひとりで解いてくれよ。早くな」

言葉にならない奇声を上げる賢治。と、その時悠樹がウサギのよう
に鼻をひくつかせた。

「……臭い」

「おま！ しつこいっちゃね。小さいことを何度もぶりかえして。きつと股間のブランブランしているのもちっさいに違いないうちや
！」

「うるさい！ モノの大きさは関係ないだろ！」

「なんでゲンが鬼怒ってるんだよ！」

「ちょっと待って！」

なにやら言い合いになっている3人を悠樹は黙らせた。

「ケンジが臭いのは鉄板で間違いのないことだけど、そうじゃなく
つて。ほら、ゲン、なにか焦げ臭くない？」

最初は嗅覚。源一も意識して嗅いでみる。すると、確かに焦げ臭
かった。臭いは、今まで通ってきた道から漂ってきていた。

次いで感じたのは触覚だった。エアコンの利いているはずの迷路
内で、4人はいつの間にか汗を掻いていた。

そして、4人は視覚によってその影を認知した。白い壁が赤く
染まったのだ。

「ねえ、ゲン。あれって……」

「ああ。燃えてるな」

源一は不安そうに源一の袖を掴んでいる悠樹を見下ろした。

ぱらぱらと、天井から小雨が降る。スプリンクラーが作動したの
だ。源一は大きく息を吸い込んだ。

「ばっつつかじゃねえのか！ 火の気なんてどこにあっただよよ！」
「うわーん！ なんなんだよおこれえ！」

「お、おい、賢治！ 鬼やべえぞ！ 鬼急げ！」
「ンままま、待つっちゃ！」

賢治は目を閉じた。問題を解くことに集中する。わめく周りの声は次第に小さくなっていった。キーボードをブラインドタッチするように太い指を高速で動かす。

「……解けた！ 答えは、61っちゃ！」

「よし奇数だな！ 右に走れ！」

源一の号令一過、4人は走り出した。先頭を高志、次いで賢治、悠樹、最後尾に源一が走り、1列になって炎から逃げていく。

全力で何箇所かの曲がり角を曲がると、13番目の分かれ道に出た。

「ケンジ、問題、問題は？」

「上だっちゃ！」

4人は同時に天井を見上げた。

※

ガムを噛むと怒られる宮殿は？

※

源一を除く3人は絶句した。ひとり状況を理解できない源一は、大声で叫んだ。

「これなら俺でもわかるぞ。答えは、バッキンガム宮殿だ！」

賞賛を期待していた源一は、白けた3人の反応に拍子抜けした。

「？ どうしたんだ？ 答えはバッキンガム宮殿だぞ」

「ゲーン。それがどうしたってゆーんだよお！」

「どうって！ ……これ、バッキンガムだとどっち行くんのだ？」

最後の問題には、すでに定型文と化していた文句、

「答えが奇数なら右に、偶数なら左に進みなさい。」

が、載っていなかった。これの意味するところは、ひとつだった。

「ひょっとして、最後は運試しってことおお！」

「前の問題のサイコロって、ひょっとしてこれのメタファーかよ！
鬼わかりづらいし！」

「ていうか！ この問題いらないっちゅわ〜！」

賢治は手を振り回して暴れた。その手が壁に付いた。

「アウチ！」

「あ、豚の丸焼き♪ きゃん！」

「そんなこと言ってる場合か！」

源一は悠樹の後頭部を叩いた。ここは迷路であるため源一たちは直線を走ってきたわけではない。炎は、壁一枚を隔ててすぐ近くにまで来ていた。

「ゲナー！」

「おい、どうするんだよ！ どうするんだよ、これ！」

慌てるチビと痩せ。源一は、火傷した手に息を吐きつけているデ
ブに、軽く人差し指を立てた握りで指した。悠樹にはそれが昨日見
たデッキブラシを握る手と同じだと気付いた。

「賢治、よく思い出せ。すばやく反応しろよ！ 入り口の地図で最
初の分かれ道はどっちだった？」

「……ひだりっちゃ！」

源一は、見えない竹刀を振り下ろした。

「右だ！」

方向を提示されて一斉に走り出す3人。源一は最後尾に付いて走
った。

出口が見えた。ラストパートとばかりに全員は全力で走った。そ
こでチビが転んだ。

「うわん！」

「ドジユウ！ TPOを考えて転べ！」

源一は、悠樹の襟首とベルトを掴むと、そのまま抱えて走った。

「あ、今ユウって言った♪」

「黙ってろおお！」

源一は出口に一気に飛び込んだ。

2日目朝 6

源一は出口に一気に飛び込んだ。猛烈な熱射に視界が奪われる。瞬間、地面が消えた。

源一は、悠樹の小さな身体を抱えて2転3転ころげる。ようやく回転が止まったとき、大きな悠樹の瞳と、中天に差し掛かった性格最悪な太陽が源一を見下ろしていた。

「ゲン！ 大丈夫？」

「……ああ、なんとかな」

胸に抱いていた悠樹を邪険にどかすと、源一は身体を起こした。迷宮を見上げる。そこで、源一は自分が出口からどうなったのかを理解した。出口の先の道は下り坂になっていて、逆光で視界を奪われた源一は、下っている道でバランスを崩し、そのまま転がり下りたのだった。

源一は、立ち上がって汚れを払っている悠樹を一瞥すると、周りを見渡した。

「賢治、木下。生きてるか？」

「な、なんとか生きてるっちゃ」

「ああ、俺も一応無事だ」

賢治と高志も、坂道を転げたようで、源一たちに近い場所で倒れていた。

そのとき、猛烈な爆音が辺りに響いた。源一は、爆音の元であり、今出てきたばかりの迷路を見た。

バックドラフトを起こした迷路は一気に炎上すると、焼け落ちていった。

その様子に圧倒されて呆然とする4人。

「俺たちって、実はそうとうやばかったのか？」

「え？ なに？ これって命の危険アリのイベントだったの？」

「やっべえ。鬼やっべえ！ もう少して死亡フラグ立つところだっ

たのかよ！」

「ちゅわあゝ！」

賢治の雄たけびを合図に、4人は歓声を上げた。4人は自分たちの置かれていた状況、そしてその危機を脱したことを認識し、興奮した。

「ゲン！」

「おう！」

ハイタッチするチビ2人。デブと痩せは奇声を上げて喜びをアピールした。それに水を差すように、どこかで女の高笑いが聞こえた。

「……」

一瞬で凍りつく4人。4人には、今の笑い声が、まだ顔も知らぬ校長、漆原和子のものと確信した。

「くっそ！ わかってるよ。おい、おまえら、少し先を急ぐぞ。太陽の位置から見てタイムリミットまで時間がない」

「鬼むかつくな、あの校長」

「ところでゲン、どうして最後の分かれ道、正解がわかったっちゃか？」

「ん？ いや、わかってねえよ。当てずっぽう」

「んな？ 間違ってたらどうするつもりだったんだよお！」

「一応正解は選んだつもりではあったんだよ。確率でいうなら51パーセントくらい。ほら、分かれ道の数が13個で入り口の地図と一緒にだったろ？ だからなにかしら関係があるとして、ひょっとして入り口と出口が逆だったんじゃないかと思ったんだよ」

「でもあの段階では分かれ道が13箇所だってことはわからなかっただろ？」

「だから当てずっぽうだって。ほら、先行くぞ」

ひとり先を歩く源一。残された3人は、源一の背中を見送った。

「ゲンって、頭がいいんだか悪いんだかわからない奴だな」

「そうっちゃんね。まあ、決断力は認めてやってもいいっちゃ」

「んふふ、そうだね」。口は悪いしすぐ叩くけど、ゲンはすごいね

」

悠樹は小走りに源一を追いかける。その後をデブと痩せは追った。

「あゝゝゝ！」

急に大声を上げる悠樹。

「な、なんだ？ どうした？」

「デブが坂から転げ回るところ、見逃したく、あた」

「びっくりさせるな」

「まあ、絵的には鬼面白いけどな」

「……おまえら、迷路で助けてやったのになんで俺を尊敬しないんだっちゃん？」

3人は、賢治が抱く疑問を、平然と黙殺したのだった。

2日目 昼 1

不揃いな連中だった。チビ、デブ、痩せ、メガネの小デブ。戯画的に言うならば、後ろに砂煙を巻き上げながら、その連中は休憩所に滑り込んできた。

「とうちゃくつく。せーふ？　せーふ？」

「おっけおっけ！　セーフだ！」

「早くチェックしろ！」

「ぶばあ、ぶばあ」

4人は入り口でカードと昼食を渡され、ようやく一息ついた。

「ボクの順位、38番だって。迷路でけっこうリタイアしたみたいだね」

「まだ2日目だろ。確か新入生って150人くらいだったと思うけど、もう4分の1しか残ってねえのかよ」

「うえ、鬼きついな」

「ぶばあ、ぶばあ」

談笑に加われない賢治は、荒い息とバケツで水をぶっかけられたように汗（脂分多め）を垂れ流し、地べたに大の字に倒れこんでいた。

「うわあ、すごい汗。なんか身体から湯気が出てるし」

靴の先で賢治の腹を蹴る悠樹。腹は、プリンをスプーンでつついたように大きく揺れた。

空気が揺れた。

「よう、ずいぶんゆっくりしているんだな。あんまり遅いんでリタイアしたのかと思ったぞ」

他の3人を無視して源一に声をかけてきたのは、三崎省吾だった。源一は省吾に向き直る。悠樹は源一の影に隠れ、高志は恐々と省吾から離れた。そして、まったく反応できないデブ。

「三崎か。おまえ、順位は何番だ？」

省吾は、右手に持っていたカードを指し示す。そのカードには『1』と書いてあった。

「順調じゃねえか」

「まあな」

笑い合う源一と省吾。悠樹は源一の影から小型犬のようにうなり、高志は遠巻きに現状を見守る。そして、まったく反応できないデブ。

「そういえば聞いたぜ。三崎、おまえ、有名人だったんだな」

「？ なにがだ？」

「ちびっ子ギャングを率いて粹がってたらしいじゃねえか」

それを聞いて省吾は、わずかに口角を下げた。

「まあ、なあ。週刊誌に実名と顔写真入りで報道されたから、なあ」

「少しは悪びれろよ。こっちは嫌味を言ってるつもりなんだから」

省吾は軽く肩をすくめた。それが、やけにさまになっていて源一の癪に触った。

「それで、なんの用だよ。トップがビリを笑いに来ただけか？」

「つれないな。それでも俺はおまえに一目置いてるんだぜ」

「嬉しくないな。不良に一目置かれても」

苦笑を漏らす省吾。

「早く追いかけてこいよ。1番になったらなつたで張り合いがなくてなあ。対抗馬がいらないんだよ」

「がつつくなよ……」

源一は笑みを作ると、影に隠れている悠樹の肩を抱き寄せた。いきなり矢面に立たされた悠樹は、見下す視線を向ける省吾に、アゴを90度上げて見下す視線を向け返した。

「こいつらと、すぐに追いつくから楽しみに待ってろって」

「……友情なんかにウェイト置いてるなよ」

「ああ、わかってるって。だけど、こうするとおまえ、嫌がるだろう？ なにかトラウマあるんだろ」

省吾は一瞬だけ呆けた顔を作ると、苦笑して悠樹の頭越しに源一

の肩を叩いた。

「先に行ってるぜ、相棒」

そう言うのと、省吾は去っていった。省吾の後姿を見て悠樹は頬を膨らませた。

「なにアイツ！ ゲンの相棒はボクだっての！」

「……そうだったか？」

「お、おいゲン。あの三崎省吾相手に、おまえ、鬼すごいなあ。怖くないのかよ」

「怖い？ 怖くはないだろ。ま、あいつは狂犬みたいなところはあるけどな」

源一は、初日に殴りかかれたのを思い出して言った。

「ぶばあ、ブバ、ブヴァ！」

そのとき、ひとりひょうたんの中で酒になりかけていた猪八戒がむせた。

「ああ、そういえば、こいついたな」

「置いてっちゃおうよ」

「なんか言ってるぞ」

悠樹は、いやいやながらも倒れている賢治の口に耳を近づけた。

「で、なに？」

ぼそぼそと悠樹の耳に呟く賢治。瞬間、悠樹は賢治のたるんだ腹に全体重を乗せてストンピングを喰らわせた。

「ぶばお！」

「なにクダラナイ妄言吐いてるんだ君は！ もういい！ ゲン、ご飯早く食べよ。あのボアボア犬おっかけるんだからね！」

「ボアボア犬ってなんだ？」

「狂犬の親戚の友達かなんかだろ」

源一と高志は、肩をいからせて休息所に入っていく悠樹に続いた。ひとり取り残される賢治。

ちなみに賢治が悠樹に言ったことは、「ゲンの相棒は、おれだっちゅわ」だった。

こうして、2日目の午後は始まった。

2日目昼 2

午後の行程は、それ以前から比べると拍子抜けするほど単調だった。危険なトラップも難解な問題もなく、ただただ平坦な上り坂があるだけだった。高坂源一郎、朝比奈悠樹、篠岡賢治、木下高志の4人は順調に規定ルートを踏破していく。

頭上を鳥が滑空した。強い日差しと生暖かい風は4人の体力と忍耐を奪い去っていく。海は遠く、ずいぶん高いところまで登っているのがわかる。

「こうも順調だとかえって不安になってくるな」

「あ、それ、ボクも思った。今までのことを考えると、校長ってソートー性格悪いよねえ」

「和子か。どうせメガネに鎖なんか付けてるオールドミスに違いないっちゃ」

「どうせどこかで俺たちが苦しんでいるのを見て笑ってるんだぜ。鬼むかつくな」

4人は談笑しながら足を進めた。共通の敵を作ること仲間が団結する。だが、それは砂上の楼閣でもある。

「ケンジ、もうちょっと早く歩けないの？ 君、ガニマタすぎ」

「……股ズレがひどくなってきたっちゃ」

そう言う賢治は四股^{しこ}を踏むようにガニマタのまま腰を下ろした。その姿勢はきついらしく、膝がぷるぷる震えていた。

「？ 股の部分、なんか変色してるよ。それ、汗の染みじゃないよね」

賢治は腰を叩きながら姿勢を正して言った。

「股が擦れて擦り剥けてるっちゃ。たぶんもうすぐ破けるっちゃよ」

「そのズボン、新品だろ？ っていうか俺たちと同じはずだからまだ2日しか履いてないだろ？」

「モツタイナイなあ。もうちょっと大事に履いたら？」

「札束を落ち葉代わりにお芋焼くようなヤツには言われたくないっちゃ」

「……その間違ったお金持ちイメージ、ヤメロ」

悠樹は賢治の脂肪を殴りつける。脂肪は、ただ盛大に揺れただけだった。

「でも、そういう間違えたイメージってあるよな」

「？ 例えば？」

「泥棒にほっかむり」

「なるほど。片手に担いで自転車でソバ屋の配達っちゃん」

「それで、電柱に激突して頭に乗るんだろ？」

どっと沸く4人。そして悠樹は禁句を口にする。

「あと、サティを流す喫茶店とか？」

「……それはないな」

「ああ、ないっちゃね」

「鬼ないな」

「なんでだろう！ 喫茶店にサティはベタだろ！」

「うるさい！ サティにだって喫茶店ぐらいある！」

「ゲン、エリック・サティってのは音楽家で……、ゲン？ 泣いてるの？」

「っぐす。泣いてねえよ！ ちくしょう、駅から少し離れてるからってみんなサティを馬鹿にしやがって。サティはいいデパートなのに」

鼻をすすり上げる源一。それを見てどっ白けの3人。

「今の会話のどこに地雷があったっちゃか？」

「よくわからないが、こいつもトラウマの鬼多いヤツだな」

高坂源一郎の印象は、初日から比べてだいぶ変わってきていた。すぐ怒鳴りすぐ叩く源一の変化に悠樹は、嬉しく思っていた。それは、外面の付き合いではなく、内面を見せてくれていると思ったからだ。

対して自分は、と、悠樹は思う。女であることを隠し、源一を謀^{たばか}つ

ている。自分を隠し源一に内を見せられないことに悠樹は、多少の罪悪感を覚え始めていた。

「ほら、ゲン。涙を拭いて」

「っいらねえよ！」

源一は悠樹に差し出されたハンカチを払い、自分の袖で目を擦った。

「ふん。ハンカチ持参とはチビすけはガチおぼっちゃまだっちゃね」

「……なんか、突っ込んだほうが負けって感じだから突っ込まなかったけど、君、鼻毛出てるよ」

賢治は、鼻毛のことを指摘されると、太い親指と小指を鼻に突っ込んで抜き取り、涙目で悠樹の顔の前に差し出した。

「？ なんだよ」

「っふ！」

「ぎーやー！」

鼻毛は賢治の指を離れると弧を描きながら悠樹に向かっていった。生臭い息が悠樹の顔にかかり、鼻毛は宙を舞ってどこかに消えていった。

「何てことするんだ、このハンバーグ！」

「……ハンバーグってなんだっちゃ！」

「どうせハンバーグ好きなんだろ。デブだからね！」

「っく！ ハンバーグを馬鹿にしてえ！」

「俺、痩せてるけどハンバーグ好きだぞ」

「俺も。ユウはハンバーグ、嫌いなのか？」

「……好きだけど。いいんだよ、ボクのこととは！」

そんなことを話していると、前方で水の音が聞こえた。

2日目 昼 3

そこは、溪谷だった。遠く下方には川が流れている。急流は、飛沫をあげながら源一たちの耳にその勢いを伝えていた。

その溪谷に架かるのは、映画のロケーションにそのまま使えそうな古びた鉄橋だった。その鉄橋には1車線の線路が引かれている。

「……鉄橋だな」

「……線路だね」

「鬼悪い予感がするのは俺だけか？」

「奇遇っちゃね。俺も今、ものすっげえ悪い予感がしたっちゃ」

顔を合わせる4人は一様に不安な顔をしていた。

「と、とにかく、進まないことには始まらない。行くぞ」

そう言うのと、源一は鉄橋に足を踏み入れた。鉄橋の錆が、ぱらぱらと下に落ちていく。

「見た目より丈夫そうだな。おまえらも来いよ」

悠樹は源一に続き鉄橋に入る。高志、賢治も続いて鉄橋に入った。

4人は、ゆっくりと鉄橋を渡っていった。

「なんか昔のセイシュン映画であったよね。こうやって鉄橋渡るの」

「その映画って無事渡れたんだっけか？」

「……いやなこと思い出させるっちゃね」

「は、はは。さすがにそこまで鬼べたなことはやらないだろ」

4人は重いため息を吐いた。悪いことというのは確率論を無視して起こる。それを証明するように遠くで汽笛が聞こえた気がした。

源一は話を変えるために賢治に話しかけた。

「おまえ、ふらつきすぎだぞ。足場もしっかりしてるんだからもうちっと安定しろよ」

「ゲンは甘いっちゃ。世の中の規格品は基本的にデブを対象に作ってないっちゃ」

賢治はゆっくりと片足を上げ、ふらつきながら一歩進んだ。足場

は、賢治が動くたびに大きく軋^{きし}んだ。

「まあ、150キロだもんなあ」

「ただのデブじゃなくて鬼デブだな」

「そーいえばケンジってただの丸太橋でおっこちて柱にしがみついてたもんね。バランス悪いんだ」

汽笛の音が大きくなった気がした。それに合わせるように線路が小刻みに振動しているような気がした。

「賢治って結構自分でデブネタ振るよな。今のこととか股ズレのこととか」

「俺が人よりほんの少しだけ太っているのは事実だっちゃからね」

「少しじゃないだろ！ 君はホントーに自分を客観視できないヤツだな。この猪八戒め！」

「ふん、小坊主が！」

「賢治が猪八戒でユウが小坊主で三蔵なら、ゲンはなんだ？」

「ゲンはお猿さんだね♪ あた」

源一に頭を叩かれる悠樹。

「だれが猿だ」

「それで、高志はカッパっちゃね」

「うん。河童だね」

「……河童だな」

「なんで俺が河童なんだよ！」

高志を除く3人は顔を見合わせた。

「木下って、額広いし」

「タカシって髪薄いし」

「高志はハゲだっちゃ」

「おまえら、言っていることと悪いことがあるだろ！」

線路が大きく揺れた気がした。源一はこめかみを押さえて足を止めた。そろそろ韜晦^{とうかい}は不可能な段階にまできている。

「？ ゲン、どうしたの？」

源一は、後ろを振り返り、3人に言った。

「言いたくない。言いたくはないんだが……。俺も、言っておくことがある」

3人は足を止めて源一の言葉を待った。源一は、大きく息を吸い、心中を吐露した。

「やることに独創性がないんだよおお！」

その言葉を合図に3人は走り出す。先頭を高志、次いで賢治、悠樹、源一は最後尾に付いて走り出す。そして、そのさらに後ろには小型貨物列車がガシユガシユいいながら鉄橋の上を爆走してきていた。

「ばっかじゃないのおお！ なんなんだよこれええ！」

「うおお！ 死ぬ、鬼死ぬうう！」

「ぶばあ、ぶばあ！」

一人先頭を突っ走る高志。2番手を走る賢治とその後ろの悠樹と源一。そこに問題が発生した。

「！ ちょっとお、ケンジ遅い！ もっと速く走ってよおおお！」

「ブヴァ、ブバア」

ガニマタ気味にどすどす走る賢治。横に幅があるために回り込むこともできない。

鉄橋を渡り終えた高志は、すぐに線路から外れて後ろを振り返って叫んだ。

「お、おい、早くしろ！ すぐ後ろまで来てるぞ」

源一は舌打ちした。すでに下を流れる溪流の音は後ろの列車の音に飲まれて聞こえない。刻一刻と迫る爆音。源一は、つま先に力を入れた。

一足で悠樹に並び腰を抱きかかえ、二足で賢治を横に突き飛ばす。そして、三足で自身も横に大きく飛んだ。

間一髪で過ぎ去っていく列車。悠樹は、源一の腕の中で列車を運転している猿の車掌と目が合った気がした。その後に続く浮遊感、悠樹は固く目を閉じた。

2日目 昼 4

「……う、ユウ！」

ゆっくりと目を開ける。眼前に、源一の顔があった。

「あ、ゲン。おはよう、あた」

源一に頭突きされ、悠樹は覚醒した。足元に地面はなく、左手で源一に抱きしめられていた。自分の胸と源一の厚い男の胸が合わさり、心臓が飛び跳ねた。

「にやにやああ！」

「暴れるな！ とりあえず落ち着け！」

源一は額を合わせ、じっと悠樹の瞳を覗き込んだ。吐息のかかる距離、悠樹は慌てて横を向いた。

その視線の先には、クレーンに吊るされた豚肉があった。

「ぶばあ、ぶばあ」

足をばたつかせて鉄橋にぶら下がる賢治。遠い下方には水の流れる音がする。悠樹は、慌てて足を源一の腰に絡ませて首に抱きついた。

源一は、悠樹が大人しくなったのを確認して、橋の上にいるはずの沙悟浄を呼んだ。

「木下、木下！」

返事はない。鉄橋の下からでは、上の様子はわからなかった。源一は大きく息を吸い込み、名前を叫んだ。

「高志！ いないのか！」

「あ、ああ。悪い。ここだ」

源一は、安堵の息を吐いた。顔に出さないように注意しているが、源一の右腕は限界だった。

いくら悠樹がコンパクトといっても30キロ以上の体重はある。それに加えて自身の軽くない体重。さらには列車を避けるために鉄橋から飛び出した時の衝撃。それらは源一の右腕一本に全て負荷と

してかかっていた。源一の右腕の筋は、伸びきっていた。

「とりあえずユウを引き上げてくれ」

「わかった」

高志は腰を屈めて悠樹に手を伸ばした。悠樹は、源一の顔を覗き込んだ。

「早く行け！　いくらおまえがうーちゃかだからって、おまえを抱えたまま片手で身体引き上げる余裕はないんだよ！」

源一は悠樹の顔を見ずに言った。それで、悠樹は源一にも余裕がないことを知った。高志の手を取る。悠樹は引き上げられ、橋の上に着いた。

「ぶばあ、ぶばあ、お、おちる、おちるう！」

賢治は足をばたつかせながら上にいる高志と悠樹を見た。高志は、上から賢治を見下ろしていた。

悠樹は、ぞっとした。昨日の高志との会話を思い出す。

『あの2人を出し抜いて俺と組もうぜ』

ここで、源一と賢治を落とせば謀^{はか}らずも昨日の会話は実現する。

悠樹は、慌てて高志を止めようとした。高志は、悠樹を横目で眺め、苦笑した。それで悠樹は自分の考えが杞憂だとわかった。

「おい賢治。今持ち上げるから大人しくしてろ。ユウ、一緒に引き上げて。こんな鬼デブ、ひとりじゃ引き上げられないよ」

「あ、うん。わかった」

悠樹は高志と共に腰を落とし、汗で湿った賢治の制服を掴んで持ち上げた。

「ボク、君が2人を落として先に行くかもって思ったよ」

悠樹は高志にだけ聞こえる声音で言った。

「ああ、俺もそうしようかって思ったんだけど」

「考え直したの？」

「まだ1日あるから。ユウと2人じゃ鬼きついって気付いたんだよ」

「ん、そだねえ。きつと、これからもまだまだみんなで協力しないと先に進めないんだよ」

「ほら、おまえらちよつと横にどけ」

そこに這い上がってきた源一が横に並んだ。悠樹と高志はお喋りをやめて源一の場所を作った。

源一は、腰を屈めて賢治の襟首を掴んだ。

「おちるう。たすけて」

鼻を垂らして涙目の賢治。3人はそれを見て顔を見合わせた。

「つぶ。すっごいブサイク」

「鬼写真取りたいな。一生強請^{ゆす}れるぞ、このブサイク顔」

「もう『ちゃ』をつける余裕ないんだな」

指をさして笑われている賢治は、しかし、言い返す余裕はない。

源一たちは、一頻^{ひとしき}り笑った後、賢治を引き上げることにした。

「おっし、一気に引き上げるぞ、いっせえの」

「っせ！」

3人は力を入れ、賢治を持ち上げた。昨日の丸太橋と違い、水の浮力による助けはない。150キロの巨漢は、3人がかりでようやく持ち上がった。

鉄橋の上に引き上げた後、4人は荒い息を吐いて仰向けに寝転んだ。

「重いんだよ、環境の敵が！」

「でぶでぶ戦隊デブレンジャー！ 君は世界平和を守る前にやせろ
〜！」

「鬼、いや、神デブだな！」

「ぶばあ、ぶばあ。うう、怖かったっちゃ〜」

言い返すこともせず、賢治は全身の脂肪を重力に引っ張られて垂れ延ばしていた。

源一は、ゆっくりと身体を起こすと、未だ倒れこんでいる高志に左手を差し抱した。

「高志、助かったよ。ありがとうな」

高志は、源一の微笑を見上げると、少し照れくさそうに源一の手を取った。

「俺でも少しは役に立つだろ」

「ああ。おまえがいなけりゃ、運が悪ければ死んでたよ」

源一は、左手で高志を起こした。

「ゲン。ボクも」

ユウは座ったまま源一に両手を伸ばした。

「はいよ。ほら」

源一は悠樹に左手を差し出した。悠樹は源一を見上げた。夕日に照らされて光る源一のメガネ。それで、悠樹は気付いた。

「あゝゝ！」

「な、なんだよ、急に」

「もう日が暮れかかってるう。ゲン、もう時間がないよお」

その言葉で源一は初めて気がついた。悠樹を引き起こすと、源一はのびている賢治に言った。

「おい、賢治！ これから走るぞ、早く起きろ！」

「うえ、勘弁っちゃ」

「もういいよ。コイツ置いてっちゃおうよ」

「ユウ、おまえって鬼シビアだよな」

源一は無理やり賢治を起こすと、汗に濡れた尻を引っぱたいた。湿った賢治のスラックスは、鈍い音を上げた。

「ほら、行くぞ！」

先頭に高志が走り、無理やり賢治を走らせ、その後に源一は続いた。悠樹は、足を動かしながら源一の顔を覗き込んだ。

「？　なんだよ」

「ん、なんでもない♪」

「変な奴だなあ」

源一は悠樹を一瞥すると、賢治に並んで走り出した。

悠樹は源一の隣に並ぶと、賢治に合わせてゆっくりと走った。

三崎省吾（前書き）

今回は省吾の独白が長々と続きます。あまり面白くないので、興味を無くした方はどうぞ、そのまま立ち去らずに、同時投稿の次話にお進みください。

三崎省吾

その日の夕食は、和食、洋食、中華、なんでもありのバイキングだった。強歩大会始まって以来、初めてまともな食事にありついた源一たちは、おおいに楽しんだ。

「あゝ、ケンジ！ ボクのニンニク取った〜！」

「お金持ちのくせにけちっちゃねえ。お金ちゃまめ！」

「食いたければ自分で取ってくればいいだろ。鬼意地汚いな」

源一は、エビチリを食べながら仲間が騒いでる様子を眺めていた。

「？ ゲン、どうしたんだ？」

「いや、高志。気付いてるか？」

「なにがだ？」

「俺たちがまともな食事にありつける理由」

源一は、食堂の中を見渡した。昨晚と比べてもかなり数を減らした学生がそれぞれ食事を取っていた。

「ああ。だいぶ減ったなあ」

今日最後にチェックを受けた源一のハンモックナンバーは25番だった。初日に150人いた新入学生は、実に6分の1まで減っていた。

「たぶん、明日はもっと減ることになるぜ。校長は俺たちを完走させる気はないんだろうな」

源一は、悠樹と皿の上の肉を取り合っている賢治を見た。休息所に着いたときは息も絶え絶えだった賢治は、食事で元気を取り戻していた。

「ま、食欲が戻ったんなら明日も大丈夫だろ」

源一は横目に食堂を出て行く影を見つけると席を立った。

「？ ゲン、どこ行くの？」

「便所」

「行儀悪いっちゃねえ」

源一は、軽く手を振ると食堂を出て影を追った。

夜は熱射の降り注ぐ昼と違い、肌寒さを感じた。ずいぶんと高所にまできたこともあるのだろう、冷えた風が森を揺らし、葉擦れの音が休息所を包んだ。

「三崎！」

源一は一人で先に過ぎ去ろうとしている三崎省吾に声をかけた。

省吾は、振り返ると源一に目を止め、片頬を吊り上げた。

「高坂、無事に休息所に着けたみたいだな。心配してたんだぜ。へぼ連中のおもりをしながらじゃあ、リタイアするかもしれないってな」

「これでも助けられてるんだぜ、そのへぼ連中にな」

視線を絡ませる省吾と源一。2人は、同時に微笑を浮かべるとそばにあったベンチに腰を下ろした。

「おまえは順調に1位をキープか？」

「まあ、な。ま、正直あまり意味のあることでもないみたいだけだな。要は明日1位でゴールしなければ、今までの順位なんて意味がないみたいだしなあ」

「それならチンタラ進んでいる俺のほうが賢いってことになるな」

省吾は隣に座っている源一に横目で視線を送り、苦笑した。

「そういえば、聞いたんだってな。俺の昔のことを」

「ああ。と、いつでも昔群れて粹がっていたってことだけけどな」
省吾は背もたれに深く寄りかかると天井を見て重い息を吐いた。

省吾は中学までのことを源一に語った。

「最初は、ほんと、些細な^{くだ}ことだったんだよ。中学に上がって友人が上級生にいびられたってだけ。ほんの少し前まではランドセルを背負っていた俺たちは中学校のルールなんてものは知らないし、関係ないと思っていたんだ。だが、連綿と続く上級生と下級生の関係

ってのは、まあ、あったわけだ。うちの中学校が特殊だったのかも
しれないけどな。典型的なまでの体育会系だよ。下級生はまったく
知らない上級生にも挨拶をして絶対服従。そんなくだらないことを
上級生は俺たちに強制しようとしたんだな。

早い話が俺たちはその命令を拒否したんだ。俺を含めて5人の、
ほんの小さなグループ。それが最初だよ。

幸いというか不幸にもっていうか。俺たちは腕っ節にはそれなり
自信があつてな。いびりにくる上級生連中を返り討ちにして、いい
気になつてた、その頃がまあ一番よかったな。

上級生たちを黙らせて、校内を肩で風切って歩くようになった辺
りから話がでくなり始めた。昔風に言うなら不良番長ってやつだ。
敵はどこにでもいるもので、校内の次は近隣の中学。その次は高校。
これでも苦勞したんだぜ。仲間を守るため、我を通すために強くな
ろうと身体を鍛えたりな。もつともおまえと違って我流だけど、な。
そのうち、守る仲間が増えていった。友人の友人、またその友人
といった感じでな。その頃には俺たちの間でも変な連帯感も生まれ
ていたんだよ。なぜか見たこともない年上が俺の子分を演じている
こともあつたし、なあ。

俺たちのグループが300人を超す頃、地元の駅でのさばってい
るチーマーと揉めた。まあ、当然だな。枝葉を広げていればぶつか
るもんだよ。その頃には抗争なんてのは日常になっていて、俺たち
にしてみれば、またか、ってな具合だったんだ、最初は。

俺たちは、まだ学校内で粹がつている分にはよかったんだよ。い
ろんなところも見逃してくれる。目障りではあっただろうがな。だ
が、チーマーやらカラーギャングやらは俺たちとは毛並みが違った。
後で知ることになるんだけど、あいつら、暴力団に頭下げて後援し
てもらってるんだぜ。いわゆる暴力団の準構成員ってやつだな。正
直、そいつら自身は大したことはなかった。だが、その後ろには、
大人がいたんだ」

省吾は当時を思い出して苦い顔をした。源一は、黙って省吾の話

を聞いた。

「慰謝料と称した金の要求。それを拒否したら弱いやつを囲んで集団リンチ。そこまではよくある話だった。だから、俺たちは当然のように反撃した。暴力団相手に、な。我を通すため、仲間を守るために俺たちは戦った、少なくとも、俺はそのつもりだった。」

だが、な。仲間は違った。やりすぎたってことに遅まきながら気付き始めたんだな。今、冷静になって考えてみればその通りだと思うよ。だってその当時、俺はまだ14歳だぜ。明らかにやりすぎだったんだよ。

仲間がやられればやり返す。それで、またやられたらお返し。そんな報復合戦の繰り返し。正直、死者がでなかったのが不思議なくらい過激さは増していったんだ。暴力団の連中も辟易していたと思うぜ。中学生のガキが調子に乗って暴力のプロに張りあってるんだからな。本来だったら頃合を見定めて手打ち。だが、リーダーである俺は徹底抗戦を叫んで噛み付いてくる。話はどんどんでかくなっていった。警察なんかも出張ってきて、どんどん大事になっていった。

それで、話はでかくなるだけになって、弾けた。いつの間にか俺は仲間に売られていたんだ。俺の知らないところで暴力団との手打ちは成立していて、責任は全て俺ひとりにかぶせられた。俺は、守っていたはずの仲間に裏切られたんだよ」

源一は、省吾を見た。省吾は天井の一点を凝視していた。その横顔からは、感情は読み取れなかった。

「だから、仲間なんてものは信用できない。裏切られるだけだって長い話。おしまいおしまい」

省吾は、その時の絶望感、その他いろんなものをあえて語らず、話を終えた。

「なんだ、今からがいいところだろ？ おまえが痛い目に遭うところを端折るなよ」

省吾は、口の端を吊り上げて源一を見た。

「あいにく、俺はこの通り5体満足だ。心はズタズタにされたがね」
「？ 暴力団はおまえになにもしなかったのか？」

「ああ。くだらない、3つの理由からな」

省吾は体勢を直し、身体を源一に向けた。そして、指折り数えていく。

「ひとつは俺の知らないところで慰謝料が支払われていたこと。ふたつめは、タブロイド誌で掲載されたために俺が有名人になったこと。あいつら、暴力団のことは一切触れないで、俺たちが快楽的に破壊活動を繰り返すってな論調で報道してなあ。もつとも、慰謝料集めのためにけっこうな無茶はやったみたいだけどな」

「自分は無茶してないみたいじゃねえか」

「それでも、俺たちの行動理念はしっかりしている、していたと思うぜ。仲間を守るって1点は、な。まあ、タブロイド誌の報道は結果論から俺に有利に働いたんだ。雑誌読者は俺と暴力団との関係を知らなくとも、警察関係者は知っている。俺になにかあればそれは暴力団の仕業だろうってな」

省吾は立ち上がった。話は終わりとばかりに歩き出そうとする。

「待てよ。3つめの理由は？」

「実にくだらない。暴力団のお偉いさんが俺に目を留めたんだってよ。若いのに大した度胸だってな。以来俺はそのお偉いさんに頭が上^すがらない生活を強制されてるってわけだ。この学校にもそいつに勧め^{すす}められたから進学したってのが理由だしな」

省吾は、食堂の扉を見ていた。源一もその視線の先を見た。そこには、悠樹が扉の隙間からどこかの家政婦ばりに源一たちを覗いていた。源一の視線に気付き慌てて隠れる悠樹。省吾は、その様子を見て何度めになるかわからない苦笑を漏らした。

「正直おまえらみたいな仲良しグループを見てると反吐^{へど}がでるんだよ。特に高坂には俺も一目置いてるし、な。ま、おまえがそのまま仲良しグループを続けるってんなら、それごと叩き潰すのも、案外面白いかもしれない、な」

省吾はそう言うと、源一の肩を軽く叩いてその場を去っていった。

源一はベンチに腰掛けたまま、省吾を見送った。

軽く伸びをして、省吾の話を反芻^{はんすう}してみる。自分とは大同小異、だと思った。場所もシチュエーションも違うが、やはり、源一も親友に裏切られたのだ。

「案外自分でそう思ってるだけなんじゃねえのか？」

源一の言った独り言は、省吾に向けられたものか、それとも自身に向けられたものか、源一自身にもわからなかった。

ベンチが大きく揺れた。悠樹が飛び乗ったのだ。源一の隣に腰下ろす悠樹。

「ゲン、なかなか帰ってこないから心配したよ」

「心配することもないだろ。こんなところで迷子になるわけもあるまいし。それで、どうしたんだ？」

「あ、うん。賢治が食べすぎで動けないって」

「馬鹿かあいつは」

源一は、省吾のように苦笑を浮かべると、悠樹と連れ立って食堂に戻った。

木下高志

湯煙、檜の風呂、そしてでかでかと描かれた富士山。2日目の風呂は、温泉だった。どこか下町風の銭湯を模したこの温泉に校長のセンスのなさを実感しながら源一は肩まで湯船に浸かった。

「ふう、いい湯だったねえ」

隣に賢治と高志が並ぶ。風呂の順番はハンモックナンバーが適用され、最下位の源一たちが最後の入浴になっていた。

「飯といい風呂といい、けっこう粹なことやってくれるな」

「そうか？ 命がけの対価としては安いと思うけど」

源一はそう言うとき白く濁った湯で顔を洗った。

「それで、チビすけはどうしたっちゃか？」

「知らん。便所に行くから後で来るってなこと言ってたけど」

「ふん、糞か。あ、いまフンとクソがかかったっちゃね、ごふお！」

「馬鹿なこと言ってんじゃねーよ」

源一は賢治のわき腹を湯船の下で手刀で突き刺した。手刀は深々と賢治の脂肪に埋まった。

ふと思う。源一は今、ほぼ反射的にツツコミを入れていた。ボケに対するツツコミ。それは、賢治が源一たち相手にならボケてもいいと思ったということであり、源一が賢治たち相手にはツツコミを入れてもいいと思ったということだ。それは、昨日今日知り合ったばかりの賢治たちに、源一が心を許し始めているということ、だった。

三崎省吾の言葉に触発されたわけでもないが、確かに馴れ合っているのかも知れない。源一はそう思い、痛めた右腕を軽く揉んだ。

「ゲン、どうしたっちゃか？」

「ああ、そうだな。一応はつきりさせておいたほうがいいな。俺たちはたまたま道中が一緒というだけで別に友人でもなんでもない。変に馴れ合わないでその辺は自覚しておこうぜ」

静まり返る浴室。どこかで、カポーンと小気味のいい音がした。

源一の言葉に対する賢治と高志の反応は、失笑だった。

「俺、変なこと言ったか？」

「いや、ゲンの言ったことは鬼正しいと思うぜ。だけどそれを口にする必要はなくてね？」

「ゲンはまだまだ青いっちゃねえ。そんなことは自分の心の中で思っているに足りるっちゃ。相手に伝えたって意味ないっちゃ」

脱力して湯船に浸かる賢治と高志。源一はバツが悪そうに首を鳴らした。

「そうだな。せっかく裸の付き合いをしてることだし、俺も少し本当のことを言うよ」

源一と賢治の視線が高志に集まった。

高志は、言った。

「ゲン、俺はおまえのことが嫌いだよ」

源一は苦笑する。

「まあ、好かれる理由もない」

高志は、広い額を両手で覆い、切り口を変えて話し始めた。

「ぶっちゃけるとさ。俺って中学の時は登校拒否してたんだよ。きっかけは……、もう覚えてないや。たぶんたまたま数日学校を休んだのがそのままずるってパターンだったんだと思う。それでひとりで引きこもっているとき、被害妄想がどんどん広がっていくんだよ。周りが登校拒否なんてしている俺を陰で馬鹿にしてるんじゃないかって。そうなるともう悪循環だよな。家からも出られないようになっちゃうんだよ」

高志は、それだけ一気にまくし立てると、手拭いで顔を拭いた。

「それで、新規一転やり直すつもりでここ、風見鶏学園に来たんだけど……、そこにおまえがいたんだよ」

「？　どういう意味だよ」

「このままじゃいけないって思って、それで地元を離れて、親元を離れてここに来たんだぜ。なのに、おまえは俺がやっぱり駄目だっ

てことを思い知らせてくれるんだ」

「そんなつもりはねえよ」

「ああ、わかってる。けど、おまえにそんなつもりがないからこそ俺は思い知らされるんだ。今日の迷路内での火事騒動もそう。鉄橋でもそう。真っ先に逃げる俺に周りを見渡して最後尾につくおまえなんかおまえに、俺は自分のことしか考えてないって言われているみたいなんだよ」

高志はそう言うのと、顔を源一に向けて笑みを作った。「自分のことしか考えていない」。その言葉に源一は苦い顔をした。

「なかなかの被害妄想癖っちゃね」

「おまえは誇大妄想癖があるけどな」

源一はのど元まで白く濁った湯船に浸かると、目を閉じて言った。「高志。おまえ、勘違いしてるよ。俺はおまえにケチつける気なんてこれっぽっちもない」

「わかってるよ。これは俺が勝手にそう感じてるだけ……」

「そうじゃなくてさ。俺は、おまえが先を行ってくれるから後ろを走れるんだよ。事実、鉄橋ではおまえが俺と一緒に後ろを走っていたら間違いないリタイア、いや、死んでたかもしれねえや」

源一は目を開け、笑みを作って高志を見上げた。高志は、呆けた顔をして、その後に笑い出した。

「そうか、そっか」

「ま、迷路は俺さまちゃんのおかげで突破できたんだっちゃけどな！ ほら、賞賛の言葉を、今！ 俺さまにおくるっちゃ！」

「俺たち、鉄橋でおまえを引き上げてやったのにまだお礼言われてないよな」

「……ちっさいことに拘るやつらっちゃねえ」

賢治は頬肉ツラミにお湯をかけて言った。

「いい機会ではあるっちゃね。別に隠すことでもないけど、あえて口にするということでもない。そんな素敵なトラウマが俺にもあるっちゃよ」

賢治は、自分の過去を語った。中学受験に失敗したこと、学校での孤立、家庭での阻害。多少誇張を交えて賢治は、この学校に来ることになった経緯を語った。

「それで、俺は地元から離れることにしたっちゃよ」

「おまえも高志も、そんな理由でここに来たのか」

「こんなところに来る奴らはそれなりに理由があるのかもな」

ふと考える。三崎省吾もそれなりの理由があった。お金持ちのお坊ちゃんであるはずの朝比奈悠樹もこんなところに来るからにはそれなりの理由があったのだろう。そして、源一は苦笑した。源一自身にも地元を離れたかったそれなりの理由があったのだ。

「それで、ゲンはどんなトラウマを抱えてるっちゃか？」

「俺？ 俺のことはいいんだよ」

「人のを聞いておいて自分は言わない気かよ」

「おまえらが勝手に喋ったんだろ」

「こいつ、汚いっちゃねえ」

「せこいな、鬼せこい」

「ああ、わかったよ。言うよ、言う言う！」

源一は、座り直し、賢治と高志に身体を向けた。なにから話せばいいのか……。源一は、考えて話し始めた。

「俺、昔から剣道やってて、これでも小学生の時は団体戦で全国優勝してるんだぜ、ってあくぶね！」

「でぶどーん！」

飛んでくる賢治の腹。源一は、半瞬の差で賢治のボディプレスを避けた。賢治の腹は水面に打ち付けられ盛大な飛沫を上げた。

「っち！ 避けたか。さすがにチビすけよりは素早いっちゃね」

「おまえなあ！ 150キロってのは凶器だってことを少しは自覚しろ！」

「俺たちはおまえの自慢話なんて聞きたくないっちゃ！ みつともないトラウマを聞かせるっちゃ！」

「馬鹿ヤロウ！ 今からする予定だったんだよ……甘い！」

源一は後ろからタツクルしてくる高志を身体をひるがえしてかわした。

「なんで後ろからの攻撃をかわせるんだよ、ウップ！」

「武道経験者を舐めんな！」

源一は高志の頭（髪薄め）を掴み、湯船に沈める。賢治は奇声を上げながら再び肉弾プレスを敢行した。

篠岡賢治著、自叙伝『わが敗走く風見鶏学園編く（自費出版）』に曰く、「わたくしたちが本当の意味で交友を持ったのは、まさにこの晩からだったっちゃ」。

源一たちは、疲れるまで風呂場で乱闘騒ぎを繰り返したのだった。

木下高志（後書き）

この小説は当て字を多用しています。それがうまく○で括られたりうまく当てはまっていなかったりということに、今気づきました。ただでさえ読みにくいのに、さらに読みづらくしてしまって申し訳ありませんでした。ぶっちゃけ直し方とかよくわかってないんで、このまましばらくご迷惑をおかけしますが、今後もしもぞ懲りずにお付き合ってください。

2日目夜

暗い室内、朝比奈悠樹はベッドの上でうつ伏せに倒れていた。8畳の部屋にはロッカーとシングルベッドが4つ形ばかりにあるだけだ。それでも昨日のテントよりはるかにマシだな、と、悠樹は薄い枕に顔を押し付けながら思った。

源一たちが風呂に向かった後、悠樹は外に止っている貨物列車（運転席では猿がバナナを食べていた）から、朝の休息所から運ばれてきた荷物を回収して、ハンモックナンバーで割り当てられたこの部屋に直行して今に至る。

疲労と睡魔に耐えながら、悠樹は源一たちが風呂から出てくるのを待った。このまま寝てしまいたい、汚れた身体のままではそうもいかない。

悠樹はなかなか戻ってこない源一になんだか腹が立ってきた。眠気覚ましに頭の下に敷いた枕を源一に見立ててスパンキングをしていると、外から笑い声が聞こえてきた。

「ま、俺は高志が高校デビューってのは知ってたっちゃけどな」

「俺、そんなに変な態度とってたか？」

「わかりやすく言うと、鬼の使い方が変なんだよ。『鬼』って言葉が流行ってるのかどうかは知らねえが、それでもそういう使い方はしないと思うぞ」

「なんか、覚えたてのファッションみたいでどこかチグハグなんだっちゃ」

「そうか。鬼難しいなあ」

3人は同時に笑った。悠樹は、その笑い声が扉を開いて部屋に入ってくると同時に枕を投げつけた。罪のない枕は、緩い弧を描きながら3人の足元に落ちた。

「なんだ、ユウ。こんなところにいたのか」

源一は枕を拾い上げて悠樹に言った。濡れた髪に火照った肌。風

呂上りの源一を見た悠樹は、一瞬言葉を詰まらせた後、怒鳴った。

「おっそ〜い！　いつまでお風呂に入っているんだ君たちは」

「そうか？」

「別に俺たちを待ってることないっちゃよ。チビすけも一緒にくればよかったっちゃよ」

悠樹はおもいきり口角を下げた。昨日のシャワールームと違い、今日のような大浴場では女の子である悠樹と一緒に入ることはできないのだ。

3人はそれぞれベッドの上に荷物を投げ出して寝転んだ。

「ったく、おまえら風呂で騒ぎすぎ」

「ああ、少しはしゃぎすぎたな。鬼疲れた」

「腹を打ちすぎたっちゃ。着替える時に見たら真っ赤になってたっちゃよ」

「え、なにになに？　お風呂でなにかあったの？」

悠樹は、親亀の甲羅に乗る小亀のようにうつ伏せに寝る源一の背中に乗った。

「……重い」

「な！　失礼なヤツだな君は。ボクはケンジじゃないんだから重いわけではないだろ」

「まあ、賢治と比べれば誰だって鬼軽いよな」

「ほめてもなにもでないっちゃよ」

「何で今のがほめ言葉に聞こえるんだよ」

そう言った後、源一は急に押し黙り、なにか深刻な表情で考え出した。悠樹は横から源一の顔を覗き込んだ。

「ゲン、どうしたの？」

「昨日って何曜日だ？」

「昨日？　今日が火曜日だから昨日は月曜だっちゃよ」

それを聞いた途端源一は愕然とした面持ちで身体を起こした。その勢いで悠樹は源一の上から転げ落ちる。

「な、なんだよう急に」

「しまった。深夜ラジオを聞き逃した！」

「はあ？ 深夜ラジオお？」

ひとり呆然と立ち尽くす源一。目を細めて呆れ顔の悠樹。

「ゲン。ゲンはラジオなんか聞くんだ」

「ラジオを馬鹿にするなっちゃ！」

「ど、怒鳴らなくてもいいだろ！ ていいうかなんでケンジが怒るんだよ！」

「ゲン。ひょっとして深夜の秘密基地か？」

源一は再びうつ伏せに寝転がると高志に拳を突き出した。高志もそれに合わせるように拳を突き出す。そして、賢治も拳を突き出した。ひとり取り残される悠樹。

「？ 君たち、なにやってるの？」

「まさかおまえらもDJ・Tのリスナーだったとはな」

「俺もこの学校で、しかも2人も同士を発見できるとは思わなかったっちゃ」

「ああ。俺、1回目から録音してるぜ。もちろん昨日の放送もちゃんと実家で録音してるよ」

「そのわけわかんない会話はヤメロ」

悠樹はそこが定位置だともいうように再び源一の上に乗る。

「だいたいその、えっと、でいーじえーていー？ なにそれ？」

「おまえは本当になにも知らないチビすけっちゃねえ。DJ・Tは、俺たち真夜のサンダーロードを爆走するボーイズあんどガールズの味方っちゃよ」

「もうなに言っているのかさっぱりわかんない」

「だからDJ・Tの深夜の秘密基地ってのはな……」

源一は色々深夜ラジオの説明をするが、悠樹はまるつきりその話についていけない。賢治や高志が話に乗り、悠樹を取り残して盛り上がり始めた頃、悠樹は後ろから源一の首筋に顔を近づけた。

「……まんない」

源一の耳元でそっと呟く悠樹。柔らかない悠樹の髪が源一の頬と首

筋を撫でる。くすぐったいと思ったのは一瞬、源一の首筋に激痛が走った。

「痛ええ！ ユウ、なにしやがる！」

源一は身体を揺さぶり悠樹を振り落とそうとするが、悠樹はがっしりと源一の背中にしがみついて離れない。

「つまんない！ つまんないつまんないつまんない！ 内輪ネタで盛り上がるのはやめろお！」

源一は悠樹に抱きつかれたまま身体を起こすと首筋を撫でた。源一の首筋には、くつきりと悠樹の歯形が残っていた。

「痛えなあ。ったく、おもいきり噛みやがって」

「キスマークっちゃね。うらやましい」

「男が男にキスマーク付けられるのがうらやましいのか？」

「まあ、ユウ。今度俺が録音したの貸してやるから」

「それじゃあその話はボクが聞いてからにしてよ」

そう言っただけ悠樹は源一の背中に両手両足を絡ませたまま頬を膨らませた。

「ええい、いい加減降りろ！ それよりいい加減風呂行って来い！」

「おまえ、なんか甘酸っぱい臭いがするんだよ」

悠樹はそれを聞くと慌てて源一の背中から離れた。しばらく鼻の穴を広げて自分の袖の臭いなどを嗅いだ後、ちらと高志を見た。高志は苦笑して悠樹に行った。

「俺たちが最後だったから今は風呂に誰もいないよ」

「温泉でけっこういい湯だったっちゃよ」

悠樹は口元をタコのようにすばめてきっかり3秒ほど考え、ロッカーから荷物を取り出した。

「お風呂行ってくる」

それだけ言うだけで悠樹は部屋から出て行った。室内は、悠樹が出て行っただけで温度が下がったように静まり返った。

「ったく、やかましいいうーちゃかだな」

「しかし、ゲンはユウによく懐^{なつ}かれてるっちゃねえ」

「そうかあ？」

源一などに言わせれば、悠樹とどつき漫才をしている賢治も十分に懐かれているように思えるのだが。

「朝比奈の人間と懇意になるってのは鬼凄いことだぞ」

「ああ、なんかすげえ金持ちらしいなあ」

源一は寝返りを打ち、仰向けになって天井を見上げた。

「ゲンはお金は嫌いっちゃか？」

「ん？ 別に嫌いじゃねえよ。人並みに好きだぞ」

「それにしてもユウのことをあまり金持ちと見てないみたいだけど」

「いちいちそんなこと考えながら人付き合いができるかよ。それに、俺は剣道をやったからな」

「まさか剣道をやったら悟りを開いてお金がいらなくなるなんて言うんじゃないっちゃんうね？」

「違うよ。ただ、いくら金を持っていたとしても剣道日本一にはなれないってこと」

源一は昔を思い出した。剣道に、剣道のみに進んできた日々。

小学生で全国優勝したときは、勉強も交友も、その他の全てを犠牲にして果たせたのだ。その延長としての中学の3年間。

源一は表情を隠すように枕に顔を埋めた。

「それより俺、あることに気付いたっちゃ」

急に話を変える賢治に、源一と高志は視線を向けた。

「今からすごいこと言うっちゃよ」

「もったいぶらずにさっさと言え」

「……ユウって、実は女なんじゃないっちゃんか？」

したり顔の賢治、高志は目を見開き、源一は大きなため息を吐いた。

「なんで男子校に女がいるんだよ。まあ、あいつは女顔だけだな。気にしてるみたいだから言うなよ」

「俺もデブを気にしてるっちゃよ」

「痩せろクソ豚」

「ゲンって言うことが直接的すぎて鬼きついよな。でもうちの学校は一応共学だぞ」

「そうなのか？ それにしては女がないけど」

「確か一昨年くらいから共学になったっちゃよ。ただ単純に女が入学してこないだけだったちゃ。この学校の入学案内で制服の女の子が表紙なのを覚えてないっちゃか？」

「そういえばそうだったな。でもそれって詐欺じゃねえのか？」

源一は、身体を起こし、頭を掻いた。賢治と高志もそれに合わせるように身を起こす。

「それで、ユウが女かもしれないって？」

「あいつ、なんかいい匂いがるっちゃよ」

「金持ちって話だから高級な石鹸でも使ってるんだろ」

「ま、まあまあ。あいつは男だから。あんまり気にするなよ」

悠樹が女だと知っている高志は、この不穏な空気を慌てて払拭しようとした。

「高志はユウが男だって知っているっちゃか？」

「ああ。俺が引きこもっているときの趣味はインターネットでさ。

俺と同年代にどんなやつがいるか調べるのが好きだったんだ。三崎省吾もユウも、そのときに知ったんだけど、あいつは昔から男だったよ」

高志の言ったことに嘘はなかった。悠樹は、昔から男として振舞ってきたのだ。

源一は興味が削がれたように仰向けにベッドに寝転び、わずかに顔をしかめた。右腕に痛みが走ったのだ。

「とにかく、ゲン。おまえが今から風呂に行ってユウが男かどうか確認してくるっちゃ」

「なんで俺なんだよ。自分で行け」

「俺が行って、もし本当に女だったらシャレにならんっちゃ」

「その自覚はあるんだな」

源一は痛めた右腕を押さえた。心なしか、熱を帯びているようだ

った。

「まあ、行くか。さっきはおまえらのせいで馬鹿騒ぎしてゆっくり温泉に浸かれなかったからな」

源一は、勢いよくベッドから立ち上がった。高志は慌てた。

「お、おい。やめておけよ。あいつは男だって」

「だから確かめてくるっちゃよ。このままじゃ気になって眠れないっちゃ」

「さっさと寝ろ。明日もう1日あるんだぞ」

源一は、それだけ言うのと制止する高志を無視して部屋から出て行った。

お風呂再び 2日目終了

「シャワーを浴びているときのみ女性に戻る」

雑誌に載っていたあるイスラエル女性兵のコメントを、朝比奈悠樹は肩まで湯に浸かりながら思い出していた。

悠樹は、今までも男として生きてきたつもりではあるが、中学までの女学校での生活と高坂源一郎たちとの強歩大会では、確かにその内容はまるで違っていた。振る舞い以上に身体能力でもその差を悠樹は感じていた。

二の腕を押してみる。柔らかい腕、日中に触れた源一の筋肉質の腕とはまるで違っていた。源一にしてもフィジカル面ではそれほど恵まれているとは言えないだろうに、悠樹とは違う、男の身体をしていた。

悠樹は自身の身体を見た。矮躯^{わいく}だ、と思った。白い肌、細い手足。全体的に小さい作りだ。

わずかに膨らんでいる胸に手を当てる。自分が女だということを嫌でも思い知らされた。

いつもは後ろで纏^{まと}められている栗色の柔らかい髪は、肩口で湯船に広がっている。

今、悠樹は、どこから見ても女の子だった。

悠樹は一度湯船にもぐると思い切り手足を伸ばした。疲れが湯に溶けるように消えていく。

「いい湯だなあ」

「ん、そだねえ。いい湯だねえ」

悠樹は声の主にのんきに答え、数瞬の後、我に帰った。

「んな？ なななな、なななあ！」

「うるせえなあ。なに鳴いてんだよ」

「なんでゲンがいるんだよお！」

悠樹は肩のぶつかる距離で湯に浸かっている源一から慌てて離れ、タオルで胸を隠した。

「別に俺が風呂に入ったっていいだろうが」

「だってゲンはさっきはいったらお！」

「せっかくだからもう一回入っておこうと思って。ほら、いいからさっさと湯船に浸かれ」

ユウは頭の上にもやもやを浮かべつつ湯船に浸かって身体を隠した。

「こっちに来るなよ！ ぜったい来るなよ！」

「行かねえよ。小さいからコンプレックスあるんだろ？」

「ゲンだって小さいじゃないか！」

「！ うるさい！ 男の価値は大きいか小さいかじゃ決まらないんだよ！」

「？ 背のこと、だよな？」

源一はそれを聞くと、バツが悪そうに鼻先まで湯船に沈んだ。

「？？ よくわからないけど、ゲンはコンプレックスの塊だねえ」

悠樹は源一に背を向けて言った。

「おまえだってそうだろう。背が低いとか女っぽいとか」

「ゲンって目え、悪いんじゃないの！」

「当たり前だろ。俺が普段メガネしているのを知っているだろ」

源一はタオルで顔を拭いた。風呂の中、源一はメガネを脱衣所に置いていた。

悠樹は源一から顔を背けた。この距離、このシチュエーションですら源一は悠樹を女だと気付かない。それに多少引っかけりを感じるどころが、真的な意味で性同一性障害ではない朝比奈悠樹の複雑なところ（コンプレックス）だった。

悠樹は頭の上のやもやを振り払うと、深く考えるのを止めてゆっくりと手足を伸ばした。

横目で源一を見る。源一はしきりに右腕を揉んでいた。

「ゲン、右手、どうしたの？」

「別になんでもねえよ」

源一は悠樹に背を向けると右腕のマッサージを続けた。悠樹は身体にタオルを巻きつけると源一の背中に寄った。

「ひよつとして、腕、痛めてるの？ 夕方の鉄橋？」

源一は答えない。悠樹はそれを了承と取った。源一は、悠樹を片手で支えたときに腕を痛めたのだった。

「もう、早く言ってよ。ボクのせいで痛めたんだろ、それ？」

「自惚うぬぼれんな。これは単に俺の鍛え方が足りなかったただけだよ。おまえみたいなのーちゃか一匹片手で持てないようじゃ俺もヤキが回ったよなあ」

「んふふ。ボクは君のことがわかってきたよ♪」

悠樹は源一の右腕を取った。悠樹より、2回りは太い腕だった。

「俺のなにがわかるってんだよ」

「クチの悪い偽悪主義」

「……単純におまえら相手に気を使う必要を感じないだけだ」

「そっか。それはそれでいいことだけだね」

悠樹は源一の右腕のマッサージを始めた。

朝比奈という名門の家柄、パーティーの席などで悠樹は初対面の相手と会うことが多かった。そこで必要とされるのは、形式的な礼儀作法だった。あるいは中学までの女学校時代でもそれは有効で、悠樹は儀礼的な、気を使う（……）世界で生きてきた。

対して今の源一たちとの関係。とりあえずで噛み付き、味付けとばかりに傷口に塩を塗りたくるような関係は悠樹には新鮮であり、楽しく、そして嬉しかった。

「ねえ、ゲン。なんでゲンはこの高校に入学したの？」

「一番の理由は公立並みに学費が安い全寮制だから、だな。もっとも、入学前にこんなことやらされるって知っていたら考えたけど」

悠樹は源一を見つめた。源一は、目を閉じて湯船に浸かっている。

「ゲンは全寮制の学校に入りたかったんだ」

「ああ」

「地元の学校に行きたくなかったの？」

「さつきから質問ばっかだな。おまえこそなんでこんなところに来たんだよ。いいとこのお坊っちゃんなんだからもつといい学校に居たんじゃないのか？」

悠樹は源一の右腕を離すと一度湯船に潜った。

悠樹は、もっと源一のことを知りたいと思った。それと同時に、自分のことも知ってもらいたいと思った。ゲンに、高坂源一郎になら自分のことを話してもいいかな、と、そう思った。

悠樹は勢いよく水面から顔を出すと、自分の背中を源一の背中につけた。源一の背中とは、とても大きかった。

そして、悠樹は、あえてストレートな言葉を選んで告白した。

「オヤジを殴っちゃった」

背中越しに源一の苦笑を感じる。

「おまえ、それは人としてやっちゃいけないことだろう」

「うっさいなあ。やっちゃったものはしかたないだろう？」

悠樹は、抗議するように源一に寄りかかる。

「それまでは、本当にゲンの言うとおりに、お金持ちのお坊っちゃんらしく親の決めたレールの上を走ってきたんだ」

男を強要されてきた悠樹は、『お坊っちゃん』の部分強調した。

「それで、オヤジを殴ったのをきっかけに、親元を離れてみようと思っ。て。中学校までも全寮制だったんだけどね。でも、そこは親に入れさせられたところだったから」

「それで、ここか？」

「ん、まあね」

悠樹は両手で湯をすくった。白く濁った温泉、それを肩にかける。「……なんでオヤジさんを殴ったんだ？」

悠樹は大きく息を吸った。心音が高鳴る。父親に女に戻れと言われたこと、それを源一に伝えて、源一はどう思うだろうか？ 源一は自分が女だと知って、どう思うだろうか？

「あ、あのね、ゲン。その、ボクは……わぷ！」

悠樹は湯船に沈んだ。寄りかかっていた源一が動いて支えを失ったのだ。

「なんで急に動くんだったよう！」

「いや、おまえ、大丈夫か？　なんか動悸が急に早くなったけど」
源一は目を細めて悠樹の顔を覗き込んできた。顔が赤くなっているのがわかる。

お互いの顔が近づく。小刻みな息が源一の顔にかかった。

そのときだった。

「ぐっつどいぶにんぐカスども！　おまえらのリーダーがやってきたっちゃよ」

「誰がリーダーだ」

揺れる腹の篠岡賢治と、対照的にわき腹に肋骨が浮き出ている痩せた木下高志だった。

悠樹は、2人の姿を認めると、慌てて源一から離れた。

「ボ、ボク、上がる！」

「ああ。なんかのぼせてるみたいだからそうしろ。顔が異常に赤いぞ」

悠樹は、身体も洗わずに湯船に入る賢治の横を通り過ぎ、脱衣場に消えていった。源一は湯煙に霞む視界でその様子を眺めた。

「ふいっ。温泉が股ズレにしてみるっちゃ」

「なんだ、おまえらも来たのか？」

「ああ。なうんか気になってな」

そう言って高志は身体に湯をかけて温泉に入った。

「それで、どうだった？　ユウは男だったか？」

「ああ。男だったよ」

それを聞いていた高志が少し目を大きくする。

「おま、見たのか？　ブランブランが付いていたのか？」

「いや、それはさすがに見なかったけど。この湯煙にメガネがなく

「ちなあ」

「それじゃあなんで男だってわかったっちゃか？」

「俺の目が悪いっていったって輪郭くらいはわかるよ。女ってのは胸があるもんだろう？ あいつの胸はヘンペイだったから」

悠樹を女だと知っている高志は複雑な笑みを浮かべ、知らない賢治は納得したように頷いた。

「そうか、あいつはただ女っばいだけだったかあ。ふん！ それならあんなうーちゃんに用はないっちゃ、げぼら！」

甲高い音が浴室に響いた。脱衣場から着替えた悠樹が賢治に風呂桶をサッカーボールのように蹴りつけたのだ。

「うっさいぶよぶよ！ 君たちも早くあがれよ。明日があるんだからね！」

「おお、脂肪って水に浮くんだな」

水死体のように湯船に浮かぶ賢治。源一は感心したようにそれを眺めている。その源一に視線を向ける悠樹。ふと気付くと、高志は苦笑を浮かべて悠樹を見ていた。悠樹は、その視線に気付いて勢いよく脱衣場の扉を閉めた。

高坂源一郎2

薄暗い体育館裏、蒸し暑い夏、逢魔が刻。

「おまえら、なにやってんだ？」

自分でも驚くほど冷静な声だった。その声と同じように高坂源一郎の心は冷え切っていた。源一の声にゆっくりと振り返ったのは、抱き合っている館野修と河井静香だった。

状況は、一瞬で理解できた。親友であるはずの修と彼女であるはずの静香の抱擁は、恋人同士のそれだった。

「よ、よう源一。今日は剣友会の道場には行かなかったのか？」

「明日は県大会だからな。練習は早めに上がって静香と過ごそうと思っただよ」

それを聞くと、静香はめそめそと泣き出した。それを慰めるように修は静香の肩を抱いた。

源一は頭に血が上がり、2人のほうに駆け寄ろうとした。その源一の背中に抱きつく影があった。紫藤朋絵だ。

「源一、落ち着いて！」

朋絵を引きずるように2人に近づく。静香は、源一に怯えるように修の影に隠れた。源一は足を止め、修を見上げた。

「修、おまえは俺と静香が付き合ってるのは知ってるはずだよな」

「ああ。大会が終わったらちゃんと話そうと思ってただよ」

源一は修の胸倉を掴み、強引に引き寄せた。修はバランスを崩し、源一の足元に転がった。

「俺にとってもおまえにとっても、今がどれだけ重要なときかはわかってるはずだろうが！　それが色ボケかよ！　それも俺の彼女とか？」

「……おまえと一緒にするなよ」

修は薄ら笑いを浮かべて源一の手を払った。

「全国優勝なんて言ってるのはおまえだけだぜ。みんな言ってるよ。」

ひとりで勝手に熱血してるってな」

源一は修の胸倉を掴み、無理やり立たせた。修は抵抗しない。暴力では源一に敵わないことを知っているのだ。

「剣道なんかやっててもなんにもならないんだよ。柔道と違ってオリンピック種目でもないし、将来なんの役にも立たない。そんなものをなんでおまえに強制されてやらなくちゃならないんだよ！」

独創性のない陳腐な批判。源一は、修を突き放した。修は数歩よろめいて立ち止まった。

「話を変えるなよ。今はおまえが俺の目を盗んで静香に手を出したことだろ？」

「だから、おまえは自分のことしか考えてないってことだよ」

修は襟元を正し、源一を見下した。日は陰り、闇は一層濃くなり始めている。

「おまえ、静香が悩んでいたことに気付きもしなかっただろ？ 静香はおまえに相手にされてないって深刻に悩んでいたんだよ」

「それは……」

全国優勝するため、そう続けようとして源一は口をつぐんだ。

「おまえは静香のことをちゃんと見てたのか？ 静香の好きな花は？ 好きな食べ物？ おまえは、静香に喜ばれるために少しでも努力したのかよ？」

修は、自分の優位性を誇示するように一步源一に近づいた。

「俺は違うぞ。源一、おまえと違って剣道以外でも後輩の面倒を見るし、静香の相談にも乗る。ちゃんと静香のことを、見てやれる」

源一は言い返さない。否、言い返せない。

「剣道、剣道。おまえは剣道以外のことに少しでも気を使ってるのか？ 少しでも静香のことを考えていたのかよ」

源一は、修から視線を外し、静香を見た。静香は、源一の視線に気付くと泣きながら走り逃げていった。

修は即座に静香の後を追う。

源一は、追えなかった。

しばし無言の時間が流れる。

「源一……」

背後から、朋絵の声が聞こえた。源一は今、自分がどんな顔をしているのかわからなかった。

「朋絵は知ってたのか？ 修が静香と付き合っていたこと」

「あ、うん」

「いつからだ？」

朋絵は、いつもより小さく見える源一の背中を見ながら答えた。

「先月、共同稽古で他校に遠征したでしょ。そのとき駅前で解散した後、だって」

「1ヶ月もみんな黙っていたのか」

源一はメガネを外して天を仰いだ。月が出ている。多重にぼやけた月は、無言で源一を照らしていた。

源一は歩き出した。後に続くとする朋絵。源一は、無言で朋絵を止めてひとり家路についた。

翌日、源一は県大会に出場しなかった。

小学校低学年で剣道を始めて以来、竹刀を握らなかった日は初めてだった。

カーテンを閉め切った薄暗い室内で膝を抱えてただ呆然と一点を見つめる。幸いにして学校は夏休み。誰に迷惑かけるでもなく家から一步もでない生活が続ける。

最初は足繁く訪問してきた朋絵も次第に顔を見せなくなった。

源一は、独りになった。

締め切った蒸し暑い部屋の中で、源一は深い森のような思考の中を歩み続けた。だが、森は源一に道を示さず、進めば進むほど源一の思考の所在を不確かにしていった。なにを憤^{こみゆ}っているのか、なに

を恨んでいるのか、そもそも自分がなにを考えているかすらわからなくなっていく。悪いのは、静香か修か、見て見ぬふりを通した周りの連中か、まったく気付かなかった自分自身か。それともそれ以外のなにかなのか、考えれば考えるほどわからなくなっていく。

それに気付いたのは、夏休みも終わりに近づいた頃だった。鍛え上げられた源一の身体はこの1ヶ月の病人のような生活ですっかり鈍り、源一自身も動作に重みを感じ始めた頃のことだ。

いつもの、ということすら妥当ではない呆けた生活を源一は続けていた。室内は闇、カーテンの隙間から差し込んでくる月光のみが光源だった。

メガネもかけない霞んだ視界の中、どこかで微かな笑い声が聞こえてきた。源一の心境とは正反対の明るい声。源一はいぶかしんでその声の元を探した。

それは、ラジオだった。源一自身がセットした覚えもないラジオが垂れ流されていたのだ。なにかの手違いでスイッチを入れてしまったのだろう、そう思い源一はラジオを切ろうとした、が、その手を止めた。

高坂源一郎は後に朝比奈悠樹にこう述懐することになる。

「まあ、客観的にあの頃のことを振り返ってみるとだな、単純に俺はその怠惰な生活に飽きていたんだな。DJ・Tはそのことに気付かせてくれて、その生活を抜け出すきっかけをくれたんだよ。え、だからDJ・Tを尊敬してるって？ いや、尊敬はしてないな。ラジオは面白いけど」

源一はそのラジオ、『DJ・Tの深夜の秘密基地』を聞き、久しぶりに声を出して笑った。

その笑いに払拭されたように源一の思考は深く暗い森を抜け、広く視界の開けた原野に到達していた。

失恋のショックが癒えたわけでも思考の整理がついたわけでもない。だが、源一はとりあえずその開けた原野に向かって歩き出すこ

とにしたのだった。

高坂源一郎2（後書き）

作者の周りでなぜか人気のある脇役、朋絵は爆乳という隠れ設定があります。

3日目 1

その日は朝から沈んでいた。天気ではない。天気は昨日に引き続き無駄にやる気を出した太陽が無駄に陽光を降り注いでいた。もし曇っていたとしたらそれはそれで無邪気な太陽は批判の対象になったかもしれない。沈んでいたのは、強歩大会の生存参加者^{プレイヤー}25人の心境だった。

強制参加の強歩大会も最終日の3日目を迎えている。2日間ない環境で歩き続けた新入生たちは多かれ少なかれ疲労を顔に浮かべていた。中でもその肥大した顔に頬肉をたるませてシリアルをゆっくり口に運ぶ篠岡賢治は顕著だった。

「ケンジ、どうしたの？ ブサイク顔がいつも以上にブサイクだよ？」

賢治は質問してくる朝比奈悠樹に顔も向けずに答えた。

「さすがにきついっちゃ。股ズレもひどくなってきたし筋肉痛で身体中が痛いっちゃ」

「筋肉痛って貧弱すぎるだろうが。たかだか2日歩き回ったくらいで」

高坂源一郎の批判を木下高志がやんわりと弁護する。

「まあそう言うなよ。俺もさすがに身体の不ふしが痛いよ」

「ふん、ゲンは筋肉デブっちゃね」

「おまえは脂肪デブだけだな」

源一はそう言ってトーストに目玉焼きを乗せてかぶりついた。源一自身も、筋肉痛はないものの軽い倦怠感が身体に残っていた。ふと見ると、悠樹が右斜め下10センチの距離から源一の顔を見上げていた。源一は手のひらで悠樹の柔らかい頬っぱたを押しつけて離れた。

「……なにするんだよお」

「近いんだよ。おまえこそ人の顔をガン見しやがってなんだよ」

悠樹は内緒話をするように再び源一の顔に自分の顔を近づける。

悠樹のおっきな瞳^{おめめ}が源一に迫る。

「右手ダイジョーブ？」

「小声で話すことかよ」

源一は軽く右腕を振る。鈍い痛みが走った。源一にとっては懐かしい痛みだった。中学で全国を目指していたときは、怪我など日常茶飯事だった。多少の怪我なら誤魔化して練習を続ける努力論的な日々。源一は、昔を思い出して苦笑した。

「まあ、大丈夫だな。おまえに心配されるようなもんでもねえよ」
「そっか。よかった〜♪」

悠樹は顔面アップのまま、ほんわか笑顔を作った。源一はトーストをくわえたまま悠樹の顔を再び押しのけた。

3日目の朝はこんな感じで始まった。

3日目 1 (後書き)

今回は短くてすいません。いや、予定ではこれくらいずつちびちび投稿する予定だったんですよ？

3日目 2

燦燦と輝く太陽、海から時折吹きつける涼風は源一たち4人の頬を撫でつける。水平線はるか遠くに見え、急斜面の崖道を登る源一たちに頂上が近くにあること、つまりはゴールが近づいていることを自覚させた。

「うーん。ずいぶん高いところまで来たねえ。あ、ゲン。昨日の迷路の焼け跡があそこにあるよ」

「ああ、本当だ。俺たちってこの島を何週したんだろうな？」

きゃっきゃとはしゃぐ悠樹に飄々（ひょうひょう）と悠樹に答える源一。高志は後ろで荒い息を吐いて歩いている賢治を一瞥すると、源一と悠樹に言った。

「おまえらこの上り坂きつくないの？」

源一と悠樹は顔を見合わせた。

「まあ、やっと山道らしい勾配になってきたな。昨日まではアップダウンの多い緩やかな坂ばかりだったのにな」

源一は前を見つめた。延々と続く上り坂。それは、疲れが溜まっている学生たちにとっては視覚的にもきついものだろう。だが、源一に言わせればきついだけ（・・・・）だ。歯を食いしばって耐えればいいだけのことで、例えば昨日の迷路や鉄橋のように命がけのような類のものではなかった。

「ゲン、どうしたの？」

「いや、なんでもねえよ。ただ、前の連中が見えないなと思ってさ」

朝、源一たちはハンモックナンバーに従い最後に休息所を後にした。前を進んでいる連中は21人。先まで見渡せる長い上り坂で、その姿は影も見えなかった。

理由はわかってる。それを悠樹はためらうこともなく端整な顔を歪めて言った。

「だってぼくボクたち後ろのびしょびしょのせいでゆっくり歩いて

るんだもん」

後ろのびしょびしょ、篠岡賢治は死んだ魚のような目をして数メートル先を進む3人を見上げた。バケツで水をかぶったように濡れている理由は、汗だ。汗だくになりながら賢治は股ズレと筋肉痛の激しい足を引きずって坂道を登っていた。

「……俺はもう駄目だ。俺のことは捨て置いておまえらは先に行くっちゃ」

「うんそうだね。ゲン、そろそろペース上げようよ。あのお肉ぶくぶくマシンの足に合わせてたら日が暮れちゃうよ」

「待て、待て待て。こういうときは諦めるなどと言って励ますのが友情ってもんじゃないっちゃか？」

「なにいつてんの、この蓄積脂肪は？ 君なんかと友達になった覚えなんてゼンツゼンないよくだ。君なんかいいところペットだね。あつははは！ やっぱり駄目だ。だって君、ブサイクだから。豚さんのほうがかわいいもんね！」

「むきく！ ちびっ子がく！」

賢治は坂道を駆け上り悠樹に向かっていった。悠樹は源一の影から賢治を罵る。追いかけてくができるうちはまだ大丈夫か、と、源一は悠樹と賢治の漫才を見ながら思った。

「ユウの高笑いつて鬼むかつくな」

「ああ。俺も初日にやられた。顔が整ってる分、むかつき度が半端ないんだよ」

「あいつ、金持ちのくせに口が鬼汚いよな。育ちがいいはずなのに」

「おい、ユウ！ あんまり賢治を疲れさせるなよ。ぶっ倒れたら引きずっていかねけりやならないだろ」

悠樹は、ぴたりと源一の正面30センチの位置で止ると源一の顔をほぼ垂直に見上げた。

「だーいじょぶだって。そしたら道のはじっこに置いてけばいいんだから。どっちかって言うと、今この場で捨てていきたいくらいだけだね」

源一は賢治を見た。汗だかよだれだか区別のつかない液体をたらんだ顎から滴らせて口惜しそうに悠樹を睨んでいた。

「うう、正直この上り坂はきついっちゃ。筋肉痛のふとももがニユーヨーカーたちの間で大変なことになってるっちゃ」

「鬼意味わからないぞ、それ」

「ただの上り坂ぐらい我慢しろ」

「ゲン。別にケンジの肩を持つわけでもないけど、この坂けっこ
うきついよ」

「きついでけだろ。文句を言わずに足を動かせ」

悠樹はそう言われると頬を膨らませて源一から視線を外した。源一は、膨らんだ悠樹の頬を人差し指で押した。ぽひゅっと、間の抜けた音が悠樹の口から漏れた。

「そういえば面白いこと聞いたぜ」

高志の言に3人の視線が集まる。

「なんか、危険な目に遭っているのって俺たちだけみたいだぜ」

「？ そんなことはないだろ。現に初日にしたって罨にかかってり
タイヤした奴らが大量にいたんだしな」

「それはただのトラップだろ？ 迷路の中で火事にあったり列車に
轢かれそうになったりはしてないってこと」

「タカシ、どこでそんなこと聞いたの？」

「昨日の夕飯のあと、残っている新入生と少し話したんだよ」

「引きこもりだったくせに無駄に社交性の高い奴だ」

「高志は手帳にびっしり予定を書き込めば人生は充実していると勘
違いしているタイプっちゃね」

「……おまえら、続きは聞きたくないのか？」

3人は足を止めて高志に向き直った。高志は軽く咳払いして話を
続けた。

「まあ、前を行った連中が危険な目に遭ってないっていうのは、
それほど不思議なことでもないんだけどな」

「うん、迷路だって2度3度と燃やせないだろうしね」

「鉄橋の列車も荷物運びが目的だったっちゃね。そう何往復もするもんじゃないっちゃ」

「それじゃあ、俺たちが危ない目に遭ったのは、だだの不運ってことか？」

高志は、3人の食いつきに満足そうに頷くと、言った。

「それが、理由があるらしいんだよ」

「俺たちのハンモックナンバーが低いってこと以外でか？」

「ああ。それが、な、実は……」

3日目 2 (後書き)

引きって難しいっすね！

3日目 3

「ああ。それが、な、実は……」

高志はもったいつけながら言った。

「俺たちが、校長の悪口を言ったかららしいんだよ」

「そんなこと……」

ない、と言いかけて悠樹は口をつぐんだ。校長、漆原和子の悪口は一昨日知り合ったばかりの4人にとって数少ない共通の盛り上がる話題なのだ。

「まさかあり得ない、と言えないところが問題だな」

「和子ならやりかねないっちゃね」

顔を見合わせる4人。悠樹は唇に小指を当て、少し考えた後に輪から抜けて崖下を眺めた。

「ユウ、どうした？」

ユウは顔だけで振り返り、源一に小悪魔チックな笑みを見せ、そして、空に向かって叫んだ。

「こーちよーの、しわしわばあー!」

青い空に消える罵声。高志と賢治は目を見合わせると、悠樹の隣に並んだ。

「かずこのぶーっす!」

「性格ゾンビ女、性根が腐ってるっちゃよ!」

高志と賢治はストレスを発散するように大声で叫ぶ。悠樹は、源一の手を引いた。

「さ、次はゲンの番だよ」

「おまえらなあ。なんでわざわざ校長に喧嘩売ってんだよ」

「いいから。ほら、はやく♪」

悠樹は後ろから源一を押した。源一は、仕方がないと言った感じで後頭部を掻き、一歩前に出て息を吸い込んだ。

「校長のばーか! しゃくれてんじゃねえよくそばばあ!」

無呼吸で繰り出される1ダースに及ぶ罵詈雑言。太陽ほど狭量ではない蒼天は無言で源一の魂の叫びをを聞き流してくれていた。

「うわあ。ゲン、ストレス溜まってたんだねえ」

「こいつも色々溜め込んでんだなあ」

「ところでゲン、和子はしゃくれてるっちゃか？」

ゲンは膝に手を付き、荒い息を吐きながら答えた。

「いや、知らん。だが俺の中の和子像は悪い魔女だから」

「あ、わかる♪ ヘンゼルとグレーテルに出てくるようなヤツだよね」

大声を出してストレスを発散した4人は、談笑した。

そして、それが転がってきたのは遠い坂の頂上からだった。遠く小さい玉が最初はゆっくり、次第に速度を上げながら源一たちに近づいてくる。源一たちの談笑はぴたりと止った。

「ゲン、あれ、なに？」

「玉だな。なんか体育祭のときに使う大玉送りみたいなやつかな？」

「いや、俺はどっちゃかっていうとピンボールの玉に見えるけど」

「俺はピタゴラスイッチっちゃね」

玉は源一たちに近づいてくる。遠近法的に段々と大きくなる玉は、その威容さを嫌が応も源一たちに知らしめた。

「お、おい、あれ、鬼やばくねえか？」

すでに玉はその大きさを遺憾なく示している。その大きさは直径で5メートルを超え、細い崖道を覆っていた。

「おいおいおい、なんかこっちゃ来るぞ。鬼やばくないか？」

「は、ほら昨日のテッキョーみたいに端っこでぶら下がってやり過ぎせばいいんだよ」

「無理だっちゃ」

「なんでだよ！」

「昨日と違って筋肉痛の今日は俺、身体が支えられないっちゃ。落ちるっちゃ」

「デブ類デブ科デブ目デブ男！ 独りでおっこっちゃえ！」

「ほ、ほら、ゲン。おまえの筋肉パワーで受けとめられないか？」

「無理だっちゃ」

「だからなんでだよ！」

「あの玉の中に1立方センチメートル1グラムの綿が入っているとすると直径5メートルの球体の重さは……」

「うっさい唇ケチャップ！ そんなのはでっかくっておもいていえбайーんだよ！」

「と、とりあえず逃げようぜ」

「うわーんもう遅いよー。ゲーン」

玉はもう真近まで迫っている。

「は、端でしゃがめ！」

源一の号令に4人は一斉にしゃがみ込んだ。玉は猛スピードで真横を過ぎ去っていく。坂下を転がっていき、小さくなっていく玉を4人は絶句して見送った。

「……あれ、轢かれたら普通に死ぬんじゃない？」

「か、かかかか、かアずう子」

坂の上を見れば第2弾、第3弾が転がってきている。

「と、とにかく早く上るっちゃ。急ぐっちゃ！」

「豚足！ てめえの足が遅いんだろうが！」

4人は必死に玉をかわしながら坂を登った。和子の悪口を言い続けながら……。

3日目 3 (後書き)

駄作にお付き合いありがとうございます。4月は終盤に入りました。正月休み中に完結すると思いますので、もうしばらくお付き合いください。

3日目 4

「○えないジユウがほしくて〜！」

「「アーア〜！」」

「み●ないジユウをうちまくるう！」

「「あーあ〜！」」

湿気の多い原生林の中、4人は1列に並び獣道を歩いていた。大合唱が森の中に響く。

「……ねえ、ゲン」

「おまえの言いたいことはわかる。だからもっと歌うんだ。元気よくな！」

「ねえゲン〜！」

「わかったって言っているだろ！ だからそれ以上言うな」

「ここどこだよお！」

「そんなことは後ろのデブに言ええ！」

ことの発端は篠岡賢治の愚痴ぐちだった。

「もう歩きたくないっちゃ〜」

休憩所で弁当を食べ終えた賢治は、さめざめとそう呟いた。

「もう少しだから我慢しろよ」

「うん。地図を見るとあと10キロくらいかな。4時間も歩けばゴールできるよ」

「4時間！ まだそんなにあるのか」

絶望の声を上げる木下高志を高坂源一郎が諭す。

「今まで、2日半ほとんど歩きっぱなしだったことを考えれば4時間なんてあっという間だろ」

「いや〜、今までの経験から言って、楽なコースじゃないだろ」

「うん。校長はどんな嫌がらせをしてくるやら」

4人は同時に重いため息を吐いた。

と、地図を見ていた賢治は突然叫びだした。

「おい、部下ども（マシーンス）！ 円陣組め」

勢いに押された3人は賢治の言うとおり、肩を組み合わせる。

「俺、いいこと思いついたっちゃ」

「能書きはいいからさっさと見え」

「まずは地図を見るっちゃ」

4人は円陣の中心に置かれた地図を見た。

「これがどうかしたか？」

「ほらこの箇所。緩く弧を描いてるっちゃ。ここをショートカットすれば3キロは短縮できるっちゃわあ！」

「ちゃっちゃっちゃっちゃうるせえなあ。初日で正規ルートを外れた連中がどうなったか忘れたのか？」

「ああ。ショートカットコースに罠があったら倍以上の時間と労力がかかるぞ」

「ふん！ これだから素人は。いいか？ 今おまえらが考えたことは他の全員が考えるっちゃ。だから学校側はあえて罠をしかけないっちゃ！」

「ゆるい心理戦だなあ」

源一がふと横を見ると悠樹がなにか言いたそうな顔をしていた。

「？ どうした、ユウ？」

「うん……。初日の罠ってけっこうすごかったよね」

「ああ。あれで半数以上が脱落したらしいからな」

「あれって、けっこうお金と手間ひまかかっていたって思うんだ。

あれだけのトラップを島全体に張り巡らせるのは、物理的にも大変だと思うんだけど……」

「？ どういうことだよ」

「うん。だからケンジの言うように、初日でボク達に正規ルートを外れたらどうなるってことを教え込んでおけば、2日目以降の罠は設置する必要がなくなるかなって」

「ほら、俺の言ったとおりっちゃ！」

源一と高志は考えた。距離と時間が稼げるのは確かに魅力だが、リスクも高い。

「……高志、どう思う？」

「危ないなあ。鬼危ないだろ、それ。だけど、このまま正規ルートを進んでも前に行った連中に追いつけないのも確かだな」

高志のその一言で、源一たちの行動方針は決まった。

そして、結論から言うのなら、源一たちの考えは「鬼甘」だった。

「呼んだ？」

「呼んだよ愚豚！　ここどこなんだよお！」

「グトンってなんだ？」

「……愚かな、豚？」

「愚かな豚って誰のことっちゃあ！」

「キミに決まってるだろ！　ローレル指数高いんだよ！」

「そうだローレル！　なんだってこんなところで遭難しなきゃならないんだ！」

「チビメガネだって反対しなかったっちゃろ！」

「俺よりユウのほうが背は低い！」

「な！　ゲンなんてチビでデブじゃないか！」

「俺はデブじゃない！　体脂肪率は10パーセントちょっとだ！」

「俺だって30パーセントちょっと（過少申告）だっちゅわ！」

「それ、誰が見ても鬼デブだから」

「うるさいコッパゲ！」

「なんだとお！」

正規ルートを外れた頃は、まだよかった。予想に反して仕掛けられている罠を突破し、ショートカットをまい進する。最初は意気揚々、道の険しさと比例して段々と不安は増していき、そして、4人はほぼ同時に足を止めた。

「……ここ、どこだ？」

まだ罾が仕掛けられていればそこが学校の手が入った場所だとわかるのだが、最後の罾を突破して早数時間。予定のゴール時間はとくに過ぎている。歌を歌っているのには大きく2つの意味があった。ひとつは現実逃避。そして、もうひとつはSOS（助けてくれ）という合図だった。

日は次第に傾き始め、タイムリミットは近づいてきている。

「待て、落ち着け。ここは仲違いしている場合じゃないっちゃ」

「鬼むかつくがその通りだ。とりあえず現状を確認しよう」

高志は地図を広げ、それを囲んで3人が集まった。

「ゲン！ ここはどこだっちゃ！」

「それがわからねえんだろうが！」

「わかる範囲で答えるっちゃ！」

源一は、少し考えて答えた。

「地獄極楽島。地図で言うところの辺かな」

源一は地図の一点を指差す。そこに賢治は石を置く。

「高志！ 俺たちの目標はなんだっちゃ？」

「……森を抜けること」

「違う！ ゴールすることだっちゃあああ！」

「だから、ゴールがどこか鬼わからないんだろ！」

「ユウ！ ゴールは地図でいうとどこだっちゃ？」

「ん。ここ」

ユウが指す一点に、賢治は石を置いた。

「いいか。つまり俺たちはこの石とこの石を直線に結んだ道を進めばいいんだっちゃ！」

「いい加減その『ちゃ』ってのどうにかしろ。俺たちはその道がないから迷子になってんだろ！」

「ないんだったら作ればいいだけのことっちゃ！ いいか？ 道は自分で切り開くものだっちゃ！」

「なんかイイコト言ってるみたいでムカツク」

「ああ。あとで股ズレした部分に練りワサビすり込んでやろうな」

「そ、そんなことはどうでもいいっちゃ！ ゲン、音頭おんどをとるっちゃ！」

「なんで俺なんだよ」

「いいから。ほら、ゲン！」

源一は仕方ないといった感じで腰を少し落とした。4人は肩を組み、円陣を作る。

源一は軽く息を吸い込んだ。

「よんちゅう〜！ ファイ！」

……続く沈黙。どこかでカラスが鳴いた気がした。

恐る恐る、悠樹は口を開いた。

「ねえ、ゲン」

「なんだよ」

「よんちゅうってなに？」

「四中っていったら俺の出身中学だろうが！ なんでおまえら後に続かないんだよ！」

「それ、俺たちには鬼関係ないし」

「やっぱり俺たちの場合、風見鶏学園でやるっちゃか？」

「風見鶏学園だと言うの？ カザガク？」

「はつきりいって入学3日目でしょうかも校舎にもたどり着いていない風見鶏学園にはまるっきり思い入れがないな」

4人は当然にして必然の疑問、俺たち、なんでこんなことしてるんだろう、にぶち当たり、絶言した。

源一は、鬱を払拭するために叫んだ。

「と、とにかく行くぞお！」

「「おう！」」

4人のへっぴこ西遊記は道なき道を歩き出す。目印はいやらしい

熱視線を送り続けてくる太陽のみ。
枝を折り藪を掻き分け腐葉土を踏みしめる。次に足を止めたら気持ち
が折れて前に進めなくなる。それがわかっている4人はヤケクソ
気味に歌を歌いながら歩き続けた。

3日目 4 (後書き)

歌はご存知、「トレイントレイン」です。ぼかして適当な童謡にでもしようかと思いましたが、ここで誤魔化したら小説書く意味が薄れると思ってそのまま乗せました。

→7月30日

なんかジャスラックのことで問題になっているらしいので伏字を入れました。いっそ削除しようかとも思ったのですが、怒られるまではこのままでもいいのかなと。。。

3日目 5

「イツデモま、すぐ、歩けるか！」

「湖にドボンかもしれないぜ！」

「どんな、ふうに、にげようか！」

「すべては！ 幻と笑おうか！」

アルバム3枚分は歌っただろうか。そろそろレパートリーとのどの調子に限界が訪れ始めた頃、悠樹は突然歌うのをやめた。

「ユウ、どうした？ 歌詞を忘れたか？」

悠樹は源一の質問には答えず、首と眼球をきよろきよろと動かした。

「どうしたっちゃか？」

「おいおい、足を止めるなよ。なにがあったんだ？」

源一と賢治、高志の3人は悠樹を囲むように立った。悠樹は、瞳を閉じ源一の右手の袖を掴んだ。数秒の静寂、悠樹はカッと目を開くと源一の袖を引っ張った。

「ゲン、こっち！」

悠樹は歩き出した。が、すぐに止った。目の前の藪を必死に掻き分けるがなかなか前に進めない。

源一は悠樹の後ろ姿を一瞥して上を見た。森の切れ目からのぞく藍色の空には、昼の白い月がぽっかりと浮かんでいた。

源一は頬を叩いて気合を入れ、悠樹の首根っこを引っ張り後ろに押し退くと、藪を掻き分けて前に進んだ。しばらく進むうちに悠樹が気付いたものに源一も気付いた。源一は速度を上げて前に進んだ。

急に視界が開けた。

薄暗い緑に慣れた源一たちには目が痛いほどの光源。空には水飛沫と7色の虹。

そこは、滝の流れる泉だった。陽光を反射して輝く水面は、幻想的

な情景を醸し出していた。

悠樹が最初に気付いたものは、落水する滝の音だったのだ。

悠樹は源一を見た。泥と埃と蜘蛛の巣がまわりついている。枝に引っかかった制服は所々が破れ、頬についた切り傷からは鮮血が滴っていた。薄汚れた格好だった。賢治と高志を見る。やはり薄汚れた格好をしている。そして、悠樹自身も同じように薄汚れていることだろう。

長く果てしない密林をようやく抜けた。悠樹は、感極まって源一に抱きついた。

「げーん〜♪」

「おう！」

源一は悠樹を抱き上げ、振り回した。

「キャハハ♪」

1回転、2回転、3回転。

4回転目で源一の手が離れた。笑顔が張り付いたまま悠樹は源一から離れていった。自分がなにをされたのかわからないまま、悠樹は落水する。もがいてやっと水面に顔を上げたときに、悠樹はやっと自分が泉に投げ飛ばされたことに気付いた。

「なんてこと、す、る〜！」

悠樹の言葉に被せるように、尻がふたつ悠樹に向かって振ってくる。悠樹の至近に着弾した賢治と高志は盛大に悠樹の顔に水飛沫を叩きつけた。

「バカデブ、バカハゲ！ なにをやっているんだ君たちは！」

「ぷわ〜！ 気持ちいいっちゃ〜！」

「鬼生き返るな〜！」

賢治と高志は底意地の悪い太陽に苛め抜かれた身体を泉に浸して冷却した。

悠樹は、源一を見た。源一は、制服を脱いで上半身裸になっていた。陽光に晒される筋肉質な男の身体。悠樹は、息を吞んで見入ってしまった。源一は悠樹の視線に気付くと、口元に笑みを浮かべ、一

気に飛んだ。

ノースプラッシュで水面に飛び込み悠樹の眼前で浮上する。

「ふう、まさか4月に水遊びすることになるとは思わなかったな」

「そういえば今4月だったっちゃね。完全に忘れてたっちゃ」

「今って春だったんだな」

「……」

悠樹は口を半開きにして源一を見惚けている。源一は、人差し指と親指を悠樹の顔に近づけて、鼻をつまんだ。

「……にやにしゅんだよお」

「おまえこそなんだよ。人の顔をガン見しやがって」

悠樹は、濡れた体を乾かす犬のように身体全体を揺すって源一の指を振りほどいた。

源一はメガネを外して水滴を指で拭うと、仰向けに水面に浮かんだ。

「あゝ、疲れた。あとどれくらい歩くんだ？」

「ゲンが疲れたっていったの初めてだね」

「この泉は地図に載っていたっちゃ。このまま下っていけばきっと正規ルートに戻れるっちゃ」

「けっきょく俺たちって鬼遠回りしたんじゃない？」

源一の視線は空に向かった。空は夕日の朱を作り始めている。

意外にも、このままリタイアしようとは誰も言わなかった。筋肉痛と股ズレに悩む篠岡賢治ですらも、リタイアしようという思考を持っていなかった。

ここまで来たら意地でもゴールしてやる、それが4人の共通の見解だった。だから、源一が身体を起こして口火を切ったとき、それに反論するものはいなかった。

「さて、と。そろそろ行くぞ。日没までそんなに時間もない」

「うん。あともうすこしだしね」

「頑張ってゴールするっちゃか」

「地図的にはあと2〜3キロだろ。あと一息だな」

4人は顔を見合せて、笑みを浮かべた。

そして、4人は学校が用意する最後にして最大の難関（嫌がらせ）と相對することになった。

高坂源一郎、朝比奈悠樹、篠岡賢治、木下高志の4人は対岸に渡り、泉を下流に向かって歩き始めた。

「はぴゅん！」

悠樹はくしゃみを虚空に撒き散らし、鼻をすすった。

「うゝ、寒い。泉の水、けっこう冷たかったね」

「おまえも制服脱いだら？ 風邪ひくぞ」

悠樹は少し考えて制服の上着を脱いだ。湿った制服は重く、絞ると大量の水滴を零した。

高志は慌てて悠樹の耳に口を寄せた。

「ユウ、ユウ！ シャツが透けてスポーツブラが見えてるぞ」

悠樹は瞬間的に顔を赤く染め、脱いだばかりの制服を羽織った。ちらりと源一を見ると、源一は賢治と地図を見て、なにやら話している。源一は悠樹の上目遣いに気付き、軽くため息を吐いた。

「ユウ、濡れた制服は脱いでおけよ。身体を冷やすぞ」

「い、いいの！ もう身体冷えてるし、外気が寒いから」

なにやらおどおどとしている悠樹に、源一は、自身の濡れていない制服を投げつけた。

「これ着ておけよ。ゴールは近いって言ってもまだなにがあるかわからないんだからな」

「う、うん……」

悠樹は源一の制服を羽織り、袖口の臭いを嗅いだ。

「源一の制服はきつと剣道の籠手の臭いがするに違いないっちゃ」

「おまえはカメムシの臭いがするけどな……、てユウ！ 鼻、鼻！」
「ふえ？ うわあああ！」

悠樹の鼻から垂れ流される鮮血はぼたぼたと源一の制服に染みを

作っていた。

「鼻血って、急に出すやついたよな」

「チビすけはきつともものすごい妄想をしていたっちゃ」

「うゝ、うるさいうるさい！」

悠樹はティッシュを鼻に詰めた。制服のポケットの中にあって泉につけられたティッシュはぐっしりと濡れていた。

「まったく人の制服汚しやがって。ほら、乗れ」

源一は悪態をつきながら悠樹の前で背中を向けてしゃがんだ。

「え、オンブ？ いいよ大丈夫だよ」

「うるさい、はやくしろ。おまえの鼻血が止るまで休ませておく余裕はないんだよ！」

悠樹はおずおずと源一の肩に手を着いた。源一は、悠樹の細い太腿を掴むと強引に持ち上げた。

「うわん！」

バランスを崩した悠樹は慌てて源一の首に抱きついた。

「急に立ったら危ないだろお！」

「はいはい、黙ってる。舌噛むぞ」

「チビすけはいいっちゃね。ゲン、あとで俺もオンブしてくれっちゃ」

「痩せたらな。とりあえず体重を半分まで落とせ」

「痩せたら80キロくらいか。それでもオンブするには鬼重いだろ」

「俺の身長で80キロなら適正っちゃ」

「それなら今がどれだけ肥満かってわかるな、ええい寄るな、クソでぶ！」

がに股で手を伸ばす賢治に源一は土を蹴りつけた。

悠樹は、揺れる源一の背中の上で鼻に詰めたティッシュを落ちないように詰め直した。

3日目 7

それから5分も歩かないうちに源一たちは意外な人物に声をかけられた。

「おい、高坂！」

大声のほうを向くと、三崎省吾と3人の学生が立っていた。なぜか泉を渡っておらず、対岸でたたずんでいた。源一たちは、思いがけずトップになっていた。

源一は悠樹を下ろし、省吾に応えた。

「そんなところでなにやってんだ？ もうとっくにゴールしてると思ったぞ」

「おまえらこそ、いつの間に、いや、どうやって泉を渡ったんだ？」

「どうやって？」

省吾の言葉の意味がわからず、源一は首をひねった。

「どうやら正規ルートを進んだ連中も相当苦労したみたいっちゃね。ふん、残っているのは俺たちを含めて8人か。ほれ、結局俺が正しかったっちゅわー！」

「な、なんか鬼チャンスだぞ。このままあいつら置いていってゴールしてやろうぜ」

源一は、高志の言に頷こうとして、省吾が泉の一点を指差しているのに気付いた。4人はほぼ同時に省吾が教えようとしたものに気付いた。

目と鼻だけを水上に出す特有のフォーム。冷酷さを例えられる瞳はまっすぐに源一たちを見据え、優雅な遊泳で源一たちに向かってきていた。

「ねえ、ゲン。あれ、なにか言っている？」

「ものすっぱえ聞きたくないが、言ってみろ」

「あれ、ワニだよね」

「ああ、ワニだな」

「ワニっちゃね」

「あれがいたから三崎たちは泉を渡れなかったんだな」

ワニは3メートルを超える緑色の巨体を波打たせ、脇目も振らずに源一たちに向かってくる。

悠樹は、鼻に詰めたティッシュを引き抜いて、（源一の）制服のポケットに入れた。

「えっとね、ワニにはアリゲーター、クロコダイル、ガビアルの3種類がいるんだよ」

「へえ、それであればなんて種類なんだっちゃ？」

「いや、種類はどうでもいい。そのワニの中に草食なやつはいるのか？」

「えっと、貝とか魚とかも食べるらしいんだけど……」

「だけど？」

「……続きを聞きたいのお？」

押し黙る4人。

「ま、まああんなのを相手にしてやることはないっちゃ。さっさと先に行くっちゃ」

「あ、ああ。そうだな」

源一たちはワニに背を向けるとそそくさとその場を後にした。

ワニは岸に上がり、高坂源一郎たちを追いかけていった。対岸からそれを見ていた三崎省吾は視線を泉に向けた。泉にいたワニは、一匹だけだった。

「なんだか知らないがチャンスだ。さっさと泉を渡ろうぜ」

省吾は肩を叩かれる。この場で一緒に立ち往生していた学生だ。省吾たちは、実に2時間以上もこの場でワニのせいで足止めされていたのだ。

「そうだ、な。やるか」

省吾はそう言うと、右拳を胸元に置いた。

そして、省吾は腰と拳を振るった。裏拳は肩を叩いた学生の顎に直撃し、一瞬で意識を外に飛び出させた。

省吾はそのまま身体を回転させ側にいたもうひとりの学生の即頭部に蹴りを叩き込んだ。盛大に吹き飛んだ学生は、そのまま起き上がらなかった。

「このやろう！」

残った最後のひとりとは省吾に向かって手を伸ばした。背は190を超え、体重も100キロを超える巨漢だった。篠岡賢治などと違って、しっかりと鍛えている、筋肉に覆われた身体を学生は省吾に向けた。

省吾は片頬を吊り上げた。歩法や構えから察するに相手はおそらく柔道をやっているのだろう。省吾の襟首に相手の手が伸びたとき、省吾は腰をわずかに落とし、つま先に力を入れた。

大きく振られた省吾の右拳は地面すれすれを滑空し、一気に跳ね上がって相手の腹部に吸い込まれた。鍛え上げられた腹筋を突き破り、100キロを超える巨体が宙に浮いた。省吾の襟から手が離れ、意識ごと身体を吹き飛ばされる。

今この場に残っているのは体力的にも知力的にも、運においても一定以上を要している連中だったのだろう。それが、5秒に満たない時間で完全に沈黙していた。立っているのは、省吾ひとりになっていた。

省吾は地面に伏し倒れている行き連り関係にあった同胞を一瞥して乱された襟元を正すと、泉を渡り始めた。

3日目 8 (前書き)

ここでやっとオープニングに戻ってきました。

走る、走る、走る。高坂源一郎たち4人は必死になって走っていた。4人は、走馬灯のように流れる景色を横目に全力疾走で逃げていた。

朝比奈悠樹は、後ろを地響きを上げてガニマタで走る篠岡賢治を見た。賢治は、源一に手を引かれて無理やり走らされている。そして、最後尾にいる賢治のさらに後ろ、そこには、低い車高で短い手足を高速回転している物体が迫ってきていた。

「げ、ゲン！　きてる、追ってきてるよお！」

「うお、速い！　鬼速いぞ！」

源一は強引に賢治の手を引きながら後ろを振り返った。

そこにいたのは、ワニだった。

緑色の鱗を照からせ、長い口吻くちから鋭い歯を覗かせて半開きになっている。瞳孔の細い爬虫類特有の眼は、まっすぐに源一たちを見ている。源一の背中に悪寒が走った。

ワニが追ってきていると気付いたときには、まだ源一たちには余裕があった。ワニは水域に棲息している生物であり、陸上ではそれほど活発な運動はできないだろうと思っているからだ。だが、その憶測は間違いだったと知らされた。いつまで経っても一定の距離で追ってくるプレッシャーに負けて源一たちが走り出したとき、ワニも一緒になって走って追ってきたのだ。

ワニは短距離ならば陸上を高速で移動できる。ワニはそれを証明するように源一たちとの距離を縮めていく。

「ぶばあ、ぶばあ」

汗で滑る賢治の赤ん坊のように脂肪に覆われた手首を源一は強く握り締めた。源一の指は、賢治の脂肪に沈んだ。

必死に引っ張るも賢治の足はすでに限界にきていて、ワニとの差

を広げられなくなっている。このままでは追いつかれる、そう思った源一は、大声で怒鳴った。

「木に登れ！」

その声に反応して高志と悠樹が低木によじ登り、源一は馬になって賢治を木の上に乗せた。150キロが源一の背骨を軋^{きし}ませる。

「ゲン！」

悠樹の声に正面を向くと、ワニは間近に迫っていた。

源一は、反射的に跳ねた。逆上がりの要領で一気に身体を木の上に押し上げ、地面から飛び退く。ワニは、尾の力を利用して一メートル以上を飛び上がったが、間半髪の差で源一の足首に届かなかった。「あ、危なかった」

悠樹は源一が無事なのを確認して安堵の息を吐いた。ワニを見ると、威嚇するように源一と賢治のいる木の周りを回っていた。

「おいおい、これ、どうするんだよ」

「ぶばあ、ぶばあ。ど、どうしようもないっちゃ」

「ボク、ひとつテーアンがあるんだけど」

「……言ってみろ」

「ケンジをワニにバクバクさせている間にボクとゲンが先に行く！ほら、ケンジって食べ応えあるしフォアグラみたいに肥満肝じゃん♪」

「冗談言ってる場合か！」

「ど、怒鳴らなくってもいいだろ！　ちよつと場を和ませようと思っただけだよ」

「ブヴァア！　チビすけはセンスがないっちゃ！」

源一は背中と右腕をさすった。さすがに、ワニと喧嘩するにはリスクが高すぎる。これ以上の継続は無理、ここでリタイアか……、そう思ったときだった。

その光景は、源一にはスローモーションのようにゆっくり見えた。悠樹の身体がわずかに揺れた。そして、その傾いた姿勢のまま、悠樹は垂直に落下していった。尻餅について地面に接着した悠樹の

下には、折れた枝が敷かれている。

悠樹は、正面を向いた。

そこには、ワニがいた。

のそりと長大な身体を動かし、口吻を開ける。状況を理解できないでいるのか、恐怖のためか、悠樹はその場でへたり込んだまま、動けないでいる。

肉食獣の生臭い息がかかる距離でワニの足が止った。ワニは心なしか瞳孔を細め、口吻を大きく上下に広げた。

高志は息を呑み、賢治は目を背ける。悠樹は、固く瞳を閉じた。

源一は、動いていた。

対決！ワニ！

……時間にすれば3秒ほどだろうか。悠樹は、おそろおそろ瞳を開けた。そこには、この3日で慣れ親しんだ男の広い背中があった。「調子に乗ってんじゃねえぞ、短足ヤロウ。爬虫類の分際で人間さまにたて突こうってんだからそれなりの覚悟はできてるんだろうな」ワニは、怒りに任せて短い手足と長い尻尾をばたつかせた。

源一は、木の上から飛び降りて全体重を乗せてワニに飛び蹴りをかましたのだった。突然の予想外の攻撃にワニは大きくのけ反った。視線の先を悠樹から源一に換え、この不当な攻撃者に復讐しようと、異様な鳴き声を上げた。

「げ、ゲン……」

おそろおそろ源一に声をかける悠樹。源一は、悠樹を完全に無視してワニに向かった。

ワニは、咆哮をあげると、尻尾の力を利用して一気に飛んだ。源一は真横に跳ね、ワニの初撃をかわす。間を置かず2撃目を繰り出そうとするワニ。だが、それが行われることはなかった。

「うすど〜ん！」

ワニの身体の上に150キロが落ちてきた。ワニの身体は海老反り、悲鳴を上げた。

源一はすかさずワニの口吻を絞めて開かないようにし、賢治はワニの胴体を羽交い絞めにした。遅れて飛び出した高志は尻尾を引っ張り、ワニの動きを阻害する。

「うお、ワニの爪って鋭いっちゃ。怖いっちゃ〜！」

「尻尾の力、鬼強い！ ゲン、長くは押さえてられないぞ！」

源一は暴れるワニを無理やり押さえつけ、悠樹に言った。

「おい、ユウ！ いつまでへたってるんだ！ 早く手伝え！」

「あ、う、うん！」

悠樹は震える足を無理やり立たせた。

満身創痍だった。鱗や爪で作られた切り傷や擦り傷。尻尾で弾き飛ばされた身体には打撲傷ができています。

高坂源一郎、朝比奈悠樹、篠岡賢治、木下高志の4人はぐったりして木の幹に括り付けられたワニを見て、大きな息を吐いた。ワニの口には源一の制服が巻かれ、胴体と尻尾は高志の制服と賢治のストラックスで木に縛られている。

「……ワニに勝っちゃった」

ぼそりと呟く悠樹、それを合図に勝ち鬨が始まった。

「おら、ワニ公！ 人間さまを舐めるからこうなるんだよ！」

「おっしゃあ！ なんか知らないけど俺たち鬼凄くないか！」

「ちゅわちゅわあああ！ 喰うか？ 逆に喰うっちゃか？ ワニはけっこうまいらしいっちゃよ」

騒ぎまくる男3人。悠樹は、ただ呆けたようにその場に立ち尽くした。

「どうした、ユウ？」

源一に声をかけられて悠樹は視線をわずかに上げた。途端、足に力が入らなくなりへたり込んだ。

「……腰、抜けちゃった」

ユウは地面に座り込んだまま源一にニヘラと笑顔を見せた。源一は苦笑して悠樹のやわらかい髪をくしゃりと掻き回した。

「しかし、このヘンリエッタ。なんでこんなところにいるんだっちゃか？」

「ヘンリエッタってなんだ？」

「このワニの名前だっちゃ」

賢治は手に持っていたチェーンを見せた。そこにはカタカナでヘンリエッタと書かれたプレートがつけられていた。

「これ、こいつの首につけられていたっちゃ。羽交い絞めにしているときにとれたっちゃ」

「じゃあこのワニ誰かのペットなんだ。そうだと思った。だってワ

「この分布に日本海とか北太平洋ってないもん」

「そうなのか？　じゃあ、誰かがここに捨てたのか？」

「わざわざ無人島に捨てにきたんだっちゃんか？　それより誰かがわざとここで放し飼いにしていると考えたほうが自然だっちゃん」

賢治がそういうと、全員押し黙った。今まで行われた数々の嫌がらせから推察して、このワニが誰のペットか検討がついたのだ。

「……あの女か」

「あのばばあだっちゃんね」

「和子だね」

「ああ、俺たちの校長先生だ」

風見鶏学園校長漆原和子、まだ姿すら知らないこの敵は、すでに源一たちにとっての嫌悪の対象になっていた。

源一は頬を2度3度と叩くと、言った。

「よし、そうと分かれば先に行くぞ。ここでリタイアして校長の迷惑に乗ってやることはない」

「ああ、そうだな。それにわざわざここまできてリタイアじゃあ鬼悔しいもんな」

「仕方ない。あともう少し、気合入れて頑張るっちゃんか」

ふと見ると、悠樹はへたり込んだまま源一を見上げていた。源一の視線に気付くと、悠樹は破顔して両手を広げた。

「ゲン、おんぶ♪」

「……賢治」

「おう」

源一に呼ばれて白ブリーフ一丁で悠樹の前に立つ賢治。悠樹の頭の上にはでっかい『？』。賢治は、自身のたるんだ下腹部を持ち上げると、左右に揺すった。賢治の腹から飛び散る汗飛沫は座っている悠樹に噴きかかる。

「うにゃー！　なにするんだ！」

「うるさい！　さっさと立て」

「置いてくっちゃよ！」

「んな！ 仮面デブダーブラックRX78！ 君にだけは言われたくなくいい！」

「なんかいろいろ混ざってるっちゃよ」

「まったく。仕方ないな」

高志はそう言うのと悠樹の前で背中を向けてしゃがんだ。

「？ なんだよ？」

「俺がおんぶするよ」

「高志、ガキは甘やかすと調子に乗るっちゃよ」

悠樹はスクと立ち上がると、半ばブリーフがずり落ちている賢治の尻を蹴った。源一はその悠樹の後ろ頭を叩く。

「立てるじゃねえか！」

「はッ！ ケンジがムカツクから立っちゃった」

「やっぱり甘ったれてたっちゃね。甘ったれお金チビが！」

ぎゃんぎゃんと言いつつ合うチビとデブ。チビデブの源一は、腰を屈めている高志を見た。

源一にはその格好から高志の頭頂部が見えた。髪の毛の隙間から頭皮が自己主張をしていた。

「高志、なにしてんだ？」

「……いや、なんでもない」

高志は何事もなかったように立ち上がった。賢治は、馴れ馴れしく高志の肩に手を置いた。

「高志が優しいってのはわかるが、高志は人に親切にするやり方がまだわかってないっちゃね」

「引きこもりだったしな」

「ゲン、賢治、おまえら……」

「？ そーいえばさっきも言ってたけどタカシってヒキコモってたの？」

わずかに首を傾げて高志を見上げる悠樹。高志は悠樹から顔を逸らした。

「ほら、そんなことはどうでもいいんだよ。行くぞ」

源一は悠樹の首根っこを引っ張り歩き出した。悠樹は数歩つんのめると源一の隣に並んだ。

高志は、源一と悠樹の後ろ姿を見ながら肩を組んでいる賢治に言った。

「おまえら、鬼むかつかうな」

「同感だっちゃね。俺もそう思うっちゃ」

賢治と高志は口元に笑みを浮かべて、源一と悠樹の後を追った。

対峙！

正面を向けば沈みゆく太陽が空を朱色に染め、後ろに振り返れば蒼月が冴え冴えと輝いている。

高坂源一郎、朝比奈悠樹、篠岡賢治、木下高志。ゴールを目指す4人は、緑溢れる地獄極楽島の景色を黄金色に染める大きな夕日を眺めて足を止めた。

「ふわり、すごいねえ」

「ああ。綺麗だな」

「……賢治、なんで泣いてるんだ？」

「うう、きれいだっちゅわ」

顔中、汗と涙で汁まみれのデブは、ずり落ちかけた白ブリーフを片手で引き上げた。賢治を除く3人は冷ややかな目で賢治を見た。

「？　なんだっちゃん？」

「……君、顔がブサイクすぎるよ。夕日が台無し！」

賢治は悠樹に手を伸ばすが、悠樹はすばやくかわし、源一の右手に自分の両腕を絡めた。悠樹は、源一がわずかに顔をしかめたことに気付かなかった。

ゴールが近いこともあり、源一たちの足取りは軽い。

夕日は低く、長く源一たちの影を伸ばしている。それを遮るように源一たちの前に人影が踊った。

4人の前に立ちはだかったのは、三崎省吾だった。

「よお、遅かったな」

「なんだよ、待っててくれたのか？　案外義理堅いな、不良のクセに」

源一は、目の前に現れた省吾に相対した。

「ワニはどうしたんだ？」

「半殺しにしてやったよ。4人がかりでな」

省吾は、所々制服が破られ、乾いた切り傷を全身に残している4人を見て苦笑した。

「お疲れさん。もうゴールはすぐそこだよ。まだ誰もゴールしてないけどな」

「それで、なんの用だ？」

源一に問われ、省吾は口端を吊り上げた。

「わかってんだろ、高坂」

省吾は源一から視線を逸らすと、軽く息を、吐き出した。

一足で源一の横に並び、二足で後ろに回った。源一が振り返ったときには、省吾は高志を殴り倒していた。そのままの勢いで右手を振る。地面すれすれを滑空する省吾の右拳は賢治の皮下脂肪を突き破る。150キロある賢治の両足が地面から離れた。

省吾は賢治の吐瀉^{としゃ}を避けながら、源一の隣で固まっている悠樹に視線を向けた。

「まだ1匹いるな」

省吾は手を振った。悠樹は、目を瞑^{つむ}った。

悠樹の前髪が風にそよいだ。おそろおそろ悠樹は瞳を開けると、眼前には省吾の節くれだった裏拳があった。その手首は、源一の左手が掴んでいる。

「俺に用があるんだったらこんなうーちゃか放っておいていいだろ」
省吾は小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「それでも嫉妬してるんだよ。おまえはこいつらにかかりきりで俺のことを無視してくれてたからな」

源一は、口元に笑みを浮かべた。

「安心しろ、これから飽きるまで遊んでやるから」

省吾は片頬を吊り上げると、押さえられていた拳を払い、源一に対峙した。

源一と省吾は、同時に腰を落とし、同時に前に出た。一瞬の交差、弾けるように距離を置く。

悠樹には、なにが起きたのかわからなかった。源一は鼻血を親指で拭き、省吾は頬から滴る鮮血を払った。

「なんでその身長で俺とぶつかって当たり負けしないんだ？ どういう身体しているんだよ」

「なめんな喧嘩屋。てめえら素人とは鍛え方が違うんだよ」

「やっぱりおまえだよ、高坂。この3日間でいろんな奴を見てきたが、食指をそそのるのは、おまえだけだったよ」

「この、狂犬が。おまえには躰しっけが必要だな」

源一は、メガネを外すと側で固まっている悠樹に渡した。

「先に行つてろ。俺は今から三崎と遊ぶから。いいよな、三崎！」

「ああ。雑魚一匹逃がすくらいかまわないよ」

「そ、そんな、ゲンを置いて先になんて行けないよお！」

源一は、手のひらで悠樹を制して、言った。

「先に行け。おまえ、邪魔だよ」

悠樹は絶句して数歩後ずさった。

悠樹は、ショックだった。それは、「邪魔だ」と言われたことではない。源一の横顔が、愉悦に満ちていることだった。初めて見る源一の表情は、悠樹には向けられていない。

対象であるのは、やはり同じように笑みを源一に向けている、三崎省吾だった。

嫉妬か羨望か、あるいは他のなにかか。理解できない感情を悠樹は胸に押し込め、源一から離れた。

高坂源一郎と三崎省吾。2人は一足の距離で対峙していた。絡む視線。朝比奈悠樹は固唾かたずを飲んで2人を見つめた。

「悪いな。おまえらみたいな仲良しグループを見ていると虫唾が走るんだよ」

「それで邪魔をするのか？」

「正直に言う俺はおまえにシンパシーを感じているんだ。そんなおまえが友達ごっこをしていると思うと見てられなくてな」

「お節介だな。いい迷惑の」

「いいことを教えてやる。友情や愛情。それらは全部幻想だ」

「同感だ。だが、おまえがそう思うことと俺たちの邪魔をするのは関係ないだろ？」

「おまえらを認めると俺が成り立たないんだ」

「……ああ、そうかよ」

熱帯の森の中。2人の男が睨^{にら}み合う。

どこかで鳥の鳴き声がする。生暖かい風、微かな葉擦^{はす}れの音。2人は、動いた。

互いの頬に互いの右拳を打ち込む。そこからはどろどろの混戦だった。

殴り、蹴り、ぶつけ、叩く！

「やるじゃないか！ ただのスポーツ剣道じゃないみたいだな！」

「なめんなよ！ てめえらが群れて遊んでいる間、こっちは強くなるために人生のほとんどを使ってきたんだからな！」

省吾は身を屈め、源一の足を刈る。源一は、省吾の水面蹴りを飛び上がってかわし、そのまま上から圧し掛かった。一瞬、浮力が増す。投げ飛ばされた源一は、そのまま地面で一回転して立ち上がり、省吾に向き直った。

省吾は切れた唇をなめ、源一は折れた奥歯を吐き出した。

悠樹は、言葉を発することもできずにただ目前と2人を見つめていた。

対決！

源一と省吾、2人は再び距離を詰める。

悠樹は、ただ見ていることしかできなかった。

どっちが強いとか、どっちが正しいとか……。それらを超越して、2人は向かい合っていた。お互いがお互いの中に自分を見て、それを全否定する。ぶつかり合わなければ解けない関係。それが、悠樹には、羨ましかつた。うらや

「……いってえ、いったいどうなってんだ？」

高志と賢治が意識を取り戻す。悠樹は2人に駆け寄った。

「2人とも、大丈夫？」

「ああ。そうか、俺たちは、三崎に倒されたのか」

頷く悠樹。3人は、源一と省吾を見た。

殴り合う省吾と源一。省吾が源一の頬を殴りつければ、源一は省吾のあごを突き上げる。飛び散る血と汗。2人は、ほぼ無呼吸で相手を圧倒しようと動き続けた。

ふいに、省吾は距離を置いた。身長差を利用して遠間から仕掛ける。源一は、それを見て足を止めた。

省吾は源一を殴る。

当たらない。

蹴りつける。

当たらない。

源一は省吾の攻撃を体さばきのみでかわす。省吾の攻撃は、源一に完璧に見切られていた。

省吾は、まったく当たらない攻撃に舌打ちすると、前に出ようとした。

源一は、先に動いた。

先の先。完全に虚を突かれた省吾は、源一の体当たりをまともにくらった。間を置かずに源一は省吾のあごに掌底を叩き込む。

省吾は、苦し紛れに源一の右腕を殴った。源一は、大きく揺れた。痛みに視界がぶれ、源一の追撃は止った。

省吾は体制を立て直して、源一に言った。

「なんだ、右腕を痛めていたのか？」

「気にするな。いいハンデだろ？」

間を置いて対峙する源一と省吾。源一は、殴られた右腕をさすった。

「雑魚どもにかまけているから怪我を負うんだよ」

源一は、ちらと悠樹を見て、省吾に言った。

「三崎、おまえ、正直押し付けがましいよ」

―全国優勝なんて言ってるのはおまえだけだぜ。

源一は、かつて親友に言われた言葉を反芻する。源一は自嘲して頬を緩めた。

省吾は口角を下げ、一步前に出た。源一は口に笑みを浮かべたまま、省吾を迎え撃つ。

「人が信用できない？ そんなの当たり前じゃねえか！」

「黙れ！」

源一の頬を省吾の拳が裂く。鮮血が飛び散った。

「仲間に裏切られた？ どうってことはない。てめえが裏切られるような関係しか築けなかったただけだ！」

源一の言葉は省吾に向かって放たれたもの。だが、その言葉は同時に自身にも降りかかり、たやすく心をえぐる。

舌戦で追い詰めているのは三崎省吾か、それとも自分自身なのか。もはや源一自身にも判断はつかなくなっていた。

「そんなことで落ち込んだふりかよ！ どんだけ甘やかされてるんだ、おまえは！」

「黙れって言ってるだろ！」

省吾は大きく手を振った。地面すれすれを滑空する右拳は、跳ね上がって源一の腹部にめり込んだ。150キロの賢治を浮かせたボディブローだ。省吾の右拳は源一の腹筋を突き破り、肺から空気を搾り出す。源一の視界がぶれ、意識が飛びそうになる。霞む視界、そこに写ったのは、省吾の勝利を確信する笑みだった。

―こいつは、俺だ！

源一の意識は覚醒し、省吾の後頭部を押さえつけ、おもいきり顔面に自身の額を叩きつけた。

鼻血を撒き散らして倒れる省吾。

源一は、荒い息を吐き出しながら省吾を見下ろした。

源一は、誰にも負けたくなかった。剣道でもそれ以外でも。自身にもだ。

意地だ。意地だけで源一は立っていた。そして、同じ思いで三崎省吾も立ち上がる。

お互い、ふらふらだった。膝に力が入らず立っているのもやつの状態だ。

源一は、足に力を入れ、一步省吾に近づいた。

「世界の不幸を一身に受けるような気になってんじゃねえぞ」

さらに一步近づく。省吾は、拳を振り上げ、源一を殴った。力の籠らない、ぶつけるだけのような突き。源一は、足を踏ん張ってこらえた。

「おれは、俺はなあ！」

源一は右拳を振り上げた。肘に走った痛みを無理やり黙らせる。

源一は、拳は振るい、全てを省吾にぶつけた。

対決！（後書き）

急にアクセス増えました。ありがとうございます！ 評価までいただいて感無量です！ ぶっちゃけ自分の携帯でサクラでもやろうかと思っていたところなのでめちゃくちゃ嬉しいです！ さて、この作品もクライマックスです。次回（4日の21時）でまとめて終わりますので、どうか見てください！

決着！ 3日目終了

「おれは、俺はなあ！」

源一は右拳を振り上げた。肘に走った痛みを無理やり黙らせる。

源一は、拳は振るい、全てを省吾にぶつけた。

「俺は！ 親友に彼女を取られたんだぞ！」

源一の拳は省吾の顔に当たり、そのまま2人はもつれて地面に倒れこんだ。

西日、荒い息、鳥の鳴き声。

風が、死んだ。

「……ぷ」

最初に吹いたのは悠樹だった。

次いでおこる大爆笑！ 悠樹も、賢治も高志も。省吾さえも笑っていた。

「なに笑ってんだよ！」

源一は馬乗りになり省吾の顔を殴る。が、その拳に力はなく、省吾の笑いは止まらない。

「あははは！ いてえ！ 顔と腹がいてえよ！」

「ぎゃっはははは！ ばかだ！ こいつ、真性のばかだっちゃー！」

「すげえ、彼女寝取られてやんの！ 鬼だせえー！」

「きゃははは！ ゲン、げん！ 君、さいこー！」

「おまえら……、人のトラウマを笑うんじゃない！」

源一が怒鳴り散らし、ほかの4人は腹を抱えて笑い転げる。熱帯の森の中、1人の怒鳴り声と4人の笑い声が木霊した。

「ゲン。そんなに怒らないでよ」

「うるせえ。おまえらなんて嫌いだ」

大爆笑がひと段落した後、5人は地べたに寝転がっていた。状況は、源一の過去のトラウマを、笑いをかみ殺しながら根掘り葉掘り聞く段階に入っている。

「いや、高坂。おまえの気持ちはわかるぞ。女ってのは特に信用ならないもんだ」

「いやいや。彼女を放っておいたゲンが悪いっちゃ。女ってのは、いつでもかまってるほしいと思ってるもんだから」

「いやいやいや。ゲンが甲斐性なしなのは間違いないが。女のほうも少しは気を使ってやってもよかったんじゃない？」

「……おまえら、少し黙れ」

5人は、長年の友のように打ち解けていた。省吾も、先ほどまで殴り合っていたのが嘘のような親密ぶりだ。

「まあまあ。ゲン、元気だしなよ。そんなショーワル女のことなんて忘れてさあ。……ぷぷ」

「笑うなって言ってるんだろ！」

「あははは！ ごめんごめん♪」

源一は悠樹をヘッドロックするが悠樹の笑いは止まらない。悠樹は、楽しそうに、嬉しそうに笑い続けている。

源一は悠樹の頭を放すと、仰向けに地面に寝そべった。空を彩っていた夕の茜は、夜の藍に変わりつつある。

中学の3年間を賭けた試合を放棄し、夏の間引きこもった自身のトラウマは、他人から見れば爆笑の種だった。

そして、それを受け入れている自分自身にも源一は気付いた。なんてことはない。剣道にかまけていたために放っていた彼女に振られただけだ。

「空が高いなあ」

「ん、そだねえ」

悠樹は、源一の隣で同じように仰向けに寝そべっていた。省吾も、賢治も高志も、それに倣う^{なら}ように仰向けに空を見上げた。

それぞれが自分の過去を振り返っていた。

男を止めさせられた悠樹。

受験に失敗した賢治。

引きこもりだった高志。

そして、必死に守ってきた友人に見捨てられた省吾。

源一と同じように、それぞれがトラウマを抱えていた。差異はありシヨックも違う。だが、源一のことを笑い飛ばしたように、今、悠樹たちは自分自身の過去をも笑い飛ばしていた。

—なんだ、そんなことか。

省吾は痛む身体を起こし、寝そべっている4人を見た。爽やかな顔をしている賢治、高志。やはり爽やかな顔をして源一に寄り添っている悠樹。ひとり慚然としている源一は、仰向けのまま省吾を見上げ、口元に笑みを作った。

穏やかな夕暮れ時。昼の暑さを払拭するように海からの涼風が源一たちを撫でる。

そんなささやかな幸せを壊すのは、いつでも権力者（大人たち）

の仕事だった。

静寂を打ち破るように源一たちの上に機械音が響き渡った。森のどこかに設置されているスピーカーだ。そこから、忘れもしない女性の声が響き渡る。

『新人生諸君。友情を育みあっていて大変結構なことだ。だが、タイムリミットは迫っている。早くゴールすることを警告する』

ムクリと身体を起こす5人。

「かゝずー子ゝ！」

「警告って、なんだっちゃか？」

「……このままだとバツゲームかなにかあるんじゃないか？」

「……ワニ以上のやつか？」

校長、漆原和子の嫌がらせの数々を経験している4人は、暗く沈んだ顔をした。ひとり和子の恐ろしさを知らない省吾は、身体をバネにして一気に起き上がった。

源一は、舌打ちした。

「タフなやつだな。もう回復してやがる」

源一は痛む身体を無理やり起こして立ち上がった。それに続いて残りの3人も起き上がる。

「さて、と。ここまで来たら恨みっこなしで行こうぜ。単純な徒競走だ」

「いいね、それ。わかりやすい」

源一と省吾の視線が絡む。それを遮るように悠樹が間に割って入った。

「それじゃあヨーイドンでスタートしようよ。最後くらいはフェアでさ」

「よし、それじゃあスタートラインを引くぞ」

そう言って高志は足でラインを引いた。そのラインに5人は並ぶ。「それじゃあ、俺が号令をするっちゃ」

右から順に篠岡賢治、朝比奈悠樹、高坂源一郎、三崎省吾、木

下高志の順に並ぶ。それぞれがスタートに備える。

静寂の一瞬、両隣の微かな吐息のみが聞こえる。それも、緊張の高まりにつれて小さくなっていく。

世界から音が消えた。

「……ちよっと待つっちゃ。合図はヨーイドンで行くっちゃよ」

どっと、緊張が解けた。仕切り直しとばかりに賢治を除く4人は身体から力を抜いた。

賢治はその隙をついて走り出した。

「あゝ、ずっこい！」

「むはははは！ 騙されるほうが馬鹿なんだっちゃゝ、へぶし！」
しかし賢治は3歩も進まないうちに盛大に転んだ。顔面から地面に落ち、鼻血を垂れ流す。

「な、なぜ靴紐が左右で結ばれてるんだっちゃゝ！」

「あつははは！ デブリーナ13世の考えなんてお見通しだよ、ぎゃん！」

賢治の横を走りぬけようとした悠樹は賢治に足首を掴まれて転倒した。

「チビすけが！ 簡単には先に行かせないっちゃー！」

「えゝい、離せ、はゝなゝせー！」

半ばブリーフのずり落ちた状態で四つん這いの賢治の顔を、悠樹はちっちゃな靴で蹴りつける。賢治は、ダメージを受けながらも悠樹の足首を離さない。

「へ、俺が一番ダメージが少ないぜ。先に行かせて……ぐお！」

ひとり先に行こうとした高志の襟首を省吾が掴む。

「お前たちのことを誤解していたみたいだな。大した仲良しグルー

プだ！」

省吾は片手の力だけで高志を後ろにぶん投げた。

省吾の横を影が躍おどった。

一瞬の隙を付いて前に出る源一。

それに気付き、省吾は一步遅れて源一の後を追った。

悠樹は、蹴り続けて気絶させた賢治の手を払うと立ち上がった。
そして、おもいきり空気を吸い込み、叫んだ。

「げーんぐ！ 行っけー！」

源一は、それに応えるように痛めた右腕を突き上げて、沈みゆく
太陽に向かって駆け上がった。いった。

4日目

強歩大会の翌日、高坂源一郎たちはヘリに乗り地獄極楽島を後にした。そして、運ばれた先は、1年生寮だった。

源一はあてがわれた部屋に入り、2段ベッドの下に荷物を放り込んだ。

「で、なんでおまえと相部屋なんだよ！」

源一は、上段のベッドで寝転んでいる三崎省吾を怒鳴りつけた。

「なんだよ、大声出して。俺たちは強歩大会の1位2位だから、当然だろ？」

源一は室内を見渡した。

12畳のキッチン付ワンルームだ。備え付けの冷蔵庫、大型テレビにソファ。2つの机の上にはそれぞれデスクトップのパソコンが乗っている。

2人部屋とはいえ、学生が使うには豪華な部屋だ。

「おーっす、ゲン、ショウ。遊びに来たぞ」

ノックもなく扉が開かれ、木下高志が入ってくる。

「うお。鬼でかいテレビだなあ」

「高志、賢治はどうした？」

「あいつは部屋で寝てるよ。筋肉痛で動けねえってよ」

高志はソファに腰下ろした。

「それで、おまえらの部屋はどうなんだよ」

「ここほどではないけど、それなりにいい部屋だよ。広さはここより少し狭いかな。パソコンは1台だしキッチンはないな」

「ふーん。一応トップでゴールしておいて、得したってところかな」

「おいおい。さっき行きのヘリで同じだった奴に聞いた話だけど、

初日にリタイアした連中は6畳で4人部屋だってよ」

「……それは、きついな」

「……ああ。俺たち、相当優遇されているんだな」

源一と省吾は同時にため息を吐いた。だが、ため息には達成感も含まれている。150人の新入生の中で強歩大会を完走したのは源一たち5人だけであり、それこそ命がけでゴールしたのだ。そのゴールの報酬としてのこの部屋ならば、源一は素直に受け取ることができた。

「そうだ、高坂。相部屋になってひとつだけ頼みがあるんだ」
「なんだよ」

「俺、月曜深夜にラジオを聞くんだよ。少し騒ぐかもしれないけど、我慢してくれ」

「……深夜の秘密基地？」

源一の問いかけに、省吾は即座に2段ベッドから飛び降り、源一に拳を出した。

源一は、無言で省吾の拳に自分の拳を付ける。さらに源一と省吾の合わさった拳を覆うように、高志は手をかぶせた。

3人は肩を叩きあって笑いあった。

その後、高坂源一郎、三崎省吾、木下高志の3人に篠岡賢治、そして朝比奈悠樹の5人がラジオ繋がりで放送部を作り、学園中、いや、日本中を席卷することになるのは、まだ先の話だった。

5日目

桜の花びらが風に舞い、源一たちの横を過ぎ去っていった。

地獄極楽島から生還して1日の休日を含み、源一たちは初の登校日を迎えていた。入学してから5日、源一たちは、未だに風見鶏学園の校舎内に足を踏み入れてはいなかった。

高坂源一郎、篠岡賢治、木下高志の足取りは重い。それは春にそぐわない、沈んだ歩みだった。

「おーい、ゲンー。みんな！」

登校途中の4つ角で、朝比奈悠樹は源一たち3人を見つけて駆け寄った。

「ひっさしぶりー。なんか2日ぶりなのにずいぶんひさしぶりに感じるねー♪」

「ユウ、なんでそんなに元気いいんだ？」

「え？　だってやっと高校生活が始まるんだよ？　ゲンは楽しみじゃない？」

「単純に面倒くさい」

「うっわー。ユメもキボーもない発言だねー。……で、賢治はなんで苦しそうにしてるの？」

それに答えたのは高志だった。

「こいつ、筋肉痛と股ズレが治らないんだってよ」

「……もう走りたくない。一生分走ったっちゃー」

悠樹は小悪魔チックな笑みを浮かべると、賢治の前に立った。

「？　なんだっちゃ？」

「せや！」

かけ声と共に賢治の太ももをおもいきり叩く。

「ぐぎょおおー」

「あっはははは！ もつとやせなよ。膝に負担がかかりすぎてるんじゃない？ タルミくん！」

賢治は悠樹を捕まえようとするが、悠樹はするりと逃げ、遠方より賢治を罵る。^{ののし}

「ユウって可愛い顔して、けっこうえげつないよな」

「ああ。あいつ、相当腹黒いぞ。おい、ユウ！」

「ん？ なあに、ゲン？」

ユウは名前を呼ばれ源一の10センチ真横にぴたりと並び、ほぼ垂直に源一の顔を見上げた。

「おまえ、どこから通ってんだ？ 1年生寮にはいなかっただろ？」

「うん。ぼくは女子寮から通っているんだ。今は女子、ひとりもないからぼくだけで占有できてるんだよ」

「さすがブルジョワ。ひとりだけ別のところに住むって、どんだけ特別扱いだよ」

「……ゲンってホントーにカイシヨナシだね。鈍すぎるって言われない？」

「甲斐性なしっていうな！」

ユウは、いつそのこと、自分が女であることをカミングアウトしようか本気で考えた。ふと横を見ると、ユウが女であることを知っている高志は苦笑いを浮かべていた。

学園が近づくにつれて同じ制服を着た学生が増えていく。誰もが同じ苦難に立ち向かった戦友だった。

「でもさあ、少しシヤクだよな」

「？ なにがだ？」

「なんか学校の思惑通りかなって。結局ボクたちって、一緒にゴール目指して、頑張って協力して、仲良くなったじゃん？ でもそれって、いわゆる連帯感を育むっていう学校の狙い通りってことでしょ？」

「仲良かう？」

横で話を聞いていた賢治は、顎肉を揺さぶらせながら言った。

「ブえつに貴様らと仲良くなった覚えはないっちゃー！ あれは、俺が貴様らを利用しただけっちゅあー！」

「うっせえぞタルミ」

「そうだぞタルミ。あれはおまえじゃなくて俺がおまえらを利用しただけなんだからな」

「なんだとー！ あ、股は触らないで！ いや、やめてー！」

賢治の太ももを触ろうとする高志に必死に妨害する賢治。源一は2人を無視して先を歩いた。寄り添うように悠樹は源一の隣を歩く。

「ねえねえ、ゲン」

「なんだよ」

「ゲンはどう思う？ ボクたち、仲良くなってないかな？」

源一は悠樹を見下ろした。悠樹は、まっすぐ、信頼に満ちた視線で源一を見上げている。

源一は、反射的に視線を逸らして、答えた。

「……賢治の言うとおりだろ。あの時は、ひとりじゃゴールできなかったからみんなで協力したってだけの話だ。別にあれだけで仲良くなってるってないよ」

「んふふふ♪ そっか。そうかもね。その通りかもね。ぼくとゲンと、みんなで協力してゴールしたんだもんねー。ひとりじゃ無理だから、みんなで。それだけのことだもんねー」

悠樹は源一と連帯感を持てたことがただただ嬉しかった。

お互いがお互いが必要として協力して、そして目的を達成したのだ。これ以上の関係があるだろうか？ 悠樹はそう思い、少し困惑気味の表情を浮かべている源一に笑顔を向けた。

学園が近くなってきた。それに伴い、同じ制服を着た学生の数も増えていく。いや、それは増えていくというよりは溜まっていくという表現が正確だった。

「？ なんだ？」

「どうせクラス分けの掲示板を見てる連中でごった返してるっちゃ」
賢治の考えは、半分は正解で半分は間違いだった。

4人は校門前まで苦勞して到着した。そこで、学生が足止めを食らっている理由がわかった。校門が閉まっているのだ。

「？　なんで閉まってるんだ？」

「ゲン、ゲン！　ぼくたち、同じクラスだよ！」

「それは、まあ、強歩大会の結果順に割り振られるらしいから同じクラスだろうけど。それよりなんだよ、この状況は？」

「んー、わかんない」

嫌な予感がする。それは源一たち4人に限らず、足止めを食らっている全学生の共通の思いだった。

しばらくその場で立ち往生をしていると、予鈴がなった。あと5分で授業が始まるという時間だ。そのとき、スピーカーから女性の声が聞こえてきた。忘れもしない宿敵、漆原和子校長の声だ。

『新入生諸君。先日は強歩大会、ご苦勞だった。結果順に組分けは済んでいる。これから1年、その組で精進するように。これからその組に向かってもらおうわけだが……』

「おい高坂」

源一が隣を見ると、三崎省吾が立っていた。

「なんだ、来たのか？　初日からさぼりかと思ったんだけど」

「まあ、慣れるまでは真面目に通うさ。おまえとの決着もまだついていないしな」

源一は苦笑する。その決着は、今から漆原校長のいう言葉でつけるのもいいかもしれない。

そして、マスター・ウルシハラは、宣告した。

『遅刻は4（死）い4649（よろしく）！』

その言葉を最後にアナウンスは切られ、ゆっくりと校門は開いていた。一瞬だけ絡む視線、先頭を源一と省吾が肩を並べて突っ切っていく。その後にくるように全学生が走り出す。

「もう、走るのはいやだっちゃー」

「いいから鬼走れ！」

賢治と高志も校舎に走っていく。

「あ、ゲン……」

悠樹の小さな身体は、波に揉まれるように押しつけられ、突き飛ばされた。気付いたときにはほとんどの学生は校舎内に入っていた。悠樹はただ呆然とその場で立ち尽くしてしまった。孤独、寂寥感、それらが悠樹の心の中を黒く侵食していく。

「つたく、なにをやっているんだおまえは」

その声に悠樹は我に帰り、声の主を見た。

「ゲン、先に行ったんじゃないの？」

源一は、いつものように大きなため息を吐いた。その吐息に悠樹の心の闇は一気に払拭される。

「おまえを置いていけないだろ？ ほら、行くぞ！」

「……うん！」

悠樹は、差し出される源一の手を取った。

これからもいろんなことがあり、たくさん走らされることになるだろう。これは予感ではなく確信だ。だが、側に源一がいてくれたらきっと乗り越えられる！ 悠樹はそのことを強く思い、源一の隣に並んで走った。

5日目（後書き）

長々と駄作にお付き合いくださいどうもありがとうございました。これにて今作「とりあえず走れ」の4月編は終わりです。さて、少しこの作品のことを語ると、実はこれ、第17回電撃大賞の落選作です。自信満々に応募して、落選して落ち込んで、しばらくして読み直してみると、まあこれじゃあ駄目だなというところが多々見つかるわけです。それを承知で掲載させてもらったのは、この作品に思い入れがあるからです。ぶっちゃけ、チビデブハゲの作者、悠樹の暴言に泣かされたことは1度ではありませんでした。さて、次回は次回は5月編を飛ばして6月編になります。ストーリーの展開上、いつかは5月は書きますが、書きやすいところから書こうかな、と。掲載は2月頃になると思いますが、よろしければこのままお付き合いください。今後も源一たちともどもよろしく願います。

5月オープニング（前書き）

どうも、お久しぶりでございます。アクセスが2000を超えました。感想までいただきありがとうございます。

またたびさま、ご指摘のとおりでした。いや、こっ恥ずかしい、速攻で修正しましたのでどうかご容赦を。

5月オープニング

三崎省吾は鏡台の前で髪型を整えた。

カーテンの隙間から差し込む陽光は、今が昼近い時間帯であることを示している。

「……どこに行くの？」

省吾は背後からの声に振り返った。そこには、全裸の女性がベッドで寝そべっていた。

白い柔肌に残る縄や蠟燭の後を撫でながら、女性は言った。

「久しぶりに堪能したわ、ご主人様♪」

省吾は片頬を吊り上げて答えた。

「まったく、夜中に主人を呼び出す奴隷ってのはどうなんだ？」

「仕方ないでしょ、1週間ぶりに日本に帰ってきたのが深夜だったんだから。実際、見た目ほど華やかな商売でもないのよ、キャビンアテンダントって。完全な労働者^{ブルーカラー}ね」

女性は豊満な胸を隠しもせず、身体を起こし伸びをした。

「会社に出したら午後は暇だから、これからデートしましょうよ」

「悪いけど、パス」

「なにか用事があったかしら？ 暇な身分でもないのは知ってるけど」

「これでも学生なんだよ。これから学校でお勉強」

女性は、端正な顔を歪めて笑みを作った。

「『狂犬』、三崎省吾の言葉とは思えないわね」

省吾は女性に背を向け、首だけで振り返って言った。

「高校生だからね。案外楽しいぜ、青春ごっこ」

その言葉に呆然とする女性に片頬を吊り上げると、省吾は出口に向かった。

背後では、女性の馬鹿笑いが聞こえてきた。

「エッチな言葉を言ってみようちゅわ~~~~~!」

「「いえー!」」

教室の片隅で無駄にテンションの高い声が響き渡った。ひとり状況についていけない朝比奈悠樹は、隣にいる小太りの男の袖を引いた。

「ね、ねえゲン。なにが始まるの?」

小太りの男、高坂源一郎は悠樹の手を払いのけ、やはり無駄に高いテンションで答えた。

「知らん! とりあえず盛り上がってけ! 元気にな!」

悠樹は、理由もわからないまま、一度頬を叩いて気合を入れると、大声で叫んだ。

「いえ~~~~~!」

「お、チビすけも乗ってきたっちゃね。よし、じゃあ一発目は高志、いくっちゃ!」

「いエッサー!」

細長い学生、木下高志はセミロングの茶髪を掻き上げて敬礼すると、唇を窄めた。

「ほ、ほ、ほ……」

「ほ?」

「ホッチキス……」

「きたっちゃ~~~~~!」

「おま、一発目からホッチキスカよ!」

「? ねえゲン。ホッチキスがどうかしたの?」

「ばっか! ホッチキスだぞ! キスキス!」

「?? キスう？」

眉間に皺を寄せる悠樹。まるでついていけないのに流れはまるで止まらない。

「次はゲン、いくっちゅわ〜！」

「よし、てめえら腰抜かすなよ！」

「よしこい！」

「??? ヨシコイ！」

悠樹はなんとかついていこうと高志に並び、源一と対峙した。

「……ヴァインダー！」

「ぶあいんだ〜〜〜！」

「鬼下品だろそれ！」

「はあ？ ばいんだ〜？」

無駄に盛り上がる男^{ばか}3人。悠樹はひとりぽつんと取り残されていた。

「ちょっとゲン〜！ なんでヴァインダーがエロいんだよ！」

「おまえ、カマトトぶってんじゃねえよ！ バインダーだぞ！ バインボインのバインダーだぞ！」

源一は胸の前で両手でお椀を作った。悠樹はその手を叩き落とし、むくれっ面を作った。

「もう！ ぜんっぜんわかんない！」

「ったく、このエロさがわからないとは本当にガキンチョだな」

源一は悠樹の肩を掴んで後ろを向かせると、そのまま抱きついた。悠樹は、一瞬呆けたような顔を見ると、そっと源一に寄りかかった。

「よっし、くそデブ！ 本命いけ！」

「鬼エロいのを頼むぜ！」

「よし、いくっちゃよ！」

悠樹は緩みそうになる頬を押さえて、篠岡^{くそデブ}賢治を見上げた。

そして、賢治はパンドラの箱を開けた。

「……万華鏡！」

「「ぐはッ！」」

瞬間、高志は鼻を押さえてうずくまり、源一は悠樹を抱えたまま後ろに倒れた。

「うにゃん！」

悠樹はじたばたと暴れて源一の腕から逃れて立ち上がると、やり遂げた感のある満足そうな賢治の顔を見上げた。

「ちよっとケンジ！ 万華鏡ってなんだよお！」

「さすがにこれは説明できないっちゃ〜♪」

「バークシャーのくせに生意気だあ！」

悠樹はおもいきり賢治の腹（蓄積志望）を殴りつけるが、賢治はうるさげに悠樹を手で追い払うだけだった。

「……さすがだ、賢治。変態度も半端じゃねえ」

「……鬼すげえな。まさか、万華鏡を出してくるとは思わなかったぜ」

「それで、チビすけはどんなエロ単語を披露してくれるっちゃかな？」

「え、ボク？」

急に話を振られて、悠樹はたじろいだ。いつの間にか、源一、高志、賢治の視線は悠樹に集まっている。

悠樹は、殴りつかれて弾んだ息を整えるために軽く深呼吸すると、言った。

「よっし、言うぞ！」

「どんとこいっちゃ！」

いつの間にか、教室中が静まり返っていた。今まで無関心だった全員が、悠樹に集中しているのだ。

一瞬の静寂、悠樹は、言った。

「のどちんこ……」

「……」

誰もなにも言わない。その反応が不満だったのか、悠樹は声量を上げてもう一度繰り返した。

「のどちんこ！」

源一は重いため息をつき、高志は天を仰ぎ、賢治は顎肉を揺さぶらせながら肩を竦めた。

「な、なんだよ、そのハンノー？ のどちんこだよ！ えろいだろう？」

「どこがエロいんだ？」

「変な形のど根性大根のぼうがよっぽどエロいっちゃ」

「さすがに、のどちんこは鬼エロくないな」

「君たち、ゼツタイおかしいよ！ なんでのどちんこがエロくないんだよおおお！」

「いやあ、あれは毎日見るだろ？」

「鬼見慣れてるよな」

「……毎日みるっちゃか？」

「見るだろう。小便するときとか」

「……………」

「……………」

「？？なあに、この沈黙？」

再び話についていけない悠樹。話が噛み合わない賢治と高志、源一。

教室中に広がる意味不明な緊迫感、それを打破したのは、開け放たれた扉だった。

「おっす、って、なんかあったのか？」

教室に入ってきたのは、片耳にピアスをつけた長身の男だった。

悠樹は、重苦しい空気を掻き分けて長身の男のもとまで走った。

「ショーゴ、ショーゴ！ のどちんこってえろいよね！」

長身の男、三崎省吾は思わず噴き出してしまった。

ほんの数時間前までの情事と今この瞬間の落差、これだけでもデートを断って登校したかいがあるというものだ。

「民放なら自主規制くらいにはなりそうだな」

「ほーら！ やっぱりえろえろじゃないか！」

悠樹は勝ち誇った顔で賢治たちに言った。

「省吾、あんまりがきんちよは甘やかすもんじゃないっちゃよ」

「ああ、気をつけておくよ。よう、高坂。今日は初めて会うな」

省吾は高坂源一郎の隣の席に座った。源一は、省吾に視線を合わせずに応じる。

「こんな時間に登校とは大した身分だな」

「ノブレスオブリージュってやつだよ。それでも苦労してるんだぜ、人間関係にな」

「面倒くさいやつだな。中学で懲りたんじゃなかったのか？」

「まあな。だから注意してるよ、親友に彼女をとられないようにな」

源一は、顔を動かずに横目で省吾を睨んだ。

省吾は、片頬を吊り上げたまま源一の眼光を受け止めた。

2人は、同時に笑い出した。低く、深い笑い。

悠樹は、おもいきり頬を膨らませると源一と省吾の間に割って入った。

「ちょっと、ゲン！」

「おお、なんだよいきなり」

「げーんー！」

「だからなんだってんだよ」

省吾は声を上げて笑い、それから源一の肩を揺する悠樹に向き直った。

「悪かったな、朝比奈。せっかくおまえが高坂と仲良くしてるのを邪魔して」

悠樹は、剛速球どストレートで硬球をぶつけられたように源一か

ら弾けた。

「ん、ななななな！ カタミミピアス！ 君はなにをいーだすんだ！」

「慌て過ぎだっちゃろ」

「顔が鬼赤くなってるな」

爆笑する不良、きゃんきゃん喚くチビ。デブとハゲは冷静に突っ込みを入れる。チビデブの源一は、大きなため息を吐いた。

「おまえ、そんなことを考えてたのか？ 女々しいやつだな、おっと！」

「せや、せやあ！」

悠樹はちっちゃな拳で源一を殴りつけるが、源一はイスに座ったまま体捌きのみでそれをかわした。

「女々しいといえば、ゲン、知ってるっちゃか？」

「なにがだ？ おっとあぶねえ」

「うちの学校、女子がひとりいるらしいっちゃよ」
ぴたりと、悠樹の動きが止まった。

ここ、私立風見鶏学園は共学だ。だが、それは体制上のことであり、ただひとつの例外を除いて、男女比は100対0、つまり、女子はいないはずだった。

その例外が朝比奈悠樹だった。もしこの学校に女学生がいるのなら、それは、生物学上女である悠樹のことになる。

だが、源一の言葉は悠樹の想像を超えていた。

「ああ、知ってるよ。3年の逢坂先輩だろ？ 俺と三崎は以前生徒会に挨拶に行ったときに会ってるよ」

「あの人は美人だったな。確か、生徒会の副会長をやってるんだよ」

悠樹は慌てて高志の顔を見た。悠樹を女だと知っている高志は、悠樹と同じように困惑した顔を浮かべていた。

「な〜んでそんな大事なこと黙っていたっちゃか！ よっし、高志、

悠樹！ 俺たちもオナゴ見物に行くっちゅわゝゝ！」

腹をたぶんたぶん揺さぶらせて教室を出て行く賢治。困惑したまま賢治の後を追う高志と悠樹。源一は、ゆっくりと重い腰を上げた。「なんだ、高坂。おまえも行くのか？」

源一は一度動きを止めると、省吾に向き直った。

そして、その日初めて省吾と目を合わせると、歯を見せて笑った。「ノブレス・オブリージってやつだよ。面倒な人間関係のな♪」

省吾は目を大きく見開くと、片頬を吊り上げて教室を出て行く源一の背中を眺めた。

5月オープニング（後書き）

掲載しておいてなんですが、5月編はこれだけで、次回は予定通り6月編になります。5月は、放送部の設立、3年との対決、悠樹の女ばれ、源一と省吾の友情パワー発動、そして、ラスボス野々宮千秋（男）の登場などイベントは目白押しなんですけどね。ただ、6月には、彼女が出ます。皇へきる、悠樹の幼馴染です。ぶっちゃけ男だけの話に飽きてきましたし、彼女を出さないと短編が書けませんから……。

悠樹と愉快な仲間たち1

長く降り続いた雨がようやく止み、曇天を切り裂いて陽光が地上に突き刺さっている。

その景色を少女は、窓際の席で頬杖をついて眺めていた。

絵になる光景だった。

柔らかい栗色の髪を後ろでまとめ、憂いの籠る眼差しを外に向けて少女は、さながら、童話の1シーンを切り抜いたように、美しかった。

いくつかの問題点はある。

例えばここが全寮制の私立高校、風見鶏学園の教室であるのに、どうひいき目に見ても小学校高学年にしか見えない少女が、誰に批判されるでもなく、自然と席に陣取っていること。

さらに言うなら、少女の格好が、半袖のワイシャツに赤いネクタイ、紺のスラックスというこの学校の男子学生服を着ていることなどだ。

少女は露で濡れた窓ガラスを細い指で撫でると、机に突っ伏した。梅雨の合間のエアポケットのような天気。せめて、下校時間まで雨が止んでいてくれればいいのだけど……。

少女はそんなことを思いながら首だけを横に向けて灰色の低い空を見上げた。

小さな鳴動が聞こえた。

その音はだんだんと大きくなっていき、少女のいる教室の前で止った。

少女にはその音がなんであるかわかっている。
喜びを浮かべ、少女は視線を窓の外から教室内に移した。

大きな音を立て教室に入ってきたのはメガネをかけた少年だった。
160センチに満たない身長とそれに反比例するように広い肩幅。
XLのシャツは半袖であるにも関わらず少年の肘をすっぽりと隠
してしまっている。

小兵力士こひょうりきのような体型を持つ少年は、足音を怒らせて少女の前まで
進んだ。

少女は、溢れるような笑顔で少年に言った。

「デン、おはよ〜♪」

少年はそれには答えず、大きく右手を振り、下からえぐるように
伸ばした2本の指を、少女の鼻の穴に突き刺した。

鼻を塞がれ少女の息が詰まった。

笑顔のまま少年の顔を見て、そのまま視線を落とし、自分の鼻に
突っ込まれている少年の無骨な指を見る。

……一瞬の静寂。教室中に少女の悲鳴が木霊した。

「ぴぎゃあ〜〜〜！」

少女は両手をばたつかせてやっとの思いで少年の指から逃れる。

「あ、朝からなんてことするんだ！」

少女は涙目で少年を睨んだ。

少年は憮然とした顔で少女を見下ろした。

少年の名前は高坂源一郎こうさかげんいちろう。一応、この物語の主人公である。

源一は意図的に押し殺した声で少女に言った。

「ユウ、俺に言うことがあるだろ」

少女は下唇を噛んできっかり1秒ほど考え、ほんわかした笑顔で源一に言った。

「今日の放課後だけどさあ……、あた」

源一に頭を叩かれた少女の名前は朝比奈悠樹。あさひなゆうき

生徒数400人ほどの風見鶏学園で唯一の女子生徒だ。

見た目は幼いが、れっきとした高校1年の悩み多き女の子だった。「おまえ、昨日俺の部屋に遊びに来て勝手に色本を持っていただろ！ さっさと返せ！」

源一にそう言われて悠樹はおもいきりむくれ顔を作った。

「ないよ。だって捨てちゃったもん！ あっははは、昨日の雨でぐちよぐちよだ。もう読めないね！」

源一は悠樹の首根っこを押さえつけるとこめかみに拳を当てた。

「いたいたい！ ぐりぐり痛い！」

「まったく、おまえって奴は、人の色本を、勝手に、処分、しやがって！」

じゃれあうように身体を密着させる源一と悠樹。外から見れば微笑ましい光景だが、本人たちは必死だった。

「おうっす、2人とも。なんか鬼賑やかだな」

「なんだ、チビすけ。朝からゲンに苛められてるっちゃか？」

声をかけてきたのは、対象的な2人だった。

ひよろりとした茶髪のロン毛は木下高志。きのしたたかしでっぷりした超肥満は篠岡賢治。しのおかけんじ源一たちと同じAクラスの仲間だ。

高志は「鬼」という形容詞が（渋谷で）流行っていると信じており、また、賢治の語尾につける「ちゃ」は、方言ではない。賢治いわく「キャラ作りのためだっちゃ」ということになる。

2人とも、風変わりな友人だった。

悠樹はやつとの思いで源一の腕から逃れると、荒い息を吐きながら賢治の巨体の影に隠れた。

「なんだよ！ あんな本読んでるのが悪いんだろ！ フケンコーなんだよ第一さ！」

源一は悠樹を捕まえようと手を伸ばすが、悠樹は今度は高志の影に隠れる。

「なんだなんだ。そろそろなにがあったかリーダーに話すっちゃ」

「別におまえはリーダーじゃないけどな」

悠樹は小型犬のように唸り、賢治と高志に源一の罪状を訴えた。

「ゲンってば、色本なんて隠れて読んでるんだよ！ それを捨てたらギャクグレして怒ってんの！」

「……あゝ、ユウ、捨てちゃったんだ」

「まったく、男心がわかってないっちゃね」

「はあ？ なんで？ ボクがワルモノなのお？」

無然として賢治と高志に向かう悠樹。高志は困った顔をして悠樹を諭した。

「えっとな。男子ってのはそういう本を読むものなんだよ。だからゲンだけが鬼ってわけじゃないんだよ」

「色本は全ての男子にとって夜の親友だっちゃ」

「そんなわけではないだろ！ あ、そうか。ボクわかつちゃった！ 君たちはモテナイズだからそうやって自分たちのことを慰めてるんだろ。あつははは！ ごめんね、君たちみたいなレットーシユは薄暗い部屋で色本を読んでるのがお似合いだよ♪」

「……こいつ、むかつくっちゃね」

「ああ。鬼むかつくな」

男たちは共通の敵を持つことによって団結する。だが、その団結はガラスのようにもろく、簡単に砕け散るものだった。

「もっとも、俺はおまえらと違ってモテるっちゃけどな！」

「なに言ってるんだ、この豚野郎。おまえがもてるわけがねーだろうが！」

「とりあえず痩せたら？　ま、ぶよっちょ星人には無理だろうけどね！」

「むきー！　ちびどもがああ！」

悠樹はいつの間にか源一の隣に並び、賢治を罵る。

「その点、俺は痩せてるし、背もそこそこあるから普通にモテるけどな」

「……高志は無理だろう」

「うん無理だね」

「高志はハゲだっちゃからな！」

3人にそう言われて高志は広い額を押さえて大きく仰け反った。

悠樹と愉快な仲間たち1（後書き）

どうもご無沙汰です。

最近は「ゾンビもの!」というのを書いていて、これはおろそかになってました。

ゆっくり投稿していきますので、たまに読んでいただければ幸いです。ごさいます。

悠樹と愉快な仲間たち2

毒気を抜かれた源一は、自分の席に座った。

悠樹は源一に後ろから抱きつき、顎を源一の肩に乗せた。

源一の鼻先を柔らかい猫っ毛と甘い匂いがくすぐる。

朝比奈悠樹がその口の悪さにも関わらず周りから好かれているのは、その体格から来るちびっこ体質以上に、本気で怒ったすぐ後に全てを流して甘えてくる、その爽やかな性格によるところが大きかった。

「ほんっとーに君たちはもてないねえ。その点ボクは「ぶわっくしゅ！」にゃー！」

源一のくしゃみに悠樹はもんどり打って倒れた。

「び、びっくりするだろ！ 急にくしゃみするなよお！」

文句を言いながらも悠樹は立ち上がると再び源一に後ろから抱きつく。

「まあ、悠樹の家は鬼金持ちだからなあ」

「結局金だっちゃか。このお金チビが！」

悠樹が、日本で息のかからない会社はないとまで言われる巨大組織群朝比奈家の直系の人間だということは、校内では有名な話だった。

なぜそんなお嬢さま（？）がこんな男ばかりのムサイ学校に通っているのかというと、「おジョーさま学校でスカートなんか履きたくなかった！」かららしい。

ちなみに悠樹が男装をしているのは、父親に跡取りの嫡男として育てられてきた経験があるためだ。

源一たちにまるで女の子扱いされないのは悠樹自身が男として

振舞っているそう言った事情があるからなのだが、かといって、まるっきり女の子扱いされないことに疑問を感じるところが性同一性障害ではない悠樹の複雑なところだった。

「……がぶ」

「痛えええ！ ユウ、なにいきなり噛みついてんだ！」
なにを考えたのか、悠樹はいきなり源一の首を噛んだ。

源一は立ち上がって悠樹を振り落とそうとするが、悠樹は両手両足、そして噛みついた口で源一にしがみついて離れない。

「ふんだ！ ゲンなんてモテナイズの筆頭なんだからね！」

「ゲンはチビだっちゃしなあ」

「鬼デブでもあるな」

「メガネかけてるしね！」

源一は悠樹を背中によろ下ろしたまま机に腰を下ろし、余裕の表情で短い前髪を払って見せた。

「ふっ、俺はおまえらと違って中学のときに交際歴があるけどな」

「ふられたっちゃけどな！」

「鬼寝取られたけどな！」

「カイシヨナシ〜！」

奇声を上げて暴れる源一。

源一が中学のときに親友に彼女を取られたのは学校中で知らぬもののいない話だった。

そんな甘酸っぱいトラウマ（弱み）にためらうことなく塩を塗りこむ賢治たちは、源一にとって、とっても素敵な親友だった。

ゆっくりと、教室の扉が開かれた。

その瞬間に教室中が静けさに包まれる。海千山千のAクラスにおいて、注目を一身に集めるだけのカリスマ性（存在感）が男にはあった。

教室に入ってきたのは、長身の男だった。短髪を金色に染め上げ、

右耳にピアスをつけている。

男は、あくびを噛み殺すと、肩に担いだバックを机に置いた。

「ショーゴ、おはよ〜」

源一の肩に担がれたまま、逆さ吊りの状態で悠樹は男、三崎省吾みさきしょうごに言った。

「ああ、ユウ、おはよう。またゲンに苛められているのか？」

ユウは手足をばたつかせて源一から逃れると、省吾に向かった。

省吾の目を見て視線を下ろす。再び視線を上げて足元まで見下ろす。

「？　なんだなんだ？　なんか付いてるか？」

「うるせえ、モテ男！　こっち来んな！」

源一にそう毒づかれて省吾は肩をすくめてみせた。その余裕の態度に源一は奥歯をかみ締めた。

悠樹は源一に向き直り、賢治、高志と眺めて源一の顔で視線を止めた。

「うん、ショーゴはもてそうだね。色本なんて読んでるゲンなんかとはオーチガイ、あた」

Aクラス内でモテナイズ代表が源一ならば、モテメンズ代表は省吾だろう。

省吾はモテメンズの仲間に軽く挨拶を返すと源一の隣の席に腰を下ろした。ちなみに悠樹の席は源一の真後ろ、悠樹の隣が高志で後ろが賢治になる。

「ねえねえショーゴ、聞いてよ！　ゲンったら色本読んでるんだよ！　ケンジとタカシはそんなの当たり前前ってゆーんだよ！　おかしいよね！」

「……ああ、それはおかしいなあ」

一瞬の戸惑いを悠樹は気付かなかった。基本的に省吾はフェミニストであり、その辺りにモテメンズである理由の一端があるのだろう。

「ほくら！　やっぱり君たちがオカシーんじゃないか」

悠樹は源一の肩に顎を乗せて満足そうに頷いた。

源一は悠樹の小さい頭を掴み、即頭部を擦りつけた。

女の子である悠樹に暴力的懲罰を繰り返す源一はフェミニストではなく、当然モテナイズだった。

「痛い痛い〜！」

「だけどユウ。色本ぐらい許してやれよ。そういうのは趣味の問題だからさ」

「もう遅いよ、だって捨てちゃったもん！　いいい、痛いってば〜！」

必死になって源一の腕から逃れた悠樹は、手串で髪を整えると、そこが定位置であるように源一に後ろから抱きついて顎を肩に乗せた。

「ふうんだ、やっぱりね！　君たちみたいにイカガワシ〜本を読むのはモテナイズだからだね！　ショーゴみたいにモテマンだったら必要ないもん！」

悠樹は自信満々の目を省吾に向けた。省吾は、ついと、目を逸らした。

「省吾、言っておくけど、おまえに借りてたマニアっ娘クラブ増刊号も一緒に捨てられたからな」

「……えっ、おま、あれもう非売品……、え〜〜」

がっくりとうなだれる省吾。それでも一瞬後には立ち直って悠樹に疑問を感じさせないのは大したものだった。

「それでそれで、ショーゴはこれの中で誰がマシだと思う？」

悠樹のその言葉で、モテナイズの3人は凍りついた。

それぞれのの中では自分が一番モテることになっている。それが、エキシビジョン非公式とはいえ、崩される可能性があるのだ。

3人は、話自体に興味が無いフリをしながら、耳を省吾に傾けた。省吾は源一、賢治、高志の順に見比べた。

チビ（大）、デブ（三）、ハゲ（元）。見事にツモっていた。

悠樹と愉快な仲間たち3

「あゝ、あまり言いたくないな。誰って言っても角が立ちそうだ」
ほっと胸を撫で下ろす3人。悠樹だけが不満顔で省吾を見た。

省吾は意地の悪い笑みを浮かべて悠樹に言った。

「じゃあユウは誰がモテると思うんだよ」

「え、ぼ、ボク？」

源一は背中越しに悠樹の鼓動が早くなっているのを感じた。それと同時に首にかかった悠樹の細い腕が絞まった。

「ボクは、その、ゲンがいいと、思うけどな……」

顔を真っ赤にして言った悠樹の告白は、しかし、源一には届かなかった。緊張のあまり力を入れた悠樹の腕は、きっちり源一の頸動脈をせき止めていたのだ。

「……ユウ。そろそろゲンを開放しないと、鬼やばいぞ」

「顔が紫になってきたっちゃね」

「ふえ？ うわあああ！ ゲン、どうしたの！」

慌てて源一から離れる悠樹。源一はむせながら立ち上がって悠樹のちっこい頭に人差し指を立てたゲンコツ（一本拳）を落とした。

「殺す気か！」

悠樹は悲鳴すら上げられずに頭を押さえてしゃがみ込んだ。

「ところでゲン、今日の夜、空けといってくれよ」

「あん？ なんだよ」

「この間、ツーリングで一緒だった姐さんいただろ？ おまえを後ろに乗つけた人」

「ああ、あの人がどうした？」

「今日あの人のライヴがあるんだよ。それでおまえを連れて来いってよ」

「へえ、それは是非いかないと……ぐふお！」

突然顎を突き上げられ、源一は大きく仰け反った。勢いよく立ち

上がって源一の顎に頭突きを喰らわせた悠樹は、顎を押さえてうずくまっている源一に人差し指を突きつけた。

「ちよっとゲン！ 今日の放課後はボクと一緒にスイーツバイキングに行くって昨日約束しただろ！」

「あゝ、悪い。先約があるなら俺のほうから断っておくよ……」

顎を押さえながら立ち上がった源一は、手で省吾の言葉を遮る。そして、ぶんむくれの悠樹に言った。

「別にそんな約束してねーだろうが！ あれはおまえんちのホテルでそういうイベントしてるって話で今日行くなんていつてなかっただろうが！」

「別にボクんちじゃないもん！ ボクが株式を6割持ってるだけだもん！」

まるで猫の喧嘩のように唸りあうチビ2人（源一と悠樹）。教室内では、もはや、見慣れた光景だった。

「だいたいスイーツなんて甘ったるいもん食ってられるか！ そういうのは賢治と行け！」

「おう、どうしてもって言うなら一緒に行ってやっても……」

「うっさいデブリンマン！」

一刀両断。話に入ろうとして斬り捨てられた賢治を高志は慰める。

「……正直、こういういちやつき方が見ているほうとしては一番むかつくっちゃ」

「ああ。夫婦喧嘩は犬も食わないってな」

賢治と高志のため息を無視して、源一と悠樹の痴話喧嘩は続く。

「だいたいさあ！ ゲンはいっつもショーゴと遊んでばかりでボクのことほったらかしじゃないか！」

「はあ？ おまえは鬱陶しいほど俺の側にいるだろうが！」

「うっと……、うっとおしいってなんだよ！ それに先週の日曜もショーゴと遊びに行ってただろ！ あの日、ボクは寂しくゲンの部屋で不貞寝してたんだぞ！」

「おまえは、また勝手に人の部屋に入ってたんだな！」

「だいたいショーゴもショーゴだよ！　いつつもゲンと一緒にでさ！
ホモか君は！」

「いや、俺はバイ……」

「しゃらっつぷ！」

「イエスマム！」

「ユウの奴、今度は省吾に当たりだしたっちな」

「女は浮気した男より、浮気させた相手の女を鬼恨むって言うけど、それと同じか？」

「まあ、そろそろホームルームが始まるから止めるっちゃかね」

「ああ、そうだな」

今まで傍観を決め込んでいた賢治と高志は動いた。

きょうきょうんと省吾にまくし立てる悠樹に、賢治は後ろから肩に手を置いた。言葉を途切れさせ、悠樹は後ろを向いた。

瞬間、賢治は悠樹に抱きついた。

「ぎにゃっ！」

「むははは！　チビすけは騒ぎすぎだっちゃ！」

「くさいくさい！　暑いし臭い！　むっれーるー！」

悠樹は賢治の肉布団に全身を埋もれさせた。もし、賢治がハケを持っていたら、塗り壁よろしく悠樹は賢治の身体の中に吸収されてしまったことだろう。

はじめはじたばたともがいていた悠樹は、次第に大人しくなり、やがて動かなくなった。

賢治が手を離すと、気力尽きた悠樹は半目を開けて床に転がった。

「……あゝ、賢治。一応助かったって言うておくよ」

「ゲンももう少しチビすけの教育に気を使っちゃ」

「ああ。しかし、出会ったときからこいつは遠慮してもんを知らなかったが、最近はなんか節操がないな。どうしたんだ？」

頭の上に「？」を浮かべる源一。エクトプラズムを口から出している悠樹。他の3人は心の中でため息を吐いて悠樹に同情した。源一の「甲斐性なし」の称号は伊達ではないのだ。

「それで、省吾。ライブは何時からだっちゃ？」

「えっと、確か8時から。駅前のジャズバー。知ってるだろ？」

「へえ、ロックじゃないんだ」

「それじゃあ放課後はユウに付き合っすういっつバイキング。その後にライブに行けばいいっちゃよ。ゲン、わかったな！」

「……賢治に仕切られてるのがむかつくが、まあ、わかった。それでいいよ」

「これで大岡裁きは終わりっちゃ。ほら、クソチビ。いつまでも寝てないで起きるっちゃ。そろそろホームルームが始まるっちゃよ」

「生演奏は久しぶりだな。やっべ、俺、鬼楽しみになってきた！」

「俺もすういっつバイキング楽しみっちゃ。今日の昼は少し軽めにしとくっちゃ」

源一と省吾、そして、膝をふるふるさせながら机に寄りかかって立ちあがった悠樹は顔を見合わせた。

「なんだ、おまえらも来るのか？」

「なあ、高志に賢治。俺が誘ったのはゲンだけだぞ？」

「ボクだって誘ったのはゲンだけだよ」

「またまたあ。本当は俺たちについてきて欲しいくせにっちゅあ」

「まあ、俺たちはおまえらの保護者みたいなものだからな」

「いらないうらない！ ついてくんないよお！」

悠樹は賢治の下腹部をペチリと殴りつける。賢治の腹は盛大に揺れたがそれだけだった。

「つく！ なんて脂肪だ！」

「ふん、ちびっ子に殴られたって痛くも痒くもないっちゃ」

軽くあしらう賢治をピチペチと殴り続ける悠樹。

源一は頬杖をついて賢治と悠樹のいつもの光景を眺めた。省吾はバトルモテメンズのグループのところに行き、高志は席に戻って油紙で自

分の広い額を拭っている。

「……平和だねえ」

源一は窓の外に視線に移した。灰色の雲の間から青空が控えめに自己主張をしていた。

悠樹と愉快な仲間たち3（後書き）

こんばんは、どぶねずみです。

まずは地震で被害に遭われた方にお見舞い申し上げます。

さて、今日はわが心の師匠、伊集院光の生ラジオが中止になりました。

震災情報が重要なのは当然ですが、こういうときこそ笑いも重要だとどぶねずみは考えています。

阪神大震災のとき、宮川賢はあえていつもどおりのお笑いラジオをやったそうです。そのとき、瓦礫の下で聞いていた人がすごく励まされたと聞きました。

どぶねずみごときが伊集院光の代わりが務まるとも思っていないませんが、短い駄文の中、クスリとでも笑っていただけたのなら幸いです。

出会い、再会、チーズケーキ

放課後、源一たちは駅前で待ち合わせをした。

正確には1年男子寮に住んでいる男4人と女子寮に住んでいる悠樹。金持ちの特権か、悠樹は広い女子寮にひとりで住んでいるのだ。

男4人は手早く私服に着替えると駅前に向かった。空は低い雨が降らずにすんでいる。

「結局、省吾もスウィーツバイキングに来るんだな？」

「ああ、ライヴまで暇だしな」

「行き先って駅前の無駄に大きなホテルっちゃね。俺、入るの初めてっちゃ」

「ユウってあのホテルの大株主なんだろ？ 金持ちのくせに鬼ケチだよな」

「ケチだから金持ちなんだろ」

そんなことを言われているとも露知らず、噴水の縁に座り込んでいた悠樹は、源一を見つけると力一杯に手を振った。悠樹はオーバーオールにキャスケット帽という格好をしていた。

「げーんー！ こっちこっち♪」

「大声出さなくても聞こえてるって」

とて、と源一たちの側に駆け寄ると、悠樹は男4人を確認した。皮のパンツにジャケツト、赤いバンダナを額に巻いている高志、白いポロシャツにサスペンダーの賢治。TシャツGパンの省吾。源一は黒のジャージ姿だった。

「ゲンー、なんでジャージなんだよお」

「いいだろ別に。楽なんだから」

「今度、夏服買いに行こうよ。ボクが選んであげる♪」

「俺の服は専門店に行かないとないっちゃよ」

「うっさい、ホワイトピッグ！ 白はボーチョー色なんだからデブ

が余計にデブくみえるだろ！」

悠樹は賢治の手からさっと逃げ、源一の腕にしがみついた。

「なあユウ。俺はどうだ？」

高志の質問にユウはついと目を逸らし、省吾を見た。

「うん、シヨーゴはなに着ても似合うよね。ゲンも見習わなくちゃ、あた」

「大きなお世話だ」

「……俺、鬼無視されてないか？」

高志の格好は着飾っていて、金もかけているのがわかるが、なんというか、痛々しいのだ。それを正直に伝えられるほどの話術は悠樹にはなかった。

ちらと省吾を見る。もっとも着飾っていない省吾がもっともオシヤレという皮肉。オシヤレの元は素体だと、省吾は無言で証明していた。

悠樹は源一の腕にしなだれかかったまま、にへらと笑った。

「ねえねえ、ゲン。クレープ食べようよ。チョコバナナのやつ」

「おまえは、俺たちが今からどこ行くとおもうんだよ」

「おそとで食べるクレープは別バラだよ。それに、賢治はもう爆弾焼き食べてるし」

「……あいつはいいんだよ。というか、あいつに突っ込んだら負けな気がする」

源一たち5人はホテルに向かって歩き出した。正確に言うなら源一たち男4人と源一の腕にぶら下がっている悠樹が。

目的地のホテルは、駅から徒歩で10分ほどのところにあった。

1流、とは言わないまでも、フォーマルな格好が主流のそのホテルで、私服姿の源一たちは浮きまくっていた。

「……なんだよ。礼服用なら着替えないで制服で来たのに」

「いーんだよ、別に私服で。えへへ、まだ時間が早いから混んでないとおもうんだけど」

自分のホームステージに源一を連れ込んで嬉しそうな悠樹。源一

は、なにかむかついたので腕にぶらさがっている悠樹を振り落とすことにした。

「ぎゃわん！　いきなりなにするんだよお！」

「いや、なんとなく」

と、奥から背広姿の男3人が源一たちのほうへかけてきた。背広たちは急ブレーキで悠樹の前に止り、90度腰を折ったお辞儀をした。

「悠樹様、お出迎えできずにすいません！　本来だったら社員総出でお出迎えしなければならぬものを！」

「あゝ、いいっていいって。何時に行くってのは伝えてなかったし悠樹はニヘラと笑って床に座り込んだまま手を横に振った。源一は、その悠樹の首根っこを掴んで無理やり立たせると、頭を押さえお辞儀させた。両手をぶん回して暴れる悠樹。慌てる背広。

「ゲンゝ、なんなんだよお」

「おまえは、大人が礼を尽くしてるんだから、真面目に応じろ！」

「わかった、わかったからゝ！」

「ゲンってそういうところうるさいやつだったっけ？」

「あいつ、剣道やってたっちゃる？　そのときに目上に対する態度つてのを躰けられたらしいっちゃよ」

「自分は鬼えばってるくせにな」

源一の手が離れた悠樹はバネのように跳ね上がり、頬を膨らませてキャスケット帽の位置を直した。

「それで、この方達は誰なんだ？　ホテルの従業員さんか？」

「んゝ、知らない」

知らないと言われた背広たちは、手馴れた様子で名刺を取り出し、ご丁寧にも源一たち5人全員に渡した。

ひとりは「支配人」、ひとりは「総支配人」、中心にいる背広は「本社取締役」という肩書きを持っていた。源一には誰が一番偉いのか、そもそも支配人と総支配人の違いがわからなかった。

「もう堅苦しい挨拶はいいから。それより昨日は2人って連絡入れ

てたけど、ちょっと事情が変わって5人になっちゃったけど、大丈夫だよ」

「え！ それは、その……」

「駄目なお？」

悠樹に覗き込むように見上げられ、総支配人の発汗量が急上昇する。

「だ、大丈夫です！ きみ、すぐに厨房に連絡を！」

取締の人に言われて支配人は輪から抜けて厨房に電話をかける。揉めているのは傍目にもわかった。

「よかった、大丈夫だって♪ それじゃあゲン、行こ。確か2階の大広間だったよね」

本来は鴻の間という格式ある名前があるのだが、悠樹は大広間と切り捨てる。総支配人は額に青筋を浮かべながら滝のように流れる汗をハンカチで拭った。

「は、はい。本日は貸し切りにしておりますのでどうぞごゆっくりおくつろぎください」

「貸し切り？ ボク、そんなこと頼んでないよ？」

総支配人は悠樹の目を見ずに汗で重くなったハンカチを4つ折にした。

「あ、はい。待ち合わせの方がそうしてほしいと仰いました？」

悠樹は端整な顔をゆがめた。

「まちあわせえ？ だって今日は本当だったらボクとゲンの2人きりで来る予定だったんだよ。一緒に行くんだから待ち合わせなんてしないと思うんだけど……」

下唇に人差し指を当てて考える悠樹。賢治はそんな悠樹のキャスケット帽を上から驚づかみにした。

「ふん、エロチビが。ホテルにゲンを連れ込んでなにをするつもりだったっちゃか？」

悠樹は賢治の言った意味が分からず、きっかり3秒考えて、顔を真っ赤にした。

「痴豚！ キミはいつつもそんなことばかり考えて、ハツジョー
キカ！」

「チトンってなんだ？」

「恥ずかしい、豚？」

「豚ってどういうことだっちゃあ〜！」

「はん、妖怪三段腹が！ キミなんてフゴフゴブーブーがお似合い
だよ！ 脂身ばかりだね！」

ホテルのロビーで人目もはばからず暴れる悠樹^{チビ}と賢治^{デブ}。おろおろ
する総支配人と取締役（大人たち）。

源一は、高志と省吾に言った。

「……先に行つてようぜ」

「ああ、こいつら、こうなると鬼長いからな」

「悪い。俺はたまにおまえらについていけないときがある」

「気取んな、モテ男。俺だって別にこいつらについていつてるわけ
じゃねえよ」

男3人は男女2人を残して、豪華な絨毯の上を歩いて階段を上る
のだった。

大口を開けて山盛りスプーンを丸呑みにする。

ほくほく顔でゆっくり咀嚼。

悠樹は大満足だった。

そのコンパクトな体型に比例して胃袋も小さい悠樹は、本来なら
大した量も食べられずおなか一杯になってしまいが、今回はスィー
ツをひとさじだけ食べて残りは源一に回すことで様々な種類を食べ
ることに成功したのだ。

源一にしてみれば悠樹の食べ残しを片付けていることになるのだ

が、それでも悠樹が幸せそうに口を動かしているところを見ると、まあ、いいかという気持ちになった。

「ほら、ゲン」

「ああ、サンキュー」

省吾は源一にロシアンティーを渡し、隣に腰を下ろした。

「ここ、けっこう質高いな。今度女連れて来ようかな」

「やめとけ。今日はユウがいるからいいけど、自費で来るってなったら高校生には割高だぞ」

「ま、その辺は大丈夫だろ。俺の女って、経済的に自立してるやつばかりだから」

「今、何人と付き合っているんだよ」

「交友関係って、意識的に規制しないと際限なく増えていくんだよな」

「難儀なやつ。実際100人とか200人となんて付き合いきれないだろ？」

「ああ。だから、俺自身にも今何人彼女がいるかわかんないんだよ。俺にその気がなくても向こうは付き合っている気にいるんだからな」

源一は無言で省吾の頭を殴った。省吾は笑いながらそれをかわす。悠樹は、口をへの字に曲げ、源一の肩を揺すった。

「げん、おはなししないで次のスウィーツ持ってきてよお。ほら、あの杏仁豆腐、メロンを器にしてるやつ」

「うっせえなあ。自分で取りに行けよ。残ったのは喰ってやるから」

源一はそれだけ言う和省吾との話に戻ってしまった。

悠樹は源一の広い背中を一発ぺちりと叩くと席を立った。

広い会場を見渡してみる。

源一と省吾は席に座ってなにやら楽しげに話している。

賢治はホールのままチーズケーキを食べているし、高志はスイーツには飽きたのか、サラダバーでマカロニを取り分けていた。

広い会場で給仕のアルバイトを除けば悠樹たち5人しかいない。

いや、ついさっきまではそうだった。
今は違った。

入り口から、3人の女が入ってきたのだ。

3人の女は同じ服を着ていた。

ベージュのベレーに同色のジャケット。

純白のブラウスの胸元には群青のリボンが巻かれている。

この、着る人を選ぶ服装は、都内でも有名なお嬢様学校、飯床女学院がくいんのものだった。

その制服を着た3人の女子、さらにその後ろには燕尾服を隙なく着こなした20歳前後の男が立っている。4人はまっすぐ悠樹のほうに歩いてきた。悠樹は見覚えのあるその征服に気付いて慌てて源一の影に隠れた。

中心に立つ女は、源一の1メートル手前でぴたりと止ると、座っている源一を不機嫌そうに見下ろした。源一を見る女の中には、どこかしら侮蔑が込められていた。

賢治は左に立つ女を見た。縦横共に、巨漢の賢治をしても見劣りしない巨躯がそこにはそびえていた。

彼女の名前は男衾おとしぶすまひめい姫子。飯床女学院高等部の1年生だ。

高志は右に立つ女を見た。病的なまでに細い瘦躯。おどおどした態度は、その爬虫類めいた容貌と相まって藪の中の蛇を連想させた。彼女は三倉みくら茂美。同じく飯床女学院の生徒だ。

源一は、中心に立つ女を見た。わずかに吊り上った瞳、ウェーブのかかったロングヘアを手入れの行き届いた指先で後ろに払っている姿は、完全無欠のお嬢様だった。源一には、その完璧すぎる様子がどこか危うげに写った。

彼女の名前は皇へきる（すめらぎへきる）。お嬢様学校の飯床女学院においても郡を抜くお嬢様だった。

中心に立つ女、へきるは、悠樹に向き合うために、源一の周りを回る。悠樹はそれを避けるためにやはり源一の周りを回った。状況が理解できずにされるがままの源一。

源一の周りを2周半ほどして、へきるは源一に言った。

「ごめんなさい、私、ユウとお話したいの。悪いけど、どいて頂けるかしら？」

源一は悠樹を見た。悠樹は飛んでいってしまいそうな勢いで首を左右に振った。

「……ユウは嫌だだよ」

へきるは内心歯噛みして、それでも眉ひとつ動かさずに言った。

「ユウ、久しぶりね。心配していたのよ。あなた、いきなり転校してしまったんですもの。公務にも顔を出さないし、電話にも出ないし……、今までどうしていたの？」

悠樹は、おそろおそろ源一の肩越しにへきるの顔を見た。非の打ちどころのない、完璧な微笑を浮かべていた。

「う、うん、久しぶり、へきるちゃん。ここを貸し切りにしたのって、へきるちゃんだったんだね」

「ええ。私もあなたほどじゃないけどこの株券を持っていますからね。あなたがここを使うって聞いて、今日の予定は全部キャンセルして駆けつけたのよ」

悠樹はぼそりと、源一の耳元で「よけいなことを」と呟いた。

ここに至って源一たちにも、この事情が飲み込めてきた。この飯床女子の3人は、悠樹の旧友であり、機会を作って悠樹に会いに来たのだらう。それにしては悠樹が異常に怯えているのが気になるが……。

「なんか、俺たち邪魔みたいだな。席外そうか？」

「ええ、そうしてもらえる？」

「んー！ んー！」

源一が出て行こうとするのを、悠樹は、散歩中そっちには行きたくない駄々をこねる犬のように、全身を使って止めた。

それを見てへきるは、少し声を荒げ、もとい、地が出た。

「ユウ！ はしたない、なにやってんのよ！」

ビクーンと跳ねて源一の影に隠れる悠樹。

大股で悠樹に歩みよるへきるを、源一は止めた。

それに合わせて賢治、高志、省吾も女3人から悠樹を隠すように立つ。

「み、みんなー♪」

「悪いね。あんたがどこの誰だか知らないが、ユウの嫌がることをしようってんなら看過はできないよ」

へきるは般若の形相で源一を睨みつけたが、一瞬後には肩にかかった髪を後ろに払うしぐさをして、余裕の表情を取り戻した。

「勘違いしないでくださいね。私たちはユウとゆっくりお話がしたい、それだけなの」

「今日はヤダ！」

源一の背中に顔をうずめ、それだけを悠樹は言った。

無言で睨み合う源一とへきる。その間に割って入ったのは右に立つ細見の女、茂美だった。

「ねえ、ユウちゃん、私たち、本当に心配していたのよ。だから、少しいいからお話しようよ」

「そうそう、ひめもー、すっごく、心配してたんだじょー♪」

「……自分のことを姫とか言うなっちゃ」

賢治の内に灯る怒りの炎。それに気付いた悠樹は慌てて補足した。
「えっと、あのね。あの子は男衾姫子って名前だから、姫なんだよ」

「ふん！ 俺が世界大統領になったら自分のことを名前で呼ぶ女は3発までグーパンチで殴っていいって法律を作るっちゃ」

「ああ、がんばれよ。俺はおまえに一票、鬼入れるからな」

「もうー、そんなことばっかり言ったら、女の子にもてないぞ」
♪

ピア樽女、姫子はシナを作りながらぶっとい人差し指で賢治の弛んだ頬肉つらみを突こうとした。

瞬間、姫子の顔が消えた。

声を上げる間もなかった。

給仕のバイトも含めて、その場にいる全員が言葉を失った。

賢治が、姫子の顔面に食べかけだったホルのチーズケーキを叩きつけたのだ。

「……」

重力に負けてゆっくりと姫子の顔から剥がれ落ちるチーズケーキ。姫子は、わずかに微笑んだ後、凄まじい形相で賢治の胸倉を掴んだ。

「おまん、いきなりなにしよるんじゃゴラア！」

「ちょ、姫ちゃん落ち着いて！」

「姫子！　なんで関西弁なのよ！」

「へきるちゃん、突っ込むところ、そこなのお？」

賢治も負けじと姫子を掴み返す。

「このマンモスコングが！　ブスがぶりっ子してるんじゃないっちゅわー！」

「賢治！　気持ちは鬼わかるが落ち着け！」

「まだ知り合って間もない女にチーズケーキはやりすぎだ！」

「いや、知り合いでも顔面チーズケーキはまずいだろ」

お互いの同僚に引っ張られて離れる超獣2匹。給仕は黙って、しかし、手に汗握ってその様子を見ていた。

「おい、ここはひとまず引いておいたほうがいいんじゃないか？」

戦略的撤退を促す省吾に源一は頷いた。

「まあ、とりあえずだ……」

源一は賢治の肩を掴み、へきるを見た。

「逃げろー！」

賢治を出口のほうに突き飛ばし、悠樹を抱えて源一は走った。隣には省吾、後ろには高志と賢治がついてくる。

走り逃げる源一の背中越しに、悠樹が小さく手を振っていたのをへきるは確認した。あまりの展開の速さに、へきるは完全に虚を突かれてしまった。それがへきるのプライドに触った。

「面白い人たちね。あれが今のユウちゃんのお友達かしら？」

「あんなの表面だけの付き合いよ！」

「あんのビチグソが！　ぜってえ許さんがらな！」

「姫子、そろそろ戻ってきなさい。地がでまくってるわよ。とりあえずケーキまみれの顔を拭きなさい」

「あ、あら、姫としたことが。いやーん、はずかしーい♪」

へきるは姫子の変わり身の速さにため息を吐いた。へきるも、あの巨漢の男のように姫子にチーズケーキをぶつけたくなった。

「……泰造」

「はい」

へきるに呼ばれて今まで無言だった燕尾服の男が一步前に出る。

「あの用意を。この程度で底を割る連中ならユウも自分で気がついて戻ってくるでしょ」

「かしこまりました」

すぎうちたいぞう

燕尾服の男、杉内泰造は、主であるへきるに恭しく頭を下げた。

出会い、再会、チーズケーキ（後書き）

悠樹の格好は任天堂で有名なあのヒゲのコスプレです。

ジャズバーにて

駅前にあるジャズバーはジャズ通にとってはちょっとした社交場として有名だった。

歴史もあるし週に何度かの生演奏もする。

今日は、その生演奏日だった。

「……で、そろそろ説明しろよ」

悠樹は男4人に囲まれて、縮こまった。源一たちにしてみれば、別に怒っているわけではなかったが、場を壊されてそのまま流すというわけにもいかなかったのだ。

「あの3人はボクの中学までの同級生。おっきい子は男衾姫子ちゃん」

「おとこぶすま？」

「うん、長いし呼びにくいでしょ？ だからみんな姫ちゃんって呼んでるんだ。姫ちゃんは地方銀行の頭取の娘さんなんだよ」

「……あれで姫は詐欺だっちゃ」

「銀行の娘か。偏見だけどなんとなく独善的な感じが鬼それっぽいな」

「それで、細い子が三倉茂美ちゃん。シゲちゃんは周りへの気配りができるすごくいい子なんだよ」

「ああ、あの子は他の2人と違って少し引いた位置にいた気がしたな」

「あの子の家はパーティープランナーってのをやっているんだ。結婚式から政治家の資金集めまで企画立案して実行するの。社員は10人ほどなんだけど年商は30億を超えてるすごいところなんだよ。その家のキョーイクなんだろうね、全体を見渡して状況を把握する能力はボクたちの中でも1番だったよ。参謀役ってところかな」

「それで、あの美人は？」

「ああ、確かに気は強そうだったけどあの中心に立っていた娘は美

人だった、いつてえ！」

男4人はうんうんと頷きあう。悠樹は、口先を尖らせて源一のすねを蹴った。

「あの子は皇へきる。ボクの1番の親友だった子だよ」

「それじゃあ彼女のメルアドを教えるっちゃ」

「モテナイズ！ 節操がないんだよ君たちは！ 言っておくけど、彼女はITSのシャチョー令嬢だからね！」

源一たちの間からほうとため息が漏れた。

インターネットテクノロジースメラギ

ITSは、ITバブル期に台頭した、いわば成金だ。

1代でこの会社を興した社長、へきるの父は、日本のビル・ゲイツとまで言われる人物で、今やITSはインターネット通信に限らず、様々な分野で活躍する日本を代表する企業の1つになっている。源一たちにしてみれば、表には出ずに土地や株などで莫大な影響力を持つ悠樹の朝比奈家より、大企業のITSのほうがわかりやすい金持ちだった。

「それで、そんな親友になんでおまえは怯えていたんだ？」

「あ、うん……。ゲンたちもわかったと思うけど、彼女、すごく強引なんだ。今日みたいにいきなりボクたちの前に現れて一方的に自分の用件を伝えようとしたり」

「ああ、なるほど……」

「でも、向こうはおまえと話したいだけって言ってたっちゃよ」

悠樹はイスに深く腰掛け、ゆっくり首を横に振った。

「そんなわけないよお。ボク、風見鶏学園に進学してから公務とかにも顔を出さなくなったから、直接来たんだ」

「公務って？」

「あゝ、イエノヨウジ？ 法事みたいなもの」

悠樹やへきるが属する上流階級には社交界というものがある。

誰某の慶事のパーティー、あるいは何其の葬式、ほぼ毎日その手

のイベントは行われている。

会ったこともない人の葬式を家の代表として出席しなければならず、そのことを悠樹たちは「公務」と呼んでいるのだ。

「あゝ、ヤダヤダ。またすごい無理言ってくるんだよ」

「すごい無理ってなんだよ」

悠樹は、ちらと源一の顔を覗き込み、ぼそりと言った。

「……飯床女子に戻って来いとか」

「それは、鬼無理だろう」

「無理じゃないんだよお！ 彼女にとっては！」

「ユウは飯床女子に戻りたくないっちゃか？ 言いたかないけど、俺たち、風見鶏学園よりははるかにマシだと思うっちゃよ。ていうより、うちより悪いところなんてそうはないっちゃよ」

「ぜえつたいに嫌！ あそこって、ベレー帽を被る角度まで決まってるんだよ！ おまけに、シुकジヨノミダシナミとか言って化粧を強要されるしさ！ あんなどころで女装させられるぐらいだったら風見鶏学園でコーチョーの嫌がらせに耐えているほうがいい！」

こう言うときの悠樹は、自分が女の子であることを完全に忘れてしまっている。また、それに突っ込みを入れないのは源一たちが悠樹を女の子扱いしていないからだ。

「とにかく、向こうがおまえのことに気を使ってくれているのは、わざわざ出向いてくるくらいだから確かなんだろ？ 一度話してみろよ」

「ゲーン、君はどうして他人事なんだよお！」

「いや、完璧他人事だろう」

「他人事じゃないっちゃ。今日みたいに場を荒らされたらたまらないっちゃ！ 俺は正直すういっつを食べたりないっちゃわ！」

「場を退席しなくちゃならなくなったのは、どっちかっていうとユウよりおまえのチーズケーキのせいだろ？」

「ふん！ あれでもやり足りないくらいいっちゃ。ブスには人権はいらないっちゃ」

「おまえ、最低だな」

「人のことを言えるツラかよ」

悠樹は源一のジャージの袖を引っ張った。源一がそれに気付くと、悠樹は上目遣いで源一に言った。

「ねえゲン。いっしょについて来てくれる？」

「え、やだよ」

「えー、なんでだよお、ひとりじゃこわいよお」

「えーい、寄るな甘えるな！　なんで俺が行かなくちゃならないんだよ！」

抱きついてくる悠樹の柔らかいほつぺたを源一は平手で押し返す。薄暗い店内、ムードあるジャズバーの雰囲気はぶち壊しだった。

「なんだ、ここのテーブルは賑やかだね」

その声に源一たちの騒ぎはぴたりと止った。声の主は、黒いナイトドレスを着た長身の女性だった。

「省吾、源一。今日はわざわざ来てくれてありがとう」

「ああ、姐さん。せっかくのお呼ばれだからね。悪いけど大人数で押しかけさせてもらったよ」

省吾と源一は姐さんと呼ばれた女性と顔見知りらしく、高志と賢治は照れたように下を向いている。

悠樹は、姬ちゃんに対した態度とは大違いだと思った。

「ねえ、ゲン。どちらさま？」

「この間、省吾に誘われてツーリングに行ってきたんだけど、そのとき知り合った人」

悠樹は姐さんを見上げた。落ち着いた、大人の女性だった。姐さんは悠樹の視線に気付くと、穏やかな微笑を向けた。

「あなたがユウちゃんね。源一の彼女の……」

悠樹はこの姐さんを好きになることに決めた。決めたからには挨拶だ。悠樹はキャスケット帽を脱ぐと勢いよく立ち上がった。

「いつもゲンがお世話になってマッス！」

「まあね。いつもお世話してます」

「いつもって、会うのは今日で2回目だろ？　それに、ユウは俺の彼女じゃないよ」

「まったく……、省吾の言うとおり、源一は罪作りだね」

「なんだよそれ。って、なんでおまえらまで頷いてるんだよ！」

姐さんは源一たちのテーブルに着き、談笑を始めた。気さくで話しやすい姐さんに高志と賢治もすぐに打ち解け、テーブルは一段と盛り上がった。

「そういえば省吾、バイクは動くようになったかい？」

「ああ、なんとかね」

「バイクって？」

「50CCのやつ。男子寮の駐輪場に置いてあるだろ？　姐さんからもらったものなんだ。少し壊れてただけけど直して使えるようにしたんだよ」

「あのバイク、省吾のだったっちゃか。省吾は免許持っていたっちゃね」

「ああ。俺は5月生まれだから、先月取った」

しばらく話した後、姐さんはバーテンに呼ばれてステージに上がった。

「おもしろいひとだね」

「今度どこか行くときはユウも誘うよ」

「え、ほんとう？」

頷く省吾に悠樹は喜んだが、一瞬後には複雑な顔を作った。みんなでどこかに遊びに行くのはいいのだが、その分、源一と2人で過ごす時間が減ることに気付いたのだ。

ステージにいる姐さんを見ると、姐さんは、グランドピアノの前で小さく手を振ってくれた。

鍵盤の上を旋律が走り抜ける。演奏が始まった。

最初はジャズに疎い源一たちでも知っているメジャーな曲、それ

からオリジナル曲も含めた数曲を演奏した。ロックのような喧騒ともクラシックのような格式とも違うジャズ独特の雰囲気、源一たちは曲と共に堪能した。

それはラストの曲に入る前の簡単なギグの最中に起こった。

「やめろやめろ！ そんな下手な演奏じゃおひねりはだせねえぞ！」
底意地の悪いダミ声は、カウンターに座っている3人ほどの集団から発せられた。

姐さんはギグを中断して、軽いため息を吐いた。
路上で演奏しているわけではないにしても酒場で演奏している以上、この手の客はこれが初めてではない。

だが、周りの客と同様不愉快にはなるし、場の空気が壊れてしまったのも事実だった。

「やれやれだ。おまえらはけっこうなトラブルメーカーだよな」

省吾は困ったように顔を歪めて源一に言った。省吾にとってトラブルとは面倒ごとではなく、歓迎されるべきちょっとした吉事だった。

「俺たちのせいでもないだろ」

「だといいけど。それで、ゲン。どう見る？」

「目が濁ってないし足元もしっかりしてる。あんまり酔ってないな」

「同感。それに拳ダコがあるな。あれは、空手かな？」

源一は、口汚く罵っている客の手を見たが、拳ダコは確認できなかった。源一は、メガネをかけているだけあり、視力はよくないのだ。

「それじゃあちよつと行ってくる」

「手伝ってやろうか？ もちろん貸しだけど」

「冗談、せつかくのご馳走だ。ひとりで頂くよ」

「……マニアック戦闘狂が」

省吾は片頬を吊り上げると席を立った。そのまままっすぐカウンターの3人組に歩み寄る。

3人の男も省吾に気付き、罵りを止めた。

省吾はそのまま歩き続ける。

なにを言うでもなく、ただ向かってくる省吾に3人は困惑した。眼前の距離、省吾はカウンターに置いてあるブランデーグラスを滑るように掴むと、そのままの勢いでカウンターに座る3人のひとりに叩きつけた。

完全な奇襲だった。

名乗るでも静止するでもない、いきなり剥かれた牙に3人は完全に虚を突かれてしまった。

いくら日頃から武道にまい進していようとも、野試合（喧嘩）には3人は耐性がなかった。

喧嘩ならば、それは省吾の独壇場だった。

省吾はブランデーグラスを叩きつけられて気を失ったひとりを突き飛ばした。

慌てて立ち上がろうとしたひとりは仲間を抱える格好となり、よろけた。

すかさず省吾は殴りつける。

それをかわせたのは修練の賜物だろう。だが、それまでだった。省吾の2撃目は蹴りだった。上から叩き込まれるように繰り出された省吾のつま先は、受けた腕ごと肩口に突き刺さり、床に伏した男はそのまま起き上がらなくなった。

これで、2人が戦闘不能になった。

残されたひとりは動転した。

もしも体勢を立て直して省吾に向かい合ったのならば、あるいは日頃から鍛えていることもあり、勝てないまでもいい勝負ができたかもしれない。

だが、目の前で仲間2人が瞬殺された男は完全に省吾に吞まれてしまっている。

そんな男の取った行動は、幸か不幸か、省吾の予測の範囲外だった。

男は仲間を置いて逃げ出したのだ。

喧嘩の様子を静観していた観客を押し分けながら出口に向かう。

その途上に悠樹がいたのは、省吾に言わせれば「トラブルメイカー」の素養を持っている悠樹の特性のためだろう。

まるっきり他人事を決め込んでいた悠樹は、向かってくる男と目が合い固まった。

まっすぐ向かってくる男の顔に、悠樹の後ろにいた賢治は悠樹のかぶっているキャスケット帽を投げつけた。

男は速度を落とさずに手でキャスケット帽を払いのける。

一瞬だけ塞がれた視界、その足元に高志はイスを蹴りつけた。

イスにもつれてよろける男の前に源一が立つ。

「省吾のマヌケが。へまして打ち漏らしてんじゃねえよ」

「どけえ！」

男は濁声を店内に響かせて源一に殴りかかった。

源一の背は低い。ゆえに打ち勝てると思ったのだろう。だがそれは、大きな間違いだった。

男は腕を振り下ろした。

一瞬の交差、次の瞬間には男は吹き飛んでいた。

源一の体当たりをまともに受けて、数台のテーブルを倒して床に転がった男は、完全に気を失っていた。

源一は軽く息を整えると、ゆっくりイスに座った。

「ゲン、大丈夫？　だいじょうぶ？」

心配そうに体中を触ってくる悠樹の頬つぺたを、源一はつかんで左右に広げた。やわらかい悠樹の頬つぺたは、子猫のようににゅつと伸びた。

「……にゃにしゅるんだよお」

「ばかユウ。おまえはうーちゃんかなんだからああいうときはまっさきに逃げろっていつも言ってるだろ！」

悠樹は首をぶんぶん横に降り、源一の手を払った。そこに省吾が来た。

「わーりいな。一匹逃がしちゃった」

「貸しだからな」

「ああ、借りとくよ。ちょっとこいつら捨ててくるから店で待っていてくれ」

省吾は軽く手を振ると、転がっている男3人を引きずって店から出て行った。入れ替わるように姐さんが源一たちの前にくる。

「ごめんね、源一。なんか面倒なことに巻き込んで」

「気にしてないよ。省吾と付き合っていると嫌でもこういうことには巻き込まれるからね」

姐さんは、柔らかい笑みを漏らした。

「省吾とは逆のことを言ってるね。あいつは、源一たちと付き合っていると厄介事に巻き込まれるって言ってたよ」

「……あいつは、自分のことが客観的に見れてないんだよ」

姐さんは豪快に笑った。それで、殺伐とした店内に穏やかさが戻った。

「ま、ケチが付いたけどゆっくりしていったよ」

「あれ？ もう演奏しないの？」

そう言ったのは悠樹だ。

「さすがに、ね。もう演奏を聞くなって雰囲気でもないだろ？」

「そんなことないよ。だって、ボク聞きたいもん」

悠樹に続いて高志と賢治も演奏の再演を要求する。それは店内に広がって、ちょっとしたアンコールが始まった。

「あんたたち、いい子だね」

姐さんは悠樹の頭に、落ちていたキャスケット帽を乗せると、ステージに向かって優雅に歩いていった。

「どうやら、失敗したみたいね」

ほうほうの態で裏路地まで逃げてきた3人を、女と男が出迎えた。女、皇へきるは男たちに侮蔑した視線を向ける。男たちは、燕尾服の男、杉内泰造に言い訳をした。

「す、すいません師範。でも、あんなやつがいるなんて聞いてなかったから……」

泰造は、軽いため息を吐いた。

泰造は空手道場で師範を務める実力者だった。3人は、泰造の道場に通う、いわば門下生だった。

「いけませんねえ。相手が誰であってもあのような醜態をさらしては」

男たちは頭を垂れる。これ以上言い訳のしようもなかった。男たちは、任務に失敗したのだ。

男たちが任された任務は、店内で暴れる。ただそれだけだった。

もしそれを放置するようなら気概のない男として、悠樹は今交友を持っている男たちを見放すだろう。よしんば止めに入ったとしても、こちらは武道経験者。惨めに返り討ちに合わせて情けない姿をさらすのも悠樹の目を覚まさせるいいきっかけになる。

へきるはそう思っていた。

だが、結果は最悪のものだった。こちらが返り討ちにあってしまっただのだ。

へきるはベージュのベレー帽を人差し指にひっかけて回し、言った。

「ま、いいわ。この程度で底が割れる連中じゃなかったのはむしろ

幸運だったと思います。ユウが数ヶ月の間、つまらない男どもに騙されていたなんて、あの娘の名誉のためにも望ましいことではないもの……」

男たちは安堵のため息を吐いた。自分たちの絶対者は、師範である泰造より、この、完全無欠のお嬢様であることを知っているのだ。

「あ、そうそう、あなた」

へきるは、ふと気付いたように、男のひとりに話しかけた。仲間を残して逃げようとした男だ。

へきるは、指先からベレー帽を弾いた。

回転しながら男の胸元に飛んでいくベレー帽。

それを受け止めようと両手を伸ばしたとき、男の意識は消えた。

ふわりと舞ったスカートは、ゆっくりと裾を元に戻した。他の男にはなにが起こったのかわからなかった、いや、見えなかった。

へきるがぐるりと回った一瞬後、仲間の男がゆっくりと倒れた、男たちにわかったのはそれだけだった。

「お見事です」

恭しく頭を下げる泰造に、へきるはつま先で蹴り上げたベレー帽を乱暴に押し付けた。

「泰造、この男、破門にしないさ。意図はなかろうともユウを脅かした男を飼ってはおけないわ」

「かしこまりました」

へきるはそれだけ言うと、もう用は済んだとばかりに路地裏を抜けた。

へきるの言う破門は、ただ単に道場の出入り禁止を意味しているものではない。

道場に通っている人間は、今回のように突発的な依頼を受けることと引き換えに、少なからぬ拘束金や、軽犯罪程度なら不問にされ

るような様々な恩恵を受けている。

破門にあったものは、それらの恩恵を全て失うと同時に、巨大企業ITSとそれに関係する全ての業務から締め出されることになるのだ。

それは、日本国内では日陰の生活を余儀なくされることを意味した。

へきるは大通りに止っている大仰なリムジンの後部座席に乗り込んだ。

泰造はゆっくりと後部座席の扉を閉めた。そして、自分も乗り込むために助手席の扉を開けた。

そのとき、その視線に気付いた。

視線の主は三崎省吾だった。まるで、肉食獣が獲物を狙うように泰造を見ている。

泰造は、思わず苦笑を漏らしてしまった。舌なめずりの音が、ここまで聞こえてきそうだった。

「……狂犬三崎省吾、か。噂通りですね」

泰造は、省吾から視線を外し、リムジンに乗り込んだ。

雲は低く暗い。だが、今にも降り出しそうな雨は、結局その日は降らなかった。

旧友との再会

その日は朝から雨だった。高坂源一郎は机に頬杖を突いて前を向いた。

「……」

源一の目の前には悠樹がいる。同じように頬杖を突いて源一に向き合って。

「……なんだよ。言いたいことがあるならはつきり言え」

鼻の頭がくつつく距離。悠樹は長いまつ毛を揺らした。

「今からへきるちゃんに会いに行くんだけど」

「ああ、そうか……、で、それがどうした？」

ずいと悠樹は顔を近づける。唇がくつつくまで数ミリの距離。なぜか動いたら負けの気がして、源一はそのまま悠樹を睨みつけた。

なにやら不穏な空気を醸し出している2人は、教室中の注目を集めていることに気付いていない。

「いっしょにきて」

「いやだ」

「……」

即答。悠樹はずいときさらに近づいてきた。源一はたまらずに顔を背けた。結果、悠樹の低い鼻は源一の即頭部にぶつかった。

「あう！」

ステーンと、悠樹は尻餅をついた。少し赤くなった鼻頭を撫でて、悠樹は勢いよく立ち上がる。

「なんでできてくれないんだよお！」

「だって俺、関係ないし」

「ゲンがボクに会いに行けって言ったんだろお！」

ぎゃんぎゃんと言いつつ源一と悠樹（チビ2匹）。見慣れた風景になると、教室の連中はいつものことと帰り支度を始めた。

放課後の一時である。

「そういえば省吾のやつはどうしたんだ？」

話を逸らすために隣の席にいるはずの友人を源一は探した。それに答えたのは、高志だった。

「あいつは昼からいなかったぜ。また早退したんだろ？」

「またかよ。あんにやろうはお盛んだなあ」

「国際線のすっちーやつっている彼女が日本に戻ってきて、呼び出されたらしいっちゃよ」

「……そのスッチーはきつと病氣の子猫でキャッチボールするようになひどいやつに違いない」

「まあ、そんなやつだったらどんな美人だって鬼いやだよな」

「凄まじい負け惜しみっちゃね」

源一は一度こきりと首を鳴らし、鞆を持って立ち上がった。

「天気も悪いし……、こういう日は部屋で不貞寝に限る」

「ちょ、ちよつと待ってよ！　ほんとに来てくれないの？　ほら、この間行つたホテルだからそんなに遠くないよ」

「それじゃあわざわざ送っていく必要もないな。気をつけて行つてこいよ」

悠樹は、教室を出て行こうとする源一のベルトを両手でつかんで引き止めた。

「仕方ないから俺が行つてやつてもいいぜ……おう！」

そう言う高志の膝裏に悠樹はローキックを叩き込むと、源一に人差し指を突きつけた。

「ゲンのバカ！　そんなだからカイシヨナシなんだよ！」

「甲斐性なしは関係ないだろうが！」

「ふんだ！　ゲンなんてきらいだ〜！」

悠樹はダッシュで教室を出て行く。そして、やはりダッシュで戻

ってきた。

「今のうそ！　きらいじゃない！　でも知らない！」

それだけ言うとう悠樹は出て行き、今度は戻ってこなかった。

「……ちびっこのくせになかなか可愛いつちゃね」

「賢治、おまえのロリコンは鬼シヤレにならないからやめとけ」

「ペドは源一だけで十分……ぐっふおお！」

「誰がペドだ」

源一の手首は賢治の下腹部にめり込んだ。マンモスが倒れるように地響きを上げて倒れる賢治。源一は生暖かい脂肪に包まれた拳をハンカチ（悠樹に持たされている）で拭うと、悠樹の出て行った扉を見て賢治と高志に言った。

「おら、いつまで寝てるんだ。さっさと寮に帰るぞ」

どこまでも傲慢に、源一は親友2人に指図するのだった。

通されたのはホテルの最上階にあるスイートルームだった。ノックをする前にドアは開かれ、燕尾服を着た若い男、確か去年からへきるの付き人をしている杉内泰造といったか、に導かれるまま、朝比奈悠樹は部屋に入った。

「いらっしやい、ユウ。さあ、座って」

笑顔で出迎えてくれた旧友、へきるは悠樹をソファに座らせると、自分も対面に座り、足を組んだ。

へきるの格好は、この間会ったときと同じ飯床女子の制服だ。対する悠樹は今日は私服ではなく、風見鶏学園の男子学生服を着てい

る。

「昨日急に電話をくれて嬉しかったわ。あ、なにか飲む？ 泰造、紅茶を」

泰造は無言で頭を下げると、悠樹とへきるの前にティーカップを置いて紅茶を注いだ。

「姫も茂美も会いたがっていたんだけど、今日は置いてきたわ。ユウも私と2人のほうがよかったでしょう？」

悠樹はティーカップを持ち上げた。琥珀色の液体を軽く揺らし、湯気を鼻に当てると口をつけずにテーブルに置く。

「今日は私、学校を早退したのよ。もし渋滞にでも巻き込まれて、約束の時間に遅れたら大変なもの。もちろんユウは気にしないでいいわよ。あなたのためだったらそんなこと大した問題じゃないわ」
悠樹は思わず苦笑を漏らしてしまった。

今日、省吾は彼女に会うために早退した。へきるも、悠樹に会うために早退したという。へきるの行動は、ただの友達に対するものとしては常軌を逸していると思ったのだ。

へきるは悠樹の苦笑を好意と受け取り、泰造に持たせていた書類を悠樹の前に並べた。

「ユウ、この数ヶ月つらいことばかりだったでしょう？ でも安心して。この書類にサインすればすぐに飯床女子に戻れるわ」

ぷはっと、悠樹は噴き出してしまった。もしここに源一たちがいれば、「独創性がない」とひどいなじられ方をしただろう。悠樹はそのまま下を向いて笑いを堪えた。

「……ユウ？」

怪訝な顔をして悠樹を伺うへきる。我慢の限界と、悠樹は勢よく顔を上げソファに深く腰掛けると、部屋に入って初めて口を開いた。

「へきるちゃん、ストレートすぎ！ さすがにもうちちょっとひねらないとまずいんじゃない？」

「う、うるさいわね！ こういうことはストレートのほうがいいと

思ってわざとやったのよ!」

へきるはかすかに頬を赤く染め、視線を悠樹から逸らした。そして、再び悠樹に視線を戻し、微笑を浮かべた。

心に暖かいものが広がるのを感じる。長年親友として付き合ってきた2人だった。ただこれだけの会話で、数ヶ月の断絶は完全になくなっていった。

へきるにはそう思えた。

「うん、変わらないね、へきるちゃん。元気そうで安心したよ」

「ええ。あなたも元気そうね。育ちの悪い猿どもの間でひどい苦勞をしてるんじゃないかって、心配していたのよ?」

「あは、カルチャーショックはいっぱい受けてるよ。いい意味でも悪い意味でもね」

大量の男の中に女の子がひとり。しかも女扱いされない世界で、悠樹の気苦労は見た目以上にあった。しかし、それでも源一たちと過ごす日々は、気取ったお嬢様学校での生活よりはるかに楽しいのだ。

「ごめんなさい。私も高校に入ってばかりの急がしさを理由に、ユウのことを放っておいてしまったわ。でもこれからはまた一緒に学校に通えるわよ」

「あ、うん。そのことなんだけど……」

悠樹は口ごもった。へきるは想像通り悠樹を飯床女子に連れ戻そうとし、想像通りに強引にサインさせようとしている。悠樹は、それをはっきりと断るために、この会見を申し込んだのだ。

「ひょっとして、男子校のカスどものが恐いの?」

「相変わらず口が悪いねえ、へきるちゃん」

「大丈夫よ。私が守ってあげる。あんな下品な連中のことなんて気にすることないわ」

悠樹は気付かれないようにため息を吐いた。

へきるはまるで悠樹の話を聞かず、勝手な想像で話している。まるで話がかみ合っていない。

「へきるちゃん。ひよつとして、ボクが風見鶏学園でいじめにあっていると思っているの？」

「あなたは気持ちのいい娘だから気付いていないのかも知れないわね。この間このホテルに何人か来ていたでしょう？ 確認したけど、その代金、ユウ持ちだったわね。そういうの、世間ではカツアゲっていうのよ」

「……そうかなあ」

「どうせ無理やりここに連れてこられておごらされたんでしょ」

「どっちかっていうと、ボクが無理やり連れてきたんだけど」

「巧妙ね。ユウに気付かれないようにそれとなく金を出させる。詐欺師と同じ類だわ」

それを聞くと、悠樹は表情を変えずにわずかに首を傾けた。

ただそれだけで、へきるは空気が変わるのを感じた。

「ボクはへきるちゃんのことを親友だと思っているよ。でも、それと同じくらいゲンたちのことも大切なんだ。だから、へきるちゃんもあまりゲンたちのことを悪く言わないでくれるかな」

気圧されそうになるのを、へきるは肩にかかった髪を後ろに払うしぐさで払拭した。

「ユウは自分のことに無自覚すぎるのよ。育ちの悪いゲスな男はあなたから出る甘い汁を吸うことしか考えていないんだから」

「偏見だね。少なくともゲンはボクをそんなふうには見ていないよ」

「言い切れる？」

「うん。言い切れるよ」

即答する悠樹。

へきるは人知れず歯噛みした。

へきるは悠樹のことを知っている、いや、知っているはずだった。殴られれば殴り返す。殴られて泣き寝入るような線の細いお嬢様ではないことは重々承知していた。

なのに、いざ悠樹と対峙してみれば、完全に吞まれている自分に気付かされた。

「へきるちゃん、今日ボクが来た理由はね……」

悠樹はティーカップを目線の高さに持ち上げた。へきるの顔を見上げ、微笑を作る。

そして、ティーカップを傾けた。

琥珀色の液体は流麗な線を作り、テーブルに置いてある書類の上で跳ねた。へきるが悠樹の編入手続きのために用意した書類だ。紅茶は書類を伝い、絨毯の上に溜まって大きな染みを作った。

「ボクのこと、気にかけてくれたのには感謝するよ。でも、正直大きなお世話だね。ボクは飯床女子には戻らないしゲンたちと一緒にの学校に通う。ボクが君に伝えたかったのはそれだけ。話は終わりだよ」

悠樹は自分の言いたいことだけを言うと、ソファから立ち上がった。

「ユウ、待ちなさい！ あなた、騙されてるのよ」

「まだ言うの？ これ以上話しても無駄だと思うな。だって、かみ合っていないんだもん」

「いい、ユウ。男ってのはねえ。金と女の体のことしか考えてないのよ！」

違う、と言いかけて悠樹は言葉に詰まった。

源一は、色本を隠し持っていたではないか。しかも、女に不自由していない省吾ですら源一が色本を持っていることを擁護していたではないか。

勝機と見たのか、へきるはソファから立ち上がると、ふふん、と鼻を鳴らした。その後ろでは男であるところの泰造が複雑な笑みを浮かべていた。

「今はまだ大人しくしているかもしれないけど、そのうち本性を表すわ。そうなるからでは遅いのよ！」

「……そんなことないもん」

先ほどの勢いとは大違い、悠樹は、自分の身長と同じように小さな声で小さな反論をした。

「いゝえ！ 男はみんなゲスよ！ もしこのまま今の学校にいたら、必ずユウは傷つけられるわ。私には、それが耐えられないの」

正直自分でも言い過ぎているな、と、へきるは思ったが、ここで引くわけにはいかない。へきるは一気にたたみ込んだ。

「いい、ユウ？ 男っていうのはね、みんながみんな本能でしかものを考えない野獣なの。そんな連中と理性的な付き合いなんてできるわけないでしょう？」

「……ちがうもん。ゲンは確かにスケベだけど……、ちがわないけどちがうもん」

下を向いて俯く悠樹。へきるはやさしく悠樹の肩を抱いた。

「かわいそうなユウ。わかっているのに認められないのね。でも大丈夫よ。私があなたの側にいるから」

へきるは腰を落とし、視線を悠樹に合わせる。

「ユウ、賭けをしましょう。あなたが何度も言うゲンっていう男がどれだけ野獣か私が証明してあげる。もし、ゲンが野獣じゃなかったら、私も安心してユウを任せることにするわ。でも、もしゲンが野獣だったら、あなたは飯床女子に戻ってくる。いいわね？」

「そんな勝手なあ」

「あなたがゲンのことを信頼しているなら、断らないわよね」

悠樹は考えた。この賭けは、かなり分が悪い。源一が野獣でお猿さんなことを悠樹はよく知っているのだ。だが、いや、だからこそ、悠樹は源一を信頼したかった。

「……わかったよ。その代わり、ボクが勝ったらこれっきりにしてよ」

「ええ、わかったわ。賭けは成立ね」

へきるは、楽しそうにゆるやかにウェーブのかかった髪を後ろに払った。

エレベーターを使い、1階ホールに下りる。

悠樹は後悔していた。

実際、こんな賭けに乗る必要はなかったのだ。それが勢いに負けて乗ってしまった。

だんだんイラついてくる。そのイラつきの矛先は、当然のように源一に向かった。

全てゲンが悪い！　なかなかかまってくれなし今日だって一緒に来てくれなかった。

足を怒らせながらフロントに預けた傘を受け取ろうとした、その時だった。

イラつきは一瞬で霧散し、悠樹は駆け出した。

ホップ、ステップ、ジャンプ！

悠樹は、ソファで新聞を読んでいるジャージ姿の男に抱きついた。

「おっもてえ！」

「な、失礼だな！　重いってなんだよ」

悠樹はジャージ姿の男、高坂源一郎の首にしがみつき、膝の上に乗る。

「ねえねえ、なんでゲンがここにいるの？」

「……あゝ、たまたま」

「うそばかり♪　ボクのことか心配で迎えに来てくれたんだろ」

「それはない。ていうか昔の友人に会うだけなのに心配することなんかないだろ」

源一は悠樹をお姫様抱っこの格好のまま持ち上げ、ソファから立ち上がった。

「んふふ♪ でもせっかくなら、行きから一緒に来てくれればよかったのに」

「懐くなうーちゃか。寮に居ても賢治と高志が迎えに行けっとうるさかったんだよ」

悠樹は心の中で賢治と高志に感謝した。

2人には今度ご褒美に角砂糖を食べさせてあげよう！

そんなことを考えている悠樹は、たしかにいじめとは無縁だった。

「ほら、それより帰るぞ、いい加減下りろ」

振り落とすように体を揺さぶる源一。悠樹は、床に足をつけると、くるりと反転して源一の腕にしがみついた。

「そういえばおまえ、傘は？」

「えーっとね、置いてきちゃった」

源一の背後では悠樹の傘を持った支配人が控えていたが、悠樹はジェスチャーで支配人を追い払うことに成功した。

「今日は一日中雨降ってただろ。来るときどうしたんだよ」

「来るときは車だったから」

「歩け！　　ったく無駄遣いしやがって」

「うん！　　今から寮まで相合傘でお散歩だね♪」

悠樹にもし尻尾があったなら、猛烈な勢いで振っていただろう。

源一と悠樹は、ぴったりとくっつきながら雨の世界に旅立っていた。

そんな2人を背後から眺める視線が一对。

へきるは、今まで話していた旧友とこれから敵になる男の後姿を眺めながら、どこか嫉妬の籠った視線を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044p/>

とりあえず走れ

2011年7月31日03時28分発行